銀魂　もう一人の侍

春桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀魂　もう一人の侍

【Ｎコード】
Ｎ９７７４Ｎ

【作者名】
春桜

【あらすじ】
黄昏の下に、異端な少女は死体と共に座っていた。彼女を見つけた少年坂田銀時は彼女を自分と重ねて見る。二人はともに戦場を駆けた。そして二人はそれぞれへ歩んでいく。

序章　私（前書き）

どうもです。春桜です。薄桜鬼とリンクし、主人公の女の子は私の小説のオリジナルキャラにやってもらいます。恋愛はあるかも。ギャグが書けない私を呪ってください。

序章　私

どうか。どうか。私を笑って。
どうか。どうか。醜く生きる私を殺して。

人を愛すことができない私を許さないで。
人を殺めることしかできない私を憎んで。

あなたが優しいと私は弱く霞んでいく。
あなたが強いとあなたを妬んでしまう。

私は誰かを掴めない。
いつか失うことを知っているから。

あの日。あなたが現れたときに私は変われただろうか？
あなたから貰った命は輝いているだろうか？

私は弱い獣だ。

私は誰かを愛すことができないのにーーーーー。

あなたに愛されたいと永遠に願う。

この命が消えてもあなたが私を忘れてしまっても。

ああ。だからあなたが終わらせて。

あなたが私を最後まで見ていてくれるなら何もいらない。

そして最後に言う言葉。

さようなら。

第一章　黄昏の血（前書き）

更新遅れてしまって申し訳ありません！！ほんとにすみません！

第一章　黄昏の血

その日は寒い寒い雪の降る日だった。坂田銀時少年は独り山奥へ歩いていた。先生におつかいを頼まれて不本意だが先生の言うことは聞く。銀時は歩き続けていた。
しかしどこからか悲鳴がこだました。銀時は驚いて空を見上げた。空は冬だというのに赤く染まり、向こうのほうはもう闇でしかなかった。銀時はその悲鳴のほうへ走った。荷物は重かったが構わず走った。そのとき自分が何を思い走ったのか全く覚えていない。

走った先にあったものは侍の死体。その死体の上に髪が黄色い少女がちょこんと座りこんでいた。不意に銀時はその姿をかつての自分と重ねた。自分を同じことを少女もしているのではないだろうか。
「おい。」
銀時は思わず声をかけていた。自分でも驚くほど冷静な冷たいような声だった。
少女は振り返った。なぜか夕日で彼女の顔が見えなかった。少女は立ち上がり、少し前に足を動かした。すると彼女の顔が見えてきた。細い腕に似合わない、重そうな刀を持ち、頬や着物や髪が血に濡れていた。
彼女は微笑むように銀時に顔を向けるがその顔は悲しみに満ちていた。
「・・・・・お前がやったのか。」
彼女は首をかしげ何を言っているのかわからないという顔をした。
銀時は彼女に近づいて彼女を見つめた。彼女の瞳は薄い水色でキラキラしていた。けれどその瞳にすんでいる闇はかつての自分とまっ

たく同じだった。意味もなく、戦場で落ち武者狩りをしていた自分・・・。
「お前の名前は？」
「ない。」
彼女はきっぱりと言った。
「ここで何してる？」
彼女は答えなかった。銀時は彼女の腕を掴んで、その刀を捨てさせた。
「何を・・・。」
「意味のねぇことはやめろよ。その刀はそんなことするためにあるわけじゃねぇだろ。」
「・・・・！」
「血つけてそんな顔して何の意味があんだよ。お前・・・・・。」
彼女は銀時を見つめた。
「侍になりてえか？」
「侍・・？」
「俺はお前に・・・・何か感じるんだ。うまく言えねぇけどお前は・・・・。」
彼女はうなずいた。
「え？」
「私・・・生きてても意味ないと思った。けど夢ってあると思う。私・・・この人たちの息の根をとめてしまった。でも悲しかった。だって強かったもの。」
「・・・・！」
「彼らはきっと侍だから・・・そうだよね・・。」
彼女は泣いていた。いや銀時の見間違いだったかもしれない。
「俺と・・・強くなろう。」
銀時は手を差し伸べた。彼女は不安気な顔をしていただろうが微笑んでいた。そしてその手をとった。

そして彼女は銀時と共に歩んでいくのだ。
真の侍の道を・・・。

第二章　来訪

あなたに会ってもいいでしょうか？

「おはようございまーす。銀さん。神楽ちゃん。」
志村新八はいつものように万屋銀ちゃんに出勤した。全く給料は払わない男。ちゃらんぽらんでいつも目が死んでる坂田銀時。このように人間でありながら新八は彼の真っ直ぐな生き方に惚れていた。本当にいい加減な大人ではあるが・・・。
「おーう。新八。やっぱり今日も駄メガネアルな。」
神楽はいっぱいの米をがぶり食いながら新八に言った。
「何だよ！今日も駄メガネって！」
浅いツッコミをいれながら新八は寝ている銀時に目を向けた。
「銀さーん。結野アナのお天気予報はじまっちゃいますよ～。」
「・・・・。」
ジャンプで顔を隠していた銀時はテレビにかぶりついた。
「うっせえな。このメガネ。わーってんだよ。銀さんね。もうパフェ食べてないのー。金なくて全然食べてないのー。当たり前のこと言うんだったらな、パフェ食う金くらいだせや！だからテメーはメガネなんだよ！」
「それとこれとメガネは関係ねぇだろぉぉぉぉ！だいたいアンタが最近全然仕事しないからだろー！！」
「うるせーよ。不景気なんだよ。知ってるでしょ～？全国のサラリーマンは子供におもちゃも買えなくて一杯のビールも飲めないの。子供が母ちゃんにおもちゃねだっても母ちゃんは涙ぐんで『ごめん

ね・・・。プリ○ュアのフィギュアは買ってあげられないの・・・。』って言うんだぞ？それを・・・テメーは。息子におもちゃぐれぇ買ってやれ！！」

「何の話だぁぁぁぁぁ！！なんだよプリ○ュアのフィギュアって！！なんで息子がそんなのねだってんのォォォォ！ていうか僕に息子なんていないんですけどォォォォォォォォ！！」

「あーもうううるせえな。買ってくればいいんでしょ。そのかわりご飯は食べられないわよ（泣）」

「もうめんどくせぇぇぇぇ！！！何母親口調になってんのォォォォォォ！？」

といつものように二人はボケとツッコミをしあう。

とにかく銀時はぐうたらしている。仕事はたんとなくなった事実は確かだ。新八は銀時を見るのに正直疲れていた。定春の食事代も、神楽の異常な食事も・・・とにかく大変だった。

新八がため息をつくとベルが鳴った。

「どうせ新聞の勧誘だろ？それかＮＨ○の受信料。俺、振り込んだつもりだったんだけどなー。」

（絶対嘘だ。）

新八は一瞬でわかった。何度もベルが鳴るので新八はとうとう玄関まで歩いた。

「はーい。はーい。今開けますよ。」

新八は勢いよく開けた。

「！」

「志村新八くん？」

金髪の黒い着物を着た女性。顔は白く、すべてが整い、瞳は澄んだ水色。侍なのか銀時を同じように木刀をさしている。

「は、はい。そうですけど・・・。」

彼女は微笑むと嬉しそうに言った。

「ここに坂田銀時さん、います？」

「え・・・。」

「何だー新八。客・・・・・・!!!」
玄関まで歩いていた銀時は女性を見て腰を抜かした。
「お、お、お前・・・・・・。」
「久しぶり。銀時。」
銀時は完全に腰を抜かし、震える声で呟いた。
「ゆ、ゆ、雪音・・・・・。」
雪音と言われた女性は満面の笑みを浮かべる。

「お、お茶です・・。」
「ありがとう。新八くん。」
新八はお茶を雪音にだすと彼女の微笑みにドキリとしながら神楽にひっぱられた。神楽は小声で新八に囁く。
『なにアルか?あの女。』
『僕にもわかんないよ・・。でも銀さんと知り合いみたいなんだ。』
『もしかして・・昔の女アルか。』
『えええ!?あの銀さんに!?あんな綺麗な人が!?』
『銀ちゃんはあああみえて童貞じゃないアルからな。もしかしたら・・・。』
『えええええ!!?ぎ、銀さんが・・・。』
ますます不思議だ。あんなちゃらんぽらんの銀時にあんなまともな人が・・・。世の中わからない。
「で。何の用〜?」

銀時はやる気なさげに言った。
「ちょっと！銀さん！知り合いなんでしょ！？せっかく訪ねてくれたのに・・。」
「そうアルよ！銀ちゃん！昔の女だからって冷たくするのは最低ネ！」
「だれが昔の女だよ！餓鬼はあっち行ってろ！！」
「ふ、あはははは。」
雪音は笑いだした。
「あはは・・・銀時は楽しくやってるんだね。あ。申し遅れました。私、相楽雪音といいます。銀時とは幼馴染。よろしくね。」
彼女は微笑んであいさつをした。
「これ。お土産です。」
雪音はどこからか特大ケーキをとりだした。
「いっぱい食べてねー。」
この時、神楽はもう彼女のことを認め、敵意は全く見せなくなった。
「・・・・・。ったく。何の用だっつってんだよ！」
銀時は不愉快そうにぶつぶつ言った。
「特になんでもないんだけど。最近、あんたたちの噂をよく聞くから訪ねてきたの。迷惑だった？」
「迷惑だ。迷惑。さっさと帰れ。」
「神楽ちゃーん。おいしい？」
「うん！うまいアル！ありがとな！雪音ちゃん。」
「いえいえ。喜んでもらってうれしいわ。」
「おい！聞けぇぇぇ！！」
彼女はお茶をすすった。
「そんなに怒ることないじゃない。あんたと私の仲でしょ？」
「え。」
「おいィィィィ！何意味不明なこと言ってんだァァァァ！！新八ィ！思春期の妄想だけはするな！」
新八にはもう無理だった。妄想はふくらんでいく。

「ふふ。まぁいいわ。元気そうでよかった。」
「ちっ。てめー今何してんだよ。」
「うん？前よりは楽しいこと。」
銀時は眉根を寄せる。昔のことを思い出した。
「高杉のことも話で聞いた。桂くんともこの間あったのよ。」
「！」
「ま。また会えると思うから。今日はこのぐらいで失礼するわ。じゃねー。」
雪音はさっさと去って行った。

「雪音さん。探しましたよ。」
「あら？もう。トシ、総悟。」
彼女は不敵に微笑んだ。

第三章　変な女（前書き）

頑張ってギャグに挑戦したけど無理だわw

第三章　変な女

相楽雪音は真選組の屯所に住んでいた。それは隊長としてだ。
「たく。なんであんたはどこかにフラフラ出かけるんだ。」
土方は煙草を吸いながら言った。
「うるさい。マヨラー。マヨネーズ工場ぶっつぶすぞ。」
「て、てめー！そんなことしたら全国のマヨラーは・・・。」
「心配すんな。あんたにだけはマヨネーズ売らないから。ほかの人には売るから。」
雪音は煙管を吸うと横になってテレビをつけた。
「今日、クレ○ンしんちゃんの再放送あるんだった。」
「午後からは川猿の再放送がありますぜィ。」
沖田が新聞をみながら言った。
「マジ？でもどうせ映画の宣伝のためでしょ。３Ｄとかやっちゃってさ。見に行くけど。」
「おおい！てめー！！」
土方は大声で叫んだ。
「何よ。」
「てめーは自覚があんのか！真選組の唯一の女組長相楽雪音！それなのにお前ときたら・・・・。仕事はしねぇし金使いは荒れえし・・・・。」
「だから？そんなのあんたも一緒でしょ。前なんかすごいオタクのＤＶＤを・・・。」
「だぁぁぁぁ！！てめーぶっ殺されてえのか！！！」
「まぁまぁ土方さん落ち着きなせぇ。はい。コレ。」
沖田が渡した本は『オタクの男がエルメスと結婚する方法』という本だった。

「なんだコレェェェェ！！てめーふざけんな！俺が電車だとでもいうのか！？この女がエルメスだとでもいうのか！？」
「え。土方さんって知ってんだ。電車〇。」
「・・・・・。」
「だぁうるさいなぁ。静かにしてくんない？これさ、一様シリアスって設定なんだわ。あんたらのせいで台無しだわ。」
「てめーが一番台無しにしてんだろ。」

雪音は土方に見つからないように屯所を抜け出した。土方が言うには雪音は仕事もせずぐうたら生活していることが気に食わないらしい。制服もめったに着ないから余計だろう。沖田と性格も少し似ているため二人はよく結託し、土方で遊んでいるのもまた気に入らないらしい。
「あれ。雪音さんじゃないですか。」
「や、山崎くん・・・。」
（やべぇぇぇ。見られちった。）
「どこに行くんですか？」
「ちょ、ちょっとコミケに・・・・。」
山崎は冷めた顔をした。
「え。それって・・・。」
「これ書いたのよ～見てくれる？」
「も、萌え萌えメイド学校にいく・・・？」
「そ、そうなの・・・。どうかな？売れるかな？」
これは決して雪音が書いたものではない。雪音が土方の部屋から盗んだ、オタク漫画だ。売ったら酒代になると思ったのだ。
「これ大丈夫なんですか？一様これ少年誌ですけど。モザイクかけ

てる時点で小学生とたまたま見ていた親がチャンネルかえて気まずくなるパターンですよ・・・。」
「だ、大丈夫よ～チャンネルかえない親もいるわ～（棒読み）」
「それが問題なんですか。」
「うっせーな。ジミー。だからてめーはジミーなんだよ。クソヤロー。」
「何！？なんでいきなりそんな怒ってんの！？やめてよ！傷つくから！！」
「うるせぇぇぇ！私だってな！ストレスたまってんだよ！こんな男所帯で山崎くんみたいなジミーばっかだし・・・山崎くんのコスプレも見たくないし・・・。山崎くんのあれヘタクソだし・・・ＯＰで一人いつもはずれてるし・・・。」
「おいィィィィ！全部僕のことだろ！？ＯＰではずれてるの僕だけじゃないだろ！！」
「はいはい。わかったわかった。じゃ。」
「待ってィィィ！！」
山崎は雪音の肩を掴んだ。
「ああ？」
雪音は山崎の胸倉をつかむ。
「おい。山崎ィ。私がどこで何しようと勝手だよね？ん？」
「ははひゃい！」
「よーしよーし。トシに言ったらバトミントンを二度とやれねぇ体にしてやるからね。」
雪音は満面の笑みを浮かべ去って行った。

「あの。銀さん。本当にどういう関係なんですか？」
「ああ？」
「雪音さんですよ。朝来た。」
「あいつは・・・・。本物の・・・・。」
「本物の？」
「侍だよ・・・・。」

第四章　死の花（前書き）

前のやつ、第四章とかうってすんませんでした。間違いです。これが第四章です。

第四章　死の花

そうよ。私のことは構わないで。
私は逃げ出した。
大切なもののため、大好きなあいつらのため。そして復讐。
私は全て捨てた。
なのにあなたに会ってしまった。
私は・・・・。
許されたいのだろうか。

雪音は江戸の町に歩き、自動販売機でジュースを買って飲み干した。
いつもの公園のベンチに座り、缶を自動販売機の横のゴミ箱に捨てる。見事命中。
と思ったら。
「うっ。痛い！ちょっと何すんの！？」
「え？」
すると作業服を着てる長谷川の姿があった。彼とは居酒屋や、パチコン屋で意気投合したまに愚痴を言い合う仲だった。
「あれ。雪音さん。」
「こんにちは・・・。あの何やってるんです？」

長谷川はゴミ箱をあさっていた。
「いや。あのね。私・・・。それはダメだと思うのよ。それ。みんなの唾液とか入ってそうじゃん？あの私、一様警察なのね？あのそれはダメだよ。グラサンとして。」
「グラサンとしてって何！？もうやめて！そんな目で見ないで！！」
長谷川は雪音の横に座り、たばこをに火をつけた。
「仕事です。仕事ー。」
「ゴミ箱あさる仕事ってどんな仕事だよ。もっとマシな嘘つけよ。」
「もう！なんでそんな冷めてんの！マジで俺をグラサンとしか見てないでしょ！」
「そんなこと一言も言ってないんですけど。ま。いいですよ。どうせ。缶を集めて売るんでしょ。最近見かけるもんね。うん。あれ、すごい良いと思いますよ。地球環境にいいですもんね。あ。二度と私に近付かないでね。」
「ひどーー！！最後の一言ひどーー！！俺と雪音さんじゃん！そんなこと言わないでよ！！」
雪音はふっと笑ってグラサンを取り上げる。
「え！！？何？？やめて！グラサン！え？」
「ではグラサン。ごきげんよう。」
グキッ。何の八つ当たりか。長谷川のグラサンは灰へと消えた。

「副長！！雪音さんが行方不明です！！」

夜になっても雪音は帰ってこなかったので山崎は土方に報告した。
「ああ？なんだと？山崎。連れ戻してこい。」
「む、無理ですよ！！あんな恐ろしい雪音さん！！無理！」
「ああ？てめぇ。命令も聞けねぇのか？」
土方は山崎を締め上げる。
「まぁ。待たんか。トシ。雪音もM〇テの時間には戻ってくるだろう。」
近藤は冷静に言った。
「だめですぜぃ。近藤さん。あの人はテレビオタクで、自分が毎週見てる番組は録画して三回見てるんですぜぃ？」
沖田は淡々と言う。
「本当か！では〇〇も〇〇〇もあるのか！」
「ええ。ここに。」
沖田はCDを取り出す。
「クソッ！あの女！おい。総悟！連れ戻しに行くぞ！」
「いいですけど心あたりがあるんですかぃ？」
「一つだけある・・・・。」
土方と沖田は屯所から出た。

「あれー？どうしたんですか？二人とも。」
新八は夜に訪ねてきた土方と沖田を見た。万屋に訪ねてくるとは。
「ああ。この女を探してるんだが来てないか？」

土方に見せられた写真は雪音がとても綺麗な笑顔で笑っている写真だった。
「雪音さん！？」
「おい。どうしたアル？新八？」
「チャイナは黙ってろい。」
神楽が近付くといつもと同じ沖田とのいが見合いが始まる。
「どうしたんですか？雪音さんが・・・。」
「どうしたもこうしたも。なんでお前が知ってる。」
「え。今日の朝雪音さんが来て・・・。銀さんを訪ねてきたんです。」
「あいつを？」
土方の真剣な顔に新八は頷いた。
「あの、土方さんはどうして雪音さんを探してるんですか？」
「あいつは真選組の唯一の女隊長だ。だから探さねぇといけねぇんだ。いつもなら夕方に帰ってくるんだが・・・。それよりあいつと雪音が関係あるのか？」
「雪音さんは幼馴染って言ってましたけど・・・。ていうか。ええ！！？雪音さんが真選組！？」
土方は舌打ちした。
「何だ・・・。くそ。あいつは？」
「銀さんなら仕事に行くって・・・。」
「嫌な予感がする。」
「え？」

雪音は橋の上で自分の顔を見た。川に映る自分の顔を。
金髪で誰にもかわいがられなかった自分。拾ってくれたのは歳も変わらぬ銀髪の少年だった。
少年とその恩師は自分に名前を与えてくれた。そして戦いを教えてくれた。なのに。
今の自分は何もできない。闘うことも殺すことも。もう疲れた。
そしてどこかに・・・・。
彼と行きたいと望む自分がいる。

「・・・・・っ。」
「相楽雪音とお見受けする。」
「！？」
振り返ると黒い異質な男がいた。
「あんたは・・・・？」
「あなたのお命、いただく。」
男は雪音に向かっていった。

第五章　記憶の舞

雪音は抜刀した。木刀で相手の刀を受け止める。
（重いっ！）
久しぶりにこんな相手と対戦した。最近は屯所でゲーム三昧。ソウル〇ャリバーではオールクリア・・・じゃなかった。
「ふふふ・・・。さすがあの人が話す女だ。ワタシの剣を受け流すとはね。」
雪音は木刀を刀にぶつけたが刀に髪を切られていた。
「チィ・・・。」
「さぁさぁ。まだまだ！！」
彼は帽子を投げ捨てる。奴の顔は醜く、言葉で言える顔ではなかった。
「ははは！すみませんねぇ。怖い顔を見せてしまって。」
そういって男は包帯を丁寧に顔に巻いていく。
「貴様は何者だ！何故私を！」
雪音は叫んだ。
「ふふ・・。あの人が言う女はどんなにいい女かと思いましてねぇ。これほどいい女だとは思いませんでしたよ。」
雪音は男を睨み続けた。
「さぁ。続きです！！」
激しいチャンバラが始まる。相手の刀が重すぎて受け流すのがやっとだ。だが雪音の実力は半端ない。雪音はいっさいの隙も見せず逃さなかった。木刀を思い切り振りきると男の腹に命中。ボキっと言う嫌な音が聞こえる。

「もう少し上なら動けなかったが・・・。やはりろっ骨は固いな。」
雪音は唇を舐めながら言った。
「ふふふ・・・。アナタ・・・・飢えていますね。」
「？」
「あの人と同じだ。獣。その眼。殺したいのでしょう？ワタシを。」
「！」
「その綺麗な瞳が赤く染まるとき。アナタは我々の仲間だ。」
「・・・・意味わかんないんだけどおたく大丈夫？頭いかれてんじゃないの？だいたいあの人って誰よ。私にわかるように説明してよ。」
そういって男は詰め寄って刀を振った。雪音は避けて、けりを腹にお見舞いする。男は血を吐き、家の壁にぶつかった。
雪音は投げ捨てられた刀を拾い、男に近寄った。
「あーあ。馬鹿じゃないの？蹴られたときは刀を離しちゃダメよ。こういうことになるから。」
「ふふ・・・・。先ほどの質問に答える前にワタシから質問です・・・。」
「・・・・・。」
「アナタ・・・。何故、刀を持ち歩かないのですか？真選組の方は持ち歩いているようですが？」
「それは・・・・。」
「アナタはわかっているはずです。アナタは殺すことしかできないからです。」
「！！！」
「あの人・・・そう高杉晋助様と同じようにね。」
「たか・・・・すぎ・・・？」
「アナタは高杉様と同じ寺子屋に通っていた・・・・。そこで出会ったそうですね？そして人斬りになった。」
「！！！！」
「ふふ・・・。アナタが刀を持てば全て斬る。破壊しかできない。

素晴らしい方です。アナタは。」
「黙れ！私は・・・・。私は・・・・・。」
「ともにきませんか。相楽さん。あの方がアナタを待っていますよ・・・。」

貴方はまだ私を苦しめるの？
許して。お願い。
許してよ・・・・・。

「そんな変態野郎の言うことなんか聞くな。」
「ぎ・・・銀時・・・・？」
銀髪の侍は闇夜に突如現れた。

第六章　星の夢（前書き）

更新遅いと思います。ハイ・・・。

第六章　星の夢

「どうして！」
雪音は叫んだ。銀時はこちらに歩いてくる。
「どうしてもこうしてもお前がストーカーに気がつかねぇからだろ？ストーカーKさんが俺に電話してきてな。ていうか何？またストーカーさん増えたわけ？お前気をつけたほうがいいよ。」
死んだ目をしていたのにいつの間にかあの頃の目になっている。
雪音は奥歯を噛んだ。唇を噛んだ。すると男は笑いはじめた。
「ふははは。そちらの方も聞いてますよ。坂田銀時。紅桜の件では高杉様も手を焼いたとか。しかし・・・・・。」
銀時は男を睨んだ。
「もう駄目だともおっしゃってましたよ？坂田さん。アナタは死んでいる。昔のような生気がない。ふふふふ・・・。素質はあるんですがねぇ・・・・。」
「お前に褒められても嬉しくねーんだよ。変態グルグル河童巻き。河童のほうがもっと男前だよ？お前。で。こんなとこで女に何してるんだ？警察呼ぼうか？」
「ふふふ・・・。生憎ですが口説いた相手にフラれまして。だから・・・・。」
その瞬間。雪音は目を疑った。雪音が握っていた刀は消え、男の手に渡り、一瞬で銀時に詰め寄り銀時の胸を斬った。

「な・・・・に・・・・・。」
雪音は硬直し銀時が倒れるのをスローモーションで見たその瞬間。
昔のことがポツリポツリと蘇ってくる。先生のこと。あいつらの背中・・・・・・。
そんなことよりも雪音は殺したいと願った。この男は自分の大切な人間を斬ったのだから。
雪音は木刀を男の背中にふりきった。すると男は傷つき、血を吐く。だが振り返り雪音を斬ろうとする。
「お前はでしゃばんな・・・・・。」
「銀時！」
雪音は後ろに距離をとり、わずかに聞こえる銀時の声を聴いた。銀時は血反吐を吐きながら立っている。
「痛かったぜ。クソヤロー。」
「ふふ・・・。もう死んだかと思いましたよ。安心しました。こんなことでやられたんじゃワタシが楽しめない。」
男は包帯の裏でこの世のものではない悪魔の笑みを浮かべた。最高に人を殺すことを望む。破壊が全て。
高杉の顔を思いうかべると雪音は足が動かなかった。
目の前では銀時と男が刀をまじえている。男のほうが有利だった。
真剣のほうが木刀よりも重く鋭い。木刀は速いが銀時の怪我では動くこともままならないだろう。
銀時は強い。かつて白夜叉と呼ばれ、仲間にも恐れられていた彼。
銀時の戦の姿は気高い獣だった。雪音にはそう思えた。しかし彼は信念がある。高杉とは逆の信念が絶対に存在した。誰も気が付いていなかったが。
（私は・・・・・・。）
雪音はそっと涙を流した。そして銀時は動けなくなった。

「ふふ・・・・。もう終わりですか。用無しの方はこの世にはいりません。死んでくださいーーーーー。」
「やめろぉぉぉぉぉ！！！！！」
叫び声か雄叫びか。雪音にはそう聞こえたが予想していた。
新八と神楽。あの銀時があんなに嬉しそうに彼らと共にいた。雪音は単純にそれを見て嬉しくなったのだ。二人が銀時を大切に思っているか雪音には少ししかわからない。きっと雪音が想像しているより深いものなのだろう。
「てめぇ！銀さんを殺したら僕がお前を殺してやる！！」
「この包帯グルグル河童巻きがァァ！！許さないアル！！」
神楽が叫び、男にけりをくらわす。しかし男は俊足の足で移動し、雪音を抱きしめる。
雪音は男の灰色の綺麗な瞳を見つめるしかなかった。雪音は何もできなかった。体も何もいうことがきかない。
「待ってますよ。雪音さん。我々の元に来てくれることを。高杉様もお喜びになられます。ワタシの名は鬼平楽靖(おにへいらくせい)よく覚えていてください。雪音さん。アナタは憎んでるハズだ。幕府を。先生を殺した幕府を。」
「！！！！」
「アナタはこちら側の人間のハズです。アナタは何を思っていましたか？ワタシを殺したいと思ったでしょう？アナタは根っからの人斬り。こんな光の下でぬくぬくしていてはいけませんよ。いつでも待っていますよ。月がよく見える船の上でね。」
誰にも聞こえないように耳元で囁いた鬼平は闇夜に消えた。その時神楽のけりが雪音に直進した。
「なっ！」
神楽は声をあげ止めようとしたが無理だった。雪音はうつむいて神楽の足を掴むと放り投げた。

「ぐっ・・・。」
神楽は浅い川に落ちた。神楽は濡れたが怪我はなく、すぐに起き上がった。
「神楽ちゃん！大丈夫！？」
「わたしは大丈夫アル！それより銀ちゃんが・・・！」
神楽は橋の上にジャンプし銀時に駆け寄った。銀時は気を失っていなかった。ただ雪音をじっと見つめていた。
「アイツを・・・。」
「銀さん！？」
銀時は手を伸ばした。
「なんでだよ・・・。」
そして銀時は眠った。

しばらく雪音は動けなかった。しかし銀時の声が聞こえた。かすれた弱弱しい声。知っている。人が死ぬのは簡単だ。斬ればいい。どこでもいい。刀で斬れば。死ぬ。
しかし人間というのは不思議で。大切なものほど簡単に死なないと思っている。
けれど今は。今は考えることが怖くて。
死なないでと望むことこそ私には許されない。
銀時・・・・・。私は。

第七章　獣の正体（前書き）

紅桜のやつをモチーフにしてるんです。うる覚えだからほとんどオリジナルですけどね。
あと鬼平ですが、おにへいｏｒおにだいら。どちらでもいいですよ。

第七章　獣の正体

「高杉様。」
「鬼平か。遅かったじゃねぇか。」
よく月が見える船の上に高杉は煙管を吸いながら立っていた。秋の空は冬になり始めている。鬼平は仁蔵のかわりといってもいいほどの腕の持ち主。いやそれ以上。高杉はこの忠誠心が高い男を気に入っていた。暴走もしない。命令だけに従う鬼平。しかし破壊心が強い。
「挨拶に伺ってたんですよ。アナタの思い人に。」
「雪音のことか。」
「はい。あれほどいい女とは思ってませんでしたよ。」
「そうだろう？クハハハ。」
高杉は大笑いしていた。
「あんな天使のようなお顔をしているのに心の奥は・・・・どすぐろい。あの瞳には殺意しか沸いていませんでしたよ。彼女が刀を持ったならどうなるんでしょうね？」
「ふっ。あいつは俺と同じだ。同じように育ち同じように闘ってきた。あいつは・・・・あんなところでいる人間じゃねぇ。誘ってきたか？」
「はい。もちろん。しかし来るでしょうか？真選組の方々がお許しにならないのでは？」
「そんなことはねぇ。あいつは自分のことは自分で決める奴だ。絶

対に来る。」
振り返った高杉の瞳は黒く染まっていた。
「あと一つ。気になることが。」
「何だ。」
「彼女は人間ですか？まるで・・・・。」
高杉は鬼平に近付き鬼平の肩をぽんと触れた。
「まるで・・・・夜兎か。」
「はい。」
彼女の戦闘能力は男の力であり強い。人間ではないのではないかと思う。白い肌に綺麗な青い瞳。夜兎の特徴だ。
「違うな。あいつはそんなもんじゃねぇよ。」
「・・・・・・。」
「準備してろ。あいつが乗り込んでくるはずだ。」
そういって高杉は去って行った。

銀時は重傷を負っていた。今は新八の実家で休養している。
「お妙さん。もうご飯作ってもいいですか？」
「ええ。ありがとうね。雪音ちゃん。私も作れるんだけど。」
お妙は微笑んで雪音に言った。雪音はしばらく真選組に帰っていない。銀時のことが心配だった。新八も神楽も雪音を責めなかった。
雪音は二人に謝り二人は何も言わなかった。何もなかったように接してくれる。
「すみません。雪音さん。料理まで・・・・。」
「ううん。こちらこそずっと泊めてもらっちゃって。ごめんね。」
新八は控えめに言った。神楽と新八と銀時は至福の時を送っていた。材料は真選組のものを使い毎日三食雪音が作ってくれる。プロのようにうまくはないがお妙があんなものだし神楽も銀時も食にずれているところがあるから雪音の料理は素晴らしいものだった。
雪音は銀時にカレーを持って行った。
銀時は静かに上を見上げている。
「ご飯。」
銀時にカレーを渡すと雪音は彼の瞳と目があった。
「お前。わかってるのか？」
「何が。」
「あいつは高杉の仲間だろ。」
「！・・・・。」
「お前はどうするんだ？あいつの元に行くのか？」
「わからない。ただ私のしてきたことは許されることじゃない。高杉を傷つけたことも。あなたたちを裏切ったことも。」
（裏切った・・・・？）
神楽と新八は聞き耳を立てていた。
「雪音ちゃーん？」
お妙がこちらに来たので新八と神楽はすぐに去った。

「帰るぞ。」
家にやってきたのは土方と沖田だった。
「だから帰らないって。何回言ったら気が済むの？」
「じゃあ話せよ。どうして万屋が怪我してる？」
土方の厳しい声に雪音の眉が上がる。
「関係ないでしょ。いつも銀時の敵なのに。」
「お前のことだ！お前は何も話さねぇから！」
土方は怒っていた。
雪音は押し黙った。
「雪音さん。」
その時沖田が珍しく優しい声をかける。沖田はドSだが雪音の前では優しい青年だった。
「あんたはいつか帰ってくる。それなら近藤さんを納得させられると思います。」
雪音は頷いた。
「ホラ帰るぞ土方ァ。」
「てめぇ！総悟！！」
沖田は殺すと脅しながら二人は去って行った。

「ねぇ。銀時。」
「ああ？」
「私は幸せ者だよ。」
怪我で寝ている銀時に夜中雪音は声をかける。雪音は夜が好きだった。夜は・・・・。殺すことが多かったから。
「私はたくさん人を殺した。天人を殺した。だけど残ったものは何もなかった。先生を殺した幕府を憎んでる高杉が私を憎んでないはずがない。私は今幕府の犬だからね。」
微笑んだ雪音の顔は悲しかった。
「でも私はあいつらが大好きなの。最近はさ。飲んだくれて、働きもせず、ゲームばっかしててどうしようもなかった。あの夜に久しぶりに殺意を抱いた。そしてそれがとても私が望んだことだった。」
「・・・・・・・・・・・・。」
「私は自分のために生きるから。」
「お前！」
銀時が起き上がったので隠し持っていた薬を飲ませた。銀時はあっという間に布団に寝ころんだ。
「ごめん。私はあんたを巻き込むわけにはいかないんだよ。」
その日雪音は刀を持っていった。

愛しい人でも。
私が全て悪くても。
私はあいつらとの未来を夢見てる。
過去は大事だけど悲しいものでしかない。
そしたら彼らはどうなる？
私は彼を殺すのか？
彼は私を殺すのか？
どちらでもいい。
私は獣だ。
私は何でも斬ってやろう。
そんな私の覚悟を。
あの人は褒めてくれた。

「松陽先生・・・・・。」
雪音は夜の道を刀を抱きしめ歩いた。

第八章　真実の聲

雪音は夜の道を歩いていたときあることに気が付いた。
（このままじゃ、ダメ。）
雪音は走った。

雪音が向かった場所は真選組の屯所。雪音は自分の部屋のタンスから自分に与えられた隊服を広げた。雪音は着るのが面倒くさくて全然着ていなかった。つねに着物で過ごしていた。
「遅いお帰りだな。」
「帰った訳じゃないよ。」
土方の声に雪音は驚いた様子もなく着物を脱ぎ始めた。もともと襖が閉まっていたので安心だ。
「どこに行くつもりだ。」
「私の過ちを正しに行くの。」
「お前の過ちってなんだ？お前は何をしてきた？俺たちにも話せないのか。」
雪音は押し黙った。そして勢いよく襖を開けた。土方と距離が近くなる。彼は珍しく煙草を吸っていない。
雪音はまっすぐ土方を見つめると土方は避ける。
「私はあんたたちといたいから・・・・。だからぶっ潰す。またここに帰りたいから。」

雪音は特別だった。土方よりも年下だが負けん気が強く、ぐうたらなのに剣の腕は沖田と互角。近藤も頭が上がらない女。不思議な女だった。彼女の匂いは・・・・。なんというか血なのだ。
あの沖田が雪音には意地悪を言わない。あの沖田が。
土方はどうしても行かせたくなかった。どうせ口で言っても聞かないのなら。
「勝負しろ！俺が勝ったら行くな！」
「いいよ。私が勝つから。」
雪音は不敵に微笑んだ。

二人は屯所にある道場に向かい、竹刀を持ち対峙する。お互い一言も発しず目だけで語り合うようだった。呼吸さえも苦しい。土方は改めてこの女の恐ろしさを知った。
性格も筋金入りの頑固さ。そして目で殺すような殺気。
雪音と土方が踏み出したのは同時に思われたが違った。雪音のほうが断然早く土方の竹刀は手から離れて行った。
「・・・・・！」
「トシは私には勝てないよ。」
雪音の見下ろす瞳は赤く見えた。
「ごめんね。私は根っからの人斬りだから。人を斬ることが大好きな人間だから。」

雪音は隅に置いていた土方の刀をとった。
「これ、借りてくね。」
土方はうんとも答えなかった。ただ叫んだ。
「てめー！嘘つくんじゃねぇ！俺は知ってんぞ！お前が夜中眠らず泣いてることなんてな！」
「！！！」
陰で聞いていた沖田も驚いた。
「お前。誰より気にしてるからな。人間のことを。天人を殺してもどうでもいいとも思ってねぇのか？どうなんだ？」
雪音は苦笑した。
「泣いてないよ。私は人を斬るのが好きなの。」
「だから！嘘言うな！」
土方は雪音を睨んだ。
雪音はどうじることなく背中を向けた。
そして二人にそっと呟いた。
「いってきます。」
嬉しそうに言った彼女を沖田も土方も止められなかった。

雪音は再び夜の街を歩いた。人が全くいないのこと。怪しすぎる。
（15人くらいか。）
追手がいる。大通りを通っている訳ではない。高杉の場所なら知っている。日々江戸を歩き回ったりネットをやりまくっている雪音だ。地理は完璧。
雪音は広い公園に出た。それ以外に広いところはなかった。
（公園で人殺しは嫌だなぁ。）
そう思った。その時人影が現れる。数えると15人。
（ビンゴ）
「何〜？なんか用？」
「相楽雪音だな。」
するとチャラチャラしている不良の感じな男達が顔を見せる。
「あんたたち。私が真選組とわかってて声をかけてるの？何？ナンパ？はっ。そんなのそこらへんのねぇちゃんにしな。それとも誰かに頼まれたの？」
「うるせー！被害妄想すんな！ちょっと可愛いからってな！」
「あー。もう面倒くさいな。逮捕するよー？」
「そんなおどし聞かねえな！いいからついてこい！」
「ちょっと待って。あんたたちは私を殺しに来たわけじゃないんだね？」
「ああ。アンタを連れて来いと言われただけだ。」
「誰に？」
「よくわからねぇ・・・・・。包帯の男に。」
（あれか。・・・・・・。嫌な趣味してやがる。）
雪音はふっと笑んだ。
「いいよ。案内して。」
雪音は大人しくついて行った。

ぞろぞろと大人数ではたから見たらなんだこの集団。雪音は溜息をついた。
「私・・・。てっきり殺せれんのかと・・・。思ったんだけど。」
リーダー格のわりと男前な金髪の不良がこちらに振り返った。歳は雪音よりも上に見える。
「俺たちにそんな度胸ねぇよ。」
「それはそれで悲しいわね。で。報酬はいくらくれるって？」
「さあ？」
「さあって・・・。あんたたちなんでこの仕事受けたの！？」
「暇だったから。それにあんたが女だって聞いたんで。それもすごい美人。」
いっせいに男たちが振り返って雪音を見つめた。雪音は今、隊服を着ているが胸のふくらみは見えるし化粧もしてないのに可愛い。男たちが見とれるのも無理はない。
「あんたたちね・・・。馬鹿じゃないの？いいか。よく聞けえええ！」
雪音は刀を金髪の男に向ける。
「私はこれを持ってる。いい？私は警察よ。殺せるの！市民なんか殺したってどうにもなんの！あんたたちは私がやろうと思えばいつでも死ねるの！わかった！？」

「は・・・・い・・・・・。」
男たちは冷や汗を?く。
「女だからって安心しちゃだめよ。いい?不良ってのはね。ヤクザみたいな男にメンチきって強くなるんだよ!今度から命令されたらメンチくらいきれ!」
「はいィィィィ!姐さん!!!!」
「あ、姐さん?」
雪音は首をかしげたが不良たちは雪音はただものじゃないと悟った。

男たちは雪音を男に合わせたくなかったが雪音がどうしても会いたいといい、案内してもらった。
「いいんですかぁ?姐さん。どんな変態かわかりませんぜ?」
「いいのよ。ていうか一度会ってるし抱きしめられたし。」
「はぁぁぁぁ!!?意味わかんねぇ!!姐さんに・・・・・!オイ!!てめーら!男をボコボコにしてやるぞ!」
「おおお!!」
男たちは盛り上がったが雪音の冷たい声ですぐにさめる。
「やめときな。あんたたちなら死ぬだけだよ。」
雪音の声は凛と響き男たちは何も言えなくなった。

「ここです。」
「そ。ありがとう。あんたたちはとっととかえって母ちゃんと一緒に寝ておやり。」
（予想通りだな。）
予想通りの場所にその船はあった。
男たちはためらいながら去って行ったり去って行かなかったり・・・。金髪の男は最後まで残っていた。
「あの・・・。死なないでくれよ！姐さん。」
雪音は微笑んだ。
「死なないよ。今度あんたらのとこに挨拶に行くから待ってな。」
「はい！！」
何故、こんなにもこいつらが優しいのかわからなかったが雪音は笑った。

「さぁ。仕事の始まりだ。」
雪音は船へ踏み出した。

第九章　たとえ死んでしまっても（前書き）

私は誰よりも長く・・・。

第九章　たとえ死んでしまっても

「ようこそ。相楽雪音様。」
月に照らせれている鬼平。雪音はゆっくりと足を進めた。
「おや。真剣をお持ちになっているではありませんか。やっと・・・。先ほどの男たちはどうでしたか？」
「何がだよ。あんた、マジで趣味悪いよ。」
鬼平はピクリと眉を動かす。
「あんたは私にあいつらを殺させたかった。この世に必要のない人間だから？ふざけんじゃないよ！」
雪音は叫んだ。
「この世に必要のない人間なんていない！死んでいい人間なんていない！あんたは人間をなんだと思ってる！？」
「ふざけているのはアナタですよ。人間はワタシを人間と認めなかった！！この顔を見て誰が人間だというのです！？あの方だけです。ワタシを生かしてくれたのは・・・・。」
鬼平も叫んだ。そして最後の言葉は優しかった。
鬼平は刀を抜いた。
「アナタだって人間を天人を殺しまくった！！何の情もなく、ただただ殺戮を繰り返していたアナタが何を言うのです！？」

「あんたに私の気持ちなんかわかるわけないよ。たださ。あんたみたいな甘ちゃんが高杉のところにいるのは間違ってる。」
「何！？」
「あんたは高杉のことを何も知らない。あんたはわかってない。」
「ア、アナタこそ！！高杉様を裏切り、幕府の犬になりさがって高杉様の何がわかるというのです！！」
「わかるよ。」
「・・・・・・。」
雪音の顔は誇らしく、輝いていた。それに鬼平は何も言えなかった。
「私は信じてる。私は高杉の思想をわからないこともないから。ただ関係のない人を殺し、何もない世界にするのならっ！私は止める。真選組の相楽雪音として！！」
雪音は鬼平に向かった。雪音の斬撃を鬼平はなんとか受け止める。
「くっ！！」
（なんだこれは・・・！こないだより・・・。）
強い。それが真実だった。
「鬼平楽靖・・・・・。昔はあんたも幕府の犬だったらしいね。だがあんたはヘマをした。それがお偉いさんのメンツをつぶす行為だった。あんたは仲間を売ったんだ。」
「黙れ！あいつらがワタシを売ったんだ！！」
「そんなの、あんたの勘違いだよ。」
「！？」
「あんたの仲間は攘夷派によって殺された。そうだね？」
「違う！幕府が・・・。」
「違わない。あの時あんたは出会ったはずだ。」
「！！」
「高杉はあんたをだました。あんたは上手く口車に乗ったんだよ！」
雪音の挑発的な言い方に鬼平は動揺する。
その時。バンバン！！銃声がなった。雪音はすぐに後退し、懐から、拳銃を取り出し、打つ。

相手も素早くかわす。その隙を雪音は斬りかかった。
しかし彼女は身軽でうまくかわした。
「そこまでっす！鬼平さん！騙されちゃいけませんよ！」
「また子さん・・・。」
「その女！嘘を言って動揺を誘ってるんす！」
バンバン。銃声が鳴り響く。
「適当なこと言ってんじゃないよ。高杉のおもちゃが。」
雪音の声色は男のように低かった。
「お前こそなんすか！？晋助様に気に入られて！！」
「黙れ。私とあんたは違うんだよ。」
雪音は斬りかかった。バンッ！！空が痛いほどの空気を与える。
「痛ッ！！」
「鬼平。私は言ったよ。死んでいい人間なんていない。そうだよ。この世にはいないんだ。必要がない人間も。天人がはびこるこの時代。天人は異端だけど分かり合える奴もいる。それがこの国だ。侍はいる。私が知っている人は侍だ。生きてる。だけどね。私は殺すんだ。人間を。愛されてるものでさえ必要であれば殺すんだ。自分のために殺すんだ！！だが私は憎まれる！！憎しみは半端なく怖い！！それと闘う覚悟がある人間が人間だ。あんたは闘うか？」
「・・・・・っ・・・。」
「私は生まれた時から憎まれてね。私はそれと闘ってきたんだ。そしてこれからも。だから・・・。」
雪音は倒れているまた子に銃を向けた。
「私は人を殺す。」

たとえ。人々憎まれようと。
だけどきっと彼はこんな私を馬鹿だというのでしょうね。
それがどれだけ嬉しいか。あなたは知らない。
私は人を殺した瞬間から、人を殺すことしかできないんだよ。

バンッッッ!!銃声は闇夜に響いた。

第九章　たとえ死んでしまっても（後書き）

また子ちゃんの口調あってるかな？

第十章　希望の桜（前書き）

銀魂ってアニメ再開するんですか？友達が言ってたんですけど・・・。

だったらめちゃくちゃうれしいです！ジャンプでも面白いですもんね！

第十章　希望の桜

弾丸はまた子に命中の・・・はずだった。雪音が引き金を引いた瞬間、あの男は現れ、雪音に斬りかかった。雪音は気づき、すぐに避けた。男は雪音がよく知っている人物。
煙管を吸いながら紫の着物をまとっている彼はまるで蝶のようで。
そして獣のように雪音を見つめた。
睨むのでもなく、殺気をぶつけるのでもなく、ただただ雪音を見つめた。
「晋助様・・・・。」
高杉はまた子に鋭い目を向けた。
「早く中へ逃げとけ。」
また子は動こうとせずただ愛しい主君を見つめていた。
「鬼平。お前は何してる？」
「ワ、ワタシは・・・。」
鬼平は言葉に詰まった。先ほど雪音に言われた言葉。お前は騙されている・・・・。
「鬼平。俺はお前を利用してる。お前は利用されればいいんだ。ならお前の望む世界ができるだろうよ。」
「！」
鬼平は包帯の隙間から見える目を輝かせた。
「チッ。」
雪音は舌打ちしただけで何も言わなかった。お互い見つめあう。そ

して刀を握りなおす。
雪音は内心、震えていた。高杉と雪音の関係は深いものだった。
いや、そう思っているのは雪音だけかもしれない。
「久しぶりだなァ。雪音。」
「そうだね。高杉。」
雪音も高杉もニヤリと笑みながら言った。
「おいおい・・・・。昔みてぇに晋ちゃんって呼んでくれないのか？」
「私はあんたの仲間じゃない。それにあんたは私を殺すんだろ。ならばどちらでもいいことよ。」
高杉は鼻で笑った。
「それもそうだァ。聞いておこうか。何故俺を裏切った？」

それは遠い記憶。
明るくて大好きな私の思い出。

雪音は松陽先生の寺子屋に通っていた。銀時に拾われ、先生に名をもらってから銀時と一緒に先生と暮らしていた。
そこで高杉と桂にもであった。
休み時間になると雪音は銀時に話しかけた。
「ねぇ。銀時。なんでいっつも寝てるの？」
ふときいたことがあった。彼は授業中いつも寝ていて先生に怒られる。高杉は興味なさそうだがずっと起きているし桂はまじめに聞いていた。雪音は隣の銀時を盗み見ながら思っていた。
「興味ねぇし。」
「でも桂君に怒られるよ。」
「ヅラに怒られても恐くねぇよ。」
「いや。桂君は怖いと思う。うん。」
雪音は微笑んでいった。
「何を話しているんだ？」
幼い桂が教室の隅で話していた雪音と銀時に近付いた。
「いや。別に。晋ちゃーん！こっちこっち。」
高杉は不機嫌な顔でこちらに来て座り込んだ。
「先生がほかの子にとられたからすねてるの？」
「う、うるせえ！お前らは一緒に暮らしてるから！」
高杉は顔を赤くしていた。
「ねぇ！聞いて！私、剣術を褒められたの！先生に！」
高杉と桂はうらやましそうに雪音を見たが何も言わなかった。
「ふん。お前は女だから褒められただけだろ？あんなの男なら誰だってできる。」
「何で銀時はそんな冷たいの？」
「まぁまぁ雪音。よかったな。」
「ああ。雪音はすごいよ。」
高杉と桂は雪音をほめたたえた。二人は知っていた。寺子屋の中で

一番努力しているのは雪音だ。部屋の掃除、洗濯、雑用。そんなめんどくさい行為を雪音は毎日毎日繰り返してやっていた。銀時はいつもさぼっているのでそれもしている。そんな雪音は本当にすごい。雪音は女なのにわりと強い。二人も何度か負かされたことがあった。
「ありがとう。」
そして雪音は皆の憧れの的だった。寺子屋で一番もてていたのは雪音だった。
高杉も桂もこの少女が好きだった。
ただ一人、雪音の前ではいつもいじめている銀髪の少年がいた。

雪音は目を閉じて幸せだったころの思い出を頭に巡らせていた。そしてすっと目を開けると高杉を見つめた。
「私は私の意思を尊重しただけだ。私は後悔してない。」
その言葉に高杉はきれた。
「お前は許せるのか！？先生を殺した幕府を！お前は幕府の犬になりさがって何をしてるんだ！」
こんな高杉を見たのはまた子も鬼平も初めてだった。
「私には昔にはなかった守りたいものができたんだよ。だから私はここに来た。あんたを止めるために。」
雪音は殺気をぶつけた。
「本当のことを言うと・・・。」
ゆっくりと語り始めた。

「幕府なんて大っ嫌い。なくなればいい。全部消えて・・・壊したい。」
「ならっ・・・！」
「でも私には守りたいものがある。真選組よ。だからこの服で来たの。」
真選組の制服。雪音がこれを来た訳。
「彼らは私があんたたちのところから逃げたとき手を差し伸べてくれたの。すごくうれしかった！私を人として女として侍として見てくれた！だから私は真選組を彼らを裏切ることはしない。もう逃げない。」
「ほざけよ・・・・。お前は俺たちから逃げたくせにアイツらから逃げないってのか？ああ？」
「そうよ。」
高杉の目は赤く光った。そしてまっすぐにつっこんでくる。
雪音は素早く避け、太刀をお見舞いする。打ち合いが始まった。
どちらも真剣なので互角だ。
雪音のほうが素早い。昔からそれは変わらない。
雪音も我流だったがそれは異質なものだった。動きが読めない変則的な動き。
これが彼女の一番の強み。だが逆に動きが多いので無駄な動きがどうしても多くなる。
「お前は何も見えていない。俺たちのことを何もわかってなかった！」
バンッ！高杉の剣が雪音の剣に当たる。
「そうかもしれない・・・。」
雪音は高杉を殺すことを考えようとした。だが思いがあふれて言葉にならない。なんなのだろうこの感情は。高杉は敵なのに。
どうしても震えが止まらない。彼はそれでも刀を振るうことをやめない。
「死ねっ！」

高杉がつっこんでくる。
（ダメ！間に合わない！）

雪音の腹に高杉の刀が刺さった。雪音は高杉を睨んだ。血を吐きながら。その顔は昔のように輝いていて誰もが彼女を気に留めた表情。悪魔のような笑い。なんて嬉しそうなのか。
雪音は自分の刀を高杉の肩に刺した。速かったので高杉も避けられなかった。
「クソがァ・・・・！」
「高杉様！！」「晋助様！！」
「ふふっ・・・。痛いでしょ？私も痛いよ。初めてかもこんなに痛くて・・・嬉しいのは！」
雪音は狂ったような表情をしていた。目が突き出ていて青い瞳が赤く見える。
高杉はこの女に恐怖していた。
「ねぇ？晋ちゃん。昔みたいになって？そうしたら死なないよ。」
「うるせえ・・・・。」
「人間はすぐに死んじゃうから・・・・・。」

少しでも楽しい思いを。
作りたい。
悲しくない思いを知りたい。
悲しい結末なら明るい思いを一緒に。

雪音は血を舐めて高杉から目を逸らした。刀はどちらもはずれていない。
「助けないの？あんたらは・・・。」
また子と鬼平はゾクリとした。そして導かれるように高杉に駆け寄り雪音の腕を持ち、高杉から離すように雪音を蹴り飛ばした。
「がはっ！」
雪音は倒れ込んだ。血がどくどく流れる。
また子は泣きながら、鬼平は目を見開き、自分の獲物を雪音に向けた。
そして
「死ね！！！」
雪音が死を覚悟した瞬間。彼らは現れた。
「俺たちの女に手ぇ出してんじゃねぇよ。」
その声は雪音が知っている声で。
「トシ・・・・・。」
雪音は涙を隠せなかった。

第十一章　夢の血潮

「総悟！雪音が暴れないように抑えとけ！！」
土方は叫んだ。沖田は雪音を抱き起した。
「どうして・・・？」
雪音は虚ろな目で沖田を見つめた。
「大丈夫か！雪音ちゃん！？」
「近藤さん・・・・。」
近藤局長が、珍しく、心配顔をしている。ゴリラなのは変わっていないが。
「皆・・・。なんで・・・・・。」
真選組は人数が多い。屯所を守るのをはぶいても全員来ているだろう。
「あなたのことが心配だったんですぜぃ？」
沖田はドＳ顔でなく、微笑んだ。
沖田は雪音が好きだった。恋愛感情ではなく、土方と比べたら・・・・。土方は頑固で姉を傷つけ、その上副長。近藤とも仲がいい。
それに比べて雪音は違った。過去のことは語らなかったが、道場に来た頃から沖田によくしてくれた。
貧乏な道場で食べるものもろくになかった時代。雪音は自分のことは後回しで最年少だった沖田に自分のご飯をくれたり世話を焼いてくれた。あの頃、姉とも毎日会えたわけではなかったのが沖田には

雪音が姉というより、母に思えた。
「高杉を殺さないで・・・・・。」
「！！」
高杉も雪音を見つめた。
「私がやらないと・・・。それか彼が。」
雪音の瞳には銀髪の男が宿っていた。高杉にはそう思えた。
「クソがァ・・・・・・。」
高杉は血を吐きながら土方を睨みつける。
「高杉晋助・・・。お前は過激攘夷派の中でも一番過激な男・・・。もう逃がさねぇ。行くぞ！！」
土方と隊士たちがつっこむ。
雪音は沖田の腕を離そうともがいた。
勝てない。彼には。同じ苦しみを知らなければ・・・。
「おい。雪音。」
土方はまた子や鬼平によって止められた。高杉は船の先端に立っていた。
雪音は導かれるように数歩歩く。沖田はそれを止める。
「雪音さん！！」
「江戸が・・・・・。」
雪音がつぶやくと、いっせいに海の向こうを見る。すると江戸には火が燃え上がって、カンカンと音が鳴っている。
「ククク・・・。お前らが女なんか助けに来るからお前らが守る江戸が潰れるぜぇ？ふあはは！！」
高杉は大笑いする。
その声に皆の動きが止まる。
その時、雪音が斬りかかった。それは誰にも早くて見えなかった。
雪音は気色の悪い笑いをあげないがら高杉の目と目をあわせる。
これはまるで夜兎が覚醒したときのようだった。
「て、てめぇ・・・・・。」
彼女の意識は飛んでいた。

「晋助様！逃げましょう！！」
また子と鬼平は叫ぶ。
「チィ。」
高杉は船から逃げ出した。雪音は追いかけようとしたが土方と沖田が止めた。
高杉たちの姿は見えなくなった。しんと静まり返る。
「おい。やめろ！雪音！」
雪音は我に返ったように床に崩れ落ちる。
「くっ・・・・。」
腹の痛みが蘇る。今までこんな出血で意識があるほうがおかしい。
「トシ・・・・。近藤さん・・・・総悟・・・・みんな・・・・。」
雪音はかすれる声で呟く。
「私・・・・・。高杉を斬れなかった。どうしよう。銀時・・・・・・・。」
雪音の目には涙があふれていた。

銀時はどうしても雪音を行かせたくなかった。彼女の行くところはきっと高杉のところ。あの鬼平という男は高杉の手の者だろう。だから銀時は雪音に無理やり飲まされた薬に抵抗した。薬はとてもき

つく、一日中眠れるだろう。だが銀時は抵抗し続けた。
それは自分の意思でやっているのかわからない。無意識だろう。
そんなときに夢を見た。昔の遠い・・・。楽しい記憶ではない。悲しい記憶を・・・。

銀時と雪音。性別は違えど、境遇は同じだ。彼女もまた、親を知らず、愛情を知らず、戦い敗れた者を剥ぎ取り、そうして生きていた。
彼女は金髪、銀時は銀髪。正反対だったが二人はわかりあえた。
銀時はあの夕暮れから雪音と松陽先生と共に、一つの家に住み始めた。
楽しかった。彼女との会話は飽きなかったし、寺子屋にも友達ができた。
雪音は銀時よりも悲しい人生を送っているはずだ。男と女は違う。
女はもっと幸せになるべきなのに彼女は刀を持つことを選んだ。
けれど銀時は彼女に優しくできなかった。先生は自分よりも雪音を大事にしているように見えた。たしかに家事なども完璧にする雪音のほうが可愛い子供だろう。だから銀時は雪音を拾ったが本当は憎んでいたり妬んでいた。これも恋愛感情が含まれていたのかもしれない。
そして先生は死んだ。
雪音は一番悲しんだんだろう。雪音は情が深い人間だ。雪音は感情を表に出したりするのが嫌いだったが先生のまでは違った。雪音はいつも笑顔だった。そして泣かせていたのは銀時だ。
雪音は憎んだ。銀時も憎んだ。幕府を。天人を。

そして剣をとった。

雪音は言っていた。
「斬ると先生が近付いてくるの・・・。どうしてかなそれがたまらなく嬉しくて・・・。だから今、とっても楽しい。」
彼女は狂っていた。彼女は人斬り。前線で戦わない。けれど陰で生き、陰で殺していた。銀時よりも桂よりも高杉よりも雪音は敵を斬り続けた。彼女は毎日血をあびていた。
銀時は日に日に狂っていく雪音を見るのが辛かった。
それも長くは続かなかった。
雪音はとうとう何もできなくなった。あの事件がきっかけで。
裏切りだった。仲間が雪音を売った。
雪音は幕府にとって強大な存在だった。上役の天人も人間も次々と消えていく。
裏切り者は銀時も知っている男で、雪音は裏切りなどというものを一番に悲しく思った。そして彼女は殺されかけた。雪音はあの時に死ぬはずだった。
けれど彼女は普通の女ではない。
雪音は百人の刺客を殺した。その時の彼女の背中は雨におびえているように見えた。
もう彼女に闘ってほしくない。そんな思いで銀時は彼女の背を押し

た。
ここから逃げるように・・・・・と。

「・・・・・っ。」
ひどく長い夢だったように思う。銀時は全身汗だく。外からは声が聞こえた。
「くそっ・・・。ここじゃねぇのか！」
男の声は近付いてくる。
襖をあけ、現れたのは土方と沖田。
「生きてるか？」
「ああ？」
二人はにらみ合い、がんを飛ばす。
「お前、雪音がどこに行ったか知らねぇか。」
土方は細い目を苛立たせる。銀時は気づいていた。彼女は彼らに黙って行ったのだ。彼女が真選組の一員ということは先日知った。これを聞いて高杉が黙っているとは思わない。
「高杉のところだろ・・・・・。」
銀時は体を起こそうとしたが起き上がらない。きっとまだ薬が効いているのだろう。
「お前は雪音の何を知ってる？」
銀時はニヤリと笑っていった。
「ぜーんぶ知ってるぜ？あいつが好きなものも。嫌いなものも。あ

いつのことなら全部。お風呂にも一緒に入ったしね～。」
「はぁ！？？」
幼少の頃は毎日といっていいぐらい一緒に入った。成長してからは雪音は家に帰ってこなかった。
「あいつは馬鹿だからお前らも気をつけろよ。」
土方と沖田は押し黙った後、去って行った。

手を伸ばせば、夕日が見える。
右に顔を向ければ、死体の山。左に顔を向ければ、死体の山・・・・。
右手には血を雨に濡れた刀。

何故、雨が降っているのに夕日は美しいのだろう。
目には血と涙が溢れていた。
今は誰もいない。殺したから。裏切り者も・・・。顔も知らない奴も・・・。
敵ならば殺す。それだけが先生の復讐とあいつらの力になる。
でも今は誰かに殺してほしい。
死にたくなかったのにもう生きたくない。
声をあげて泣いた。泣いても泣いても彼らは救われない。
死にたい。でも自分で死ぬ勇気はない。
初めて彼と出会った日。忘れない。
彼はまた手を差し伸べた。
彼はまた私を生かした・・・・。

第十二章　終幕の火（前書き）

シリアスでしたね。対決は長かったのか短かったのか・・・。

第十二章　終幕の火

「おい。相楽隊長は何してるんだ？」
「ラブ○ラスですよ。ホラ、この間発売した。」
「え？マジで？俺、めちゃくちゃ欲しかったのに副長が買いに行くの許してくれなくて休みの日に買いに行ったのになくてさー。」
雪音は部屋で安静にしていたがゲームを一日中やるという前と変わらぬ生活を送っていた。隊士は土方に見張っておけという仕事を任されていた。こっそりのぞくと雪音はニヤニヤしながらふふと声をもらしていた。
「こんなこと言っちゃなんだけど・・・き・・うっ。」
襖がドンっと倒れてきて隊士は踏みつぶされた。
「私がなんだって？ね？」
雪音は首をもちあげて顔を向かせた。
「そんなにやりたいならする？あんたも私のお仲間よ？」
雪音はもう一つのD○を持ってきて、隊士に与えた。
数時間後、隊士たちは雪音の元につどい、ヒロインのルートを語り始めたのであった・・・。

「ふう。」
一息つくともう夕日が縁側から見える。
雪音は今度はテレビをつけて、ニュースを見ながら尻をかくというオッサンの行為をし始めた。
「てめぇは日曜日のお父さんか。コラ。」
煙草を吸う、土方が片手に夕食を持ちながら部屋に入ってきた。雪音は睨んでから布団をどかし、机をもってきた。
「何？それは私への挑戦状なわけ？私、今ニコチン足りなくてイライラしてんだけど。」
「嘘つけ！！てめぇ、ゲームばっかしやがって！！今日はなんか知らんがラブ〇ラスの話でもちきりで俺誰にもついていけなかったじゃねぇか！！」
「へーそうなの。それなら禁止令出せばよかったじゃない？やっぱり興味あったんだ？貸してあげようか？」
「え？いいのか？じゃあ・・・ってなるかァァァァ！！！」
「ナイスツッコミ。」
親指をたたせてウインクする雪音。
「やめて。なんか、ムカツクから。」
土方は机の上に、夕食を置いた。

「何コレ・・・・。」
「見りゃわかんだろ。オムライスだよ。」
「はぁぁ？頭おかしいんじゃないの？どこの国に、全身白いオムライスがあんのよ？」
そう。土方が持ってきたのは、中も外も真っ白なオムライス。オムライスに見えない。
「あのね。オムライスっていうのは人参とか玉ねぎとかきってご飯にいれて、ケチャップをかけて、卵でつつんだ。ちょーちょー家庭料理なの。なのに何よ。この溢れんばかりのマヨネーズは！！！ふざけてんのかてめーー！！！」
雪音はキレて土方の胸倉をつかむ。
「マヨネーズかけたほうが百倍うめえんだよ！！ていうかなんでケチャップなんだよ。マヨネーズでいいだろうがァァァァァァ！！！」
「よくねぇよォォォォ！！何がマヨネーズだふざけんな！！てめー私がマヨネーズ嫌いなのしらねぇだろ。昔は大好きだったのにあんたのせいよ！！」
「俺のせいにしてんじゃねぇよ！！だいたいなんでマヨネーズの素晴らしさがわかんねぇんだ！！てめぇ脳みそ腐ってんじゃねぇのか？ああ？」
「なんだとコラァァァァ！！」
「雪音さん！副長もやめてください！！」
山崎を先頭に、隊士たちがとめに入った。
「黙れ！山崎、すっこんでろ！！」
雪音が山崎を殴ると山崎は倒れた。
「山崎さあああん！！」
「このマヨネーズ！！私がマヨネーズ工場ぶっつぶす。」
「このケチャップが。マヨネーズに喧嘩売ったらどうなるかわかってるのか？ああ？」
二人はぴりぴりと熱い電光をかわす。その時だ。

雪音は腹に痛みを感じ、血を吐いた。するとそのまま意識がもうろうとしていく。
「おい！！雪音！？？」
「雪音さん！！！！」
雪音はそのまま意識を失った。

もしかしたら私は・・・・ケチャップが血に見えたのかも・・・・。
それならマヨネーズは悪くないわ。
マヨネーズに謝らなきゃ・・・・。
マヨネーズっておいしいもんね・・・・・。

目を開けると、天井が見えた。
「痛ッ・・・・。」
体を起こそうとすると激しい痛みが襲った。
「まだ寝てろ。傷口が開いたんだ。」

土方の声と煙草の匂いがする。
「ねぇ。トシ・・・。」
「ああ？」
「怒ってる？」
「別に。お前は俺のマヨネーズを汚したことなんてなかったし。怒ってねぇよ。」
「うん・・・。」
「それよりお前は高杉と万屋とどういう関係なんだ？」
「どういうって？」
「あいつは・・・お前を誘ったんだろう？」
「たぶん、高杉の目的は私が鬼平の元にいくことで真選組を船へ向かわせ、江戸に火を放ったんでしょうね。犠牲者は天人１６人、人が５人。最悪。」
雪音は横を向いて土方と顔を合せなかった。
「正直に言うと、私は殺したかったから行っただけ。初めから、彼に変わってほしいなんて思ってない。高杉はどこまでいってもこの国を憎む。それだけの理由があるの。」
「それでお前はあいつを逃がす・・ってことにはならないか。」
「そ。私だって高杉と同じだよ。でも私にだって守るだけの理由があるんだよ。あいつが破壊する理由と同じように。」
雪音は手を伸ばした。何かを掴むように。
「だから桂君を捕まえるのも私は全力でするつもりだし。高杉のことだって同じ。けど銀時だけは違う。」
「・・！」
「銀時はもう攘夷とかそんなのもうないの。彼は彼の武士道を貫く。だから邪魔しないでね。邪魔したら私が許さない。」
土方は雪音の青い澄んだ瞳を見た。
「彼は今、生きてる。過去にとらわれずに新しく生きている。確かに捕まえれば真選組に有力な情報がもらえるかもしれないけど・・・・彼はそう簡単に口を割らないだろうし。それに私が止めるから。

ねぇ。トシ。わかってくれた？」
微笑んで聞くと先ほどまでの喧嘩は嘘のように土方は煙草をふうと吐き出すと。
「わかった。」
それだけ言うと彼は去っていく。

怪我が治ったら、彼と話したい。
彼が拒むならもう近づかない。
彼は私になんと言うだろうか。
私にはわからなかった。

第十三章　面影と鏡

お前は泣かないのか。

泣いても意味なんてない。

仲間が死んだって・・・。

帰ってこない。

泣いたって帰ってこない。

知らないんだ。

この剣はただの剣。

私の感情などないんだ。

人の感情などあなたにはわかるのか？

私には到底わからないよ。

何故、私はこんなにも人を愛してしまったのだろうか・・・・・。

雪音の怪我が完治したのはもう正月近く、クリスマスのことだった。真選組は年末、休んでる。本当は警察なんだから働かなくてはならないのだが。

「おおおおお！！サンタさんからプレゼントがきてるう！！」

「俺も！俺も！」

隊士たちは朝起きたらプレゼントが来ているのに喜んでいた。

「何でこんな馬鹿ばっかりなの？ここは。」
「全くだ。」
はしゃいでいる隊士たちに呆れながら、土方と雪音はそれぞれ煙草を吸う。
「あいつらはいったい何歳までプレゼントをもらうつもりなのかしらねえ？」
「だいたいサンタさんが持ってきてるとでも思ってるのか？許されんのは小学生までだぞ。」
「いいえ。小学生もね、高学年になると親見てたらわかるのよ。挙句の果てには朝起きたら直接渡されたわ。ええ。あの時は絶望した！わ。」
「お前・・辛い思いしたんだな・・・。」
雪音は目をふせると、煙管を置いて、外を見ると、ツリーがあちこちにある。なんでも雪音が怪我で寝込んでいても退屈しないようにとのことだ。
「雪音ちゃーん！！見てみて！！ジャーン！！」
ゴリらの近藤がこちらに来る。するとその姿は。
ピチピチの女のサンタコスプレ。絵図らを想像すると吐くのでやめてほしい。
「何やってんだァァァァ！！聖なる日にこんなもん見せんなァァァァ！！ぶっ殺すぞ！！」
「雪音ちゃん！！やめて・・これはお妙さんに着てもらおうとだな・・・・。」
「お妙さんもこんなん着たくねぇわァァァァ！！下も、上も丸見えじゃねぇかァァァァァ！！」

「雪音ちゃん、そんなとこ見てんの？へーーー。」
「てめぇ・・・上司だからだってな・・・・。」
雪音はコロスと言って木刀をゴリラに斬りかかる。
「やめろ。雪音。目を向けるな。」
土方に目を後ろから手で隠される。
「・・・・トシ。今、何時？ドラマの再放送は？」
「今日は特番でねぇよ。」
「えええ？？やっぱ年末は駄目ね・・・ということで出かけ・・。」
「だめだっつってんだろ！！」
土方は雪音を外に出すことを禁じた。おかげであの戦いから一度も外に出てない。怪我は結構時間がかかった。何故だろうか。昔はいつの間にか治っていたものだ。まぁあんな腹に刀が刺さったのは初めてだが。
土方は１０人くらい護衛というか見張りを雪音につけた。
「チッ。総悟～～～。」
「土方さんの気持ちもわかりますけど雪音さんの願いも聞いてあげたらどうですかぃ？」
沖田は不敵に笑んでこちらに来る。解放された雪音は沖田に微笑む。
「さっすが総悟！」
笑ってから土方を睨む。
「近藤さんが許可しねぇだろ。なぁ？近藤さん。」
土方が近藤を見たときには雪音によって身ぐるみをはがされ、明らかに恐喝されていたであろう・・・。
「わかったから・・・それだけは・・・。」
「ふふん。トシ～いいって。」
雪音は嬉しそうに土方に駆け寄ると土方の背中に手をこすりつける。
「おい！何やってんだ！気色悪いもんつけんな！」
「気色悪いですってー。近藤さん？」
「トシ・・・お前だけは・・・。」
近藤は泣きながら土方を見る。

「あーあ。土方さんが泣かせた～。」
「トシ。近藤さんに謝りなさい。」
「何で俺が悪いことしたみてえになってんだよ！！！てめぇだろうがァァァァ！！！」
雪音は知らんぷりして気が付けばいなかった。
「おい！？？どこに・・・。」
「とっくに出かけましたぜぇ？ま。雪音さんの足の速さは人間じゃないですからねぇ。」
「チッ。山崎！山崎はいるか！！」
土方の怒声は屯所内に響き、山崎は最悪なクリスマスをなりそうだとほとほと思ったそうだ。

街に出かけた雪音はとりあえずいつもの公園に行った。こんな日に誰もいないだろうがなんとなくだ。銀時のところにもいかなくてはならない。けれど怖かったのかもしれない。
「はぁ・・・。」

「あれ？雪音さん？」
声をかけられたのでうつむいていた顔をあげると。
「は、長谷川さん！！」
グラサンをかけ、風呂も入ってなさそうで寒そうな格好の長谷川がベンチに座っていた。
「どうしたんだ？こんな日に。雪音さん。」
「ええ・・・。ちょっと。」
居酒屋や、パチンコ屋で意気投合した長谷川は煙草を吸って座っていた。
「やっぱり雪音さんは俺と同じなんだ・・・・。嫁さんはいないし、クリスマスだってのにケーキもなし、いつもと変わらない日なのにあたりはクリスマスモード。泣けてきちゃうね・・・。」
長谷川はグラサンをどけ、袖で涙を拭う。
「何度も言いますけど、私、ニートじゃないんで。」
「え？違うの？」
「違います。確かに毎日、ゲームしかしてないダメ人間ですけど。」
「いや、ニートじゃん。」
「うるさいです。いいですか！今日会えたことに感謝してくださいよ！」
そう言うと立ち上がり一つの袋を差し出した。
「何、コレ？」
「開けてみてくださいよ。」
恐る恐る開けるとそれは。
「グラサン？」
雪音は微笑んで頷く。
「ええ。前に潰しちゃったんで・・・・これ、私からのクリスマスプレゼントです。」
「ゆ、雪音さあああああん！！！」
長谷川はなぜか大泣きする。雪音はパニくる。
「えっ？あの、長谷川さん！？私、余計なことしましたか？」

「ううん・・・。こんなプレゼント何年ぶりだろ・・・。クリスマスプレゼントなんて母ちゃんから貰って以来もらってないし・・・。」
「・・・そうなんですか。まぁ家には呼べないけどこれからもがんばってください。あ、あと正月のバイト頑張らないと死にますよ。」
雪音は相変わらず微笑みをたやさず、そこから去っていった。

彼はきっと探さないほうがいいんだろう。

彼は別れてから一度も私を探さなかったのだから。

街を歩くとクリスマスのテーマソングが流れる。雪音は昼間からガラガラのパチンコ屋にいって、うちはじめる。
全くハズレばかりでつまらない。結局、福沢諭吉5人は使ってしまった。
「あーあ。」
こんなことならむさくるしい連中と一緒にケーキでも食べればよかった。
長谷川には渡そうと思っていたのでちょうどよかったが。
もう、夕方。夕日は見えない。
川まで行くといつもなら綺麗な夕日が見えるのに今日は。
「雪・・・。」
ホワイトクリスマスとでもいうのだろうか。恋人たちははしゃぎ喜ぶのだろう。
雪音は思い出す。昔、正月でも人を斬った。雪の日だって、雷雨の日だって、いつでも。
（クリスマスとか自分の誕生日とかあのころはどうでもよかったな。）
どこかおかしくて雪音は笑った。

「おい。姉ちゃん。こんなとこで一人ですか？」
声がかかったので振り向くと時が止まったのではないかと思った。
黄昏時だけれど夕日は見えない今日も彼は変わらず雪音を見据えている。
かつての彼はどこか雪音を恐れているような感じがした。けれどそれは雪音の思い違いで。
雪音は何でも敵だと思っていた。恐ろしかった。内部の裏切りや、仲間はどんどん死んでしまって風呂や、夜中布団の中で大泣きしたっけ。

「銀時・・・。」
彼の名をつぶやくと彼は近付く。その傍らには銀時が今、大切にしている仲間の姿。
「新八くん、神楽ちゃん・・。」
「メリークリスマス雪音ちゃん！」
「いや～雪降ってて寒いですねえ。」
「何言ってんだよ新八。せっかくワタシがメリークリスメスって言ったのにここは続けて言うとこネ。だからメガネなんだヨ。」
「うっ・・・。いや。ごめん。」
銀時は鼻くそをほじりながら二人をいとおしそうに見ている。
「銀時・・・・。怪我は・・？」
「ああ？こんなもんもう全然これっぽっちも痛くないね。」
「雪音さんは大丈夫なんですか？土方さんに聞いたんですけど・・。」
「大丈夫よ。新八くん。」
雪音は木刀を抜く。
「私はやっぱりこっちのほうが似合ってる・・・かな。あんたのマネしてみる。」
「・・・・・。」
「私はちゃんと教えられたように生きてみせるよ。」
雪音の微笑みは美しく、明るかった。
昔の面影は今はなく。
「闇の中は何もなくて辛いから。」

今は光の中にあるものをお互いに知っている。

笑いあうとこも楽しくて。

このまま生きていたい。

雪音は頭を下げる。
「私と・・・闘ってくれてありがとう。」
「！」
銀時は目を見開いてから口を動かす。
「お前はまだ闘うんだろ。この国のためによ。俺はやらねぇけど。」
雪音は銀時を見る。三人とも笑っていて。
「じゃあな。」
手を振って帰る三人の背中は幸せに見えて雪音は笑った。

人を嫌いになるのは簡単で、
人を愛すことはこんなにも難しい。
けれど人を愛すことは嫌いになるよりも良いことがたくさんあるはずだから。
だから世界を憎まないで愛したいと思う。
私を好きになってくれた人たちのために。

それが私の生きる意味。

第十三章　面影と鏡（後書き）

最終回みたい。だけどもう少し続けるつもり・・・更新すごく遅くなるかもしれません！！

第十四章　太陽と星月

「雪音さあああああんん！！！」
雪音が振り返ると汗をかいた山崎が。
「なぁんだ。山崎君か。どうしたの？」
雪音は煙管を吸いながら山崎に問いかける。
「なんでって・・・・雪音さんが黙って出かけるからでしょう？」
「黙って行ってねぇよ。ちゃんと近藤さんに許可貰ったよ。」
「いや。あれは違うんじゃないですか。世間では脅したって言うんですよ。」
「ああ。もう。そんなことといいじゃない。ホラ。山崎君。行こう？」
「帰るんですか！？」
「もっといいところに行くんだよ。」
「へ？」
雪音は山崎をつれ、笑いながら歩いた。

「ここは！？」
「見てわかんない？ゲーム屋。」
雪音が連れてきたところはまぎれもないゲーム屋さん。けれど今日は違う。
「な、なんですか！！この行列は！！」
「明日が何の日か知らないんだ？明日は〇Ｆ７のリメイク版が出るのよ。覚えときなさいよ。」
（いやいやそんなの知らないって・・・。何！？この冷めた顔！なんで僕がこんな目で見られなきゃなんないの！？）
雪音は行列の最後尾に座る。
「え！？雪音さん！？」
「今日は帰らないから。山崎君、いないと殺すよ？」
「えええええ！？？？？」
「君には色々働いてもらいたいからさ。」
雪音は笑顔で言う。正直恐ろしい。
「あー。ご飯買ってきて～クリスマスだから〇〇タッキーがいいなぁ。」
雪音はいつまでも笑顔だったが山崎にはわかっていた。この人の金の使い方は以上だ。小学生がガチャガチャを親にねだるときのような感覚なのだ。
「あの金は・・。」
「何言ってるの？山崎君が払うに決まってるでしょ？」
「え？」
普通の会社なら上司に頼めばいいのだろうがあの人たちは絶対払ってくれない絶対。

「それとも私に飢えて死ねって言うの？」
「ひいいいい！！と、ととんでもない！！！」
「そう。ああ。早く欲しい～。あ。そこのお方・・・・。」
雪音は前の男とベラベラ話し始める。これはいけない。

（なんで僕が・・・。）
山崎は言われた通りに食事を買いに行った。まわりは親子連れとかで自分は場違いな気がした。
雪音は全くマイペースで、ろくに仕事もしないが誰も彼女に逆らえない。局長の気に入りというか・・。局長も副長も、信頼が強いからだ。雪音は顔はいい。女優になれるくらいだ。実際スカウトされたこともあった。
道場で稽古をしたとき。初めて雪音の剣を見た。
すごく美しかった。強いとかそんなのじゃない。綺麗で、綺麗で皆がびっくりした。そして隊士たちが勝負をして勝てるものもいない。
山崎は少し笑うと店から出て、走って帰った。

「雪音さーん。これでよかったんです・・・・って・・・・。」
山崎は目を疑った。なんでここに・・・・。
「旦那たちなんでここにいるんですか!!??」
坂田銀時たち万屋が雪音の横で座り込んでいる。
「あ。山崎君。買ってきてくれた?」
「えー。雪音ちゃんだけずるいアル。ワタシも欲しいネ。○○タッキー。」
「そうね。あ。山崎君。神楽ちゃんの分ももう一回買ってきて?あ、銀時と新八君はいる?」
「何言ってんの。バーガーというば○スでしょ?」
「○スはハンバーガーで○○タッキーはチキン・・・。銀時は何食べたいの?」
「イチゴチョコレートプリアンアラモード。シュークリームつき。」
「じゃ。山崎君。それ買ってきて?」
「僕もいいですか?」
「ええ。何?」
「じゃあ・・・。」
「ちょっと待てえええええええ!!!!!!!」
いっせいに山崎を見る。
「何やってんだァァァァ!雪音さん!また僕をパシるつもりですかァァァ!!」
「そうだけど?」
雪音は普通の顔で言う。なんだ。本当に・・・。

「もう僕はごめんです！失礼しま・・・・・・。」
「や～ま～ざ～き～く～ん～？」
雪音は山崎を肩を掴んでこちらに向かせ小声で。
「そんなことしたら君の首が飛ぶよ？わかってる？」
「・・・・・ゆ・・・・。」
「私を独りにするの？」
「いえ・・・。間違えました。すいません。」
「そう。じゃ。いってらっしゃい～。」
「その前に・・・・・なんで旦那たちが・・・・。」
「ああ？買いにきたにきまってんじゃねぇか。」
銀時は鼻をほじりながら。
「ファミコン。」
「は？」
「知らないの？今日はファミコンの発売日なんだよ。超リメイクして。」
「それ・・・新型のゲームだろ・・・・・。」
「全くネ。銀ちゃんもあのマヨラーみたいなのと同じネ。」
「一緒にしないでー。銀さんすごーく傷つくからぁ。」
「もういいから。山崎・・・・・。」
最後は睨まれて、また山崎は走った。

「なんでこんなクリスマスなのかな・・・・。」
山崎は運がなさすぎる。もうなんて言ったらいいのかわからない。
それでも帰らなければ何されるかわからない。
山崎に逆らうことはできるはずもなかった。

山崎が帰るともう夜中が近い時間だった。
銀時の言っていたものや新八の食事がわからなかったのでかなり迷った。ああ。殺される。土方よりも怖い雪音。そして銀時のドSさ。神楽もわけがわからないし。まぁ新八はただのツッコミ役だが・・。

「すみませーん。皆さん・・・・・あれ？」
「あ。お帰り。」
雪音は笑顔で迎えてくれた。雪音は銀時たちを愛しそうな目で見ていた。
「私のやつをあげたら寝ちゃってね。山崎君。いっぱい買ってくれたから。ありがとう。」
雪音は山崎を上目で見るとまた微笑む。そして缶コーヒーをくれた。
やっぱり帰れない。この人には適わない。そう山崎はほとほと思った。

だってこんなにも優しく笑ってくれるのだから。

第十五章　深海の底に（前書き）

山崎君って僕って言ってたっけ？あと本当は万屋って万事屋なんですよね。万屋とうつと万屋になるからそのままつかってるんですけど・・・。

第十五章　深海の底に

「おい。雪音。初詣行くぞ。」
「ちょっと待って。いいとこなの！」
雪音はテレビに向かい、素早く振り返って土方を睨む。
「早くしろ。そんなの中断すればいいだろうが。」
「うっさい・・・。」
雪音は何に集中しているのか。それはこの間、買ったゲームだ。ムービー中に話しかけられたのでものすごくイライラしている。
雪音は何を思ったのかスタートボタンを押してゲームをやめた。土方は雪音の性格を知っているのでゲームを中断することを不思議に思ったが。
「おら。行くぞ。」
「はい。はい。」
雪音ははぁと伸びをする。
「トシ～。」
「なんだよ。気持ち悪ィ。」
雪音は土方に抱き着くとうなった。まるで泣き止んだ時の子供のようで父親のような思いがした。年齢的にはあまり変わらないので普段は思わないが。
雪音は何も言わないので、土方は顔を無理やり向かせる。

「おい。お前・・・・。」
雪音は目がとろんとして死んでいた。それに赤くなっていた。
「だからなんだ・・・・お前・・・目が・・・・。」
「もう！はっきり言って・・・よ・・・。」
雪音は倒れ込んだ。土方は頭が飛んだような感覚がして。この前は怪我をしたから大方予想はついていたが。今度は違う。
「おい！誰か！！」
「なんですか？土方さん。近所迷惑ですよ～父ちゃんのいびきよりうるせえや。」
沖田が部屋に現れた。全くいつでものんきな奴だ。
「何のんきにしてんだァァァァ！！雪音が倒れた！！」
「はぁ？」
沖田は駆け寄ると顔が真っ青になる。
「と、とりあえず・・・救急車を・・・。」
「へ。ああ。そうだな！！」
土方は携帯を取り出して電話した。

「ただの疲労ですね。」
「は？」
医師に告げられた言葉はあまりにも普通の言葉だった。
「目を見るかぎり何か・・・・。彼女の手を見ましたが・・・これ。ゲームダコですね。」
「え？」
「彼女。この顔から見て全然寝てないですね。一日中外にも出ずにこんなことをしてればそれは倒れますよ。」
近藤も加わり土方と沖田は雪音の辛そうでしかしなんか幸せそうな寝顔を見た。
「ま。眠りが覚めたら適当に連れて帰ってください。じゃ。」
「ちょっと待ってください！先生！雪音ちゃんはそんなことする子じゃ・・・・。」
「近藤さん。諦めてくれ。あんたの前ではこいつ作り話満載だからな。」
「雪音さんのオタクぶりは有名ですかねぇ。この人、テレビも全部録画する勢いだし。ゲームのサークルを真選組で作ってるし・・・・ま。土方さんと違って萌とかは言ってないですけど。」
「てめぇ・・・過去のこというんじゃねぇ・・・・。」
「とにかく・・・・。雪音ちゃんが起きたら注意がいるな・・・・。」
三人はそろって溜息をつくのだった。

雪音は目を開けると横にズーンと座っている三人を見て面白そうに笑った。
「何？そんな葬式みたいな顔してさ。私が死んだと思った？」
三人は答えなかった。
「さ。早く帰って続き・・・・。」
「雪音ちゃん。」
近藤に呼ばれ雪音は目を合わせる。
「今日からゲームもテレビも禁止だ。」
「は？」
「帰っても絶対やらせないからな。やったら切腹だ。」
「今回ばかりはダメですぜぇ。雪音さん。」
雪音は何言ってるのか雪音にはわからなかった。そして悔しさというか怒りというか悲しみというかそんなものがこみあげてきた。
「何言ってるの？私からゲームを取り上げるっていうの？此間買ったばっかなのに！」
雪音の怖いくらいの殺気に三人はびびる。しかし。
「だめったらだめだ。雪音ちゃん。これこそ自重が必要だぞ。コメで雪音ちゃんが書いてた通りに。」
「ああ？なに私の部屋のぞいてんのよ！ゴリラァァァ！！」
隣の人がびっくりしていたのが印象的だった。
「もういい！わかった！あんたたち早く帰って！ここでするから！！」
そう言うと雪音は携帯を取り出して・・・。と土方が取り上げる。
「何すんのよ！トシ！」
「どうせ山崎を呼ぶつもりだろうが。駄目だ。しばらく大人しくしてろ。帰ってきてもいいがぜってえさせねぇからな。」
三人はぞろぞろ去って行った。
「何よ・・・。ゲームして倒れたからって・・・・全然いいのに。」

雪音はもう決めていた。こうなったら。
できるところに行くしかない。

第十五章　深海の底に（後書き）

誤字修正しました。すみません・・・。

第十六章　散る桜（前書き）

回想してんぞ・・・オイ。独りツッコミ

第十六章　散る桜

ああ。最悪だ。
酒を飲んでも血の味しかしない。

「おお。相楽ァ。こんなとこにいたのか。」
居酒屋で飲んでいたら見知った顔があった。男は私の前に座ると店員の女に私と同じ焼酎を頼んだ。
「何か用ですか。」
私は不機嫌に言った。
「おいおい・・・。そんな不機嫌になるなって。」
「休みもくれねぇ上司に愛想よくできませんよ。それで今日は？」
男の名は田中照泰（たなかしょうたい）と言った。彼は・・・・この一年後に亡くなった。
田中さんは懐から黒い封筒を出す。
私はそっと受け取って中身を確認すると。
「どこにいます？」
「角屋に行け。女の恰好でいい。」
「了解しました。」
これからこの写真の天人と人を殺す。ここ一月ろくに休めない。夜中の行動が多いが銀時たちが働いているときにおちおち寝ていられない。
「それにしても大変だなぁ。お前も。もう年端もいって嫁に行って

もいいだろうに。」
「うるさいですね。そんな気ありませんし、もらってくれる奴もいねぇよ・・・・。あんたも暇な奴だ。」
「お前なぁ。朝から飲んでいる奴に言われたくないよ。」
私は何も言わず酒をついだ。もう顔が赤い。酒は強いほうなんだけど。
「ほら、あいつらの中では？高杉か？」
「何で晋ちゃんが出てくるんです？」
「なんでってよ・・・。お前、女のくせに仲いいだろ？あんな狼野郎どもと。」
「私たちは・・・。家族みたいなもんですから。」
「ああ？じゃあもうお前全員とやっ・・・・。」
私は刀を抜いて机の下から田中さんの懐に突き付ける。
「おいおい・・・・。」
私は睨むだけで何も言わない。
「悪かったよ。でもな。お前は美人なんだぞ。吉原にいるどの女よりもお前はべっぴんさんなんだ。気をつけろよ。」
「ご忠告どうも。」
私は酒を飲みほして立ち上がった。
「では、今日の真夜中決行いたします。ご報告ご苦労様でした。」
「雪音。」
「はい。」
私は近付いてくる田中さんの目しか見てなかった。
田中さんは私の肩を掴んで引き寄せると、着物の襟を掴んで、私の胸を覗き込む。ほかの客は目が釘つけになっている。今では敏感に反応する私だがこのころの私はたとえ、道で裸にされようが任務を果たすためなら何とも思わなかっただろう。ちゃんとサラシをしているので私の乳房はあらわにならない。
「お前・・・。傷だらけじゃねぇか。」
「今日と同じような仕事では早速食おうとする奴が多くてね。情報

を聞き出すために耐えるんですが、私は仕事だからといって天人には体を売れないんです。反抗すると問答無用に殴られまして。いつも耐えようとするのですが天人だけは無理なんです。」
幸いここに天人の客がいなくてよかった。天人たちはどんどん浸食している。店でもよく見かけるようになった。
このころはまだ、そんなに機械とかなかった。まだ金持ちしかもってなかった。
「お前は・・・。お前にはもうこんな仕事・・・。」
「それ以上言ったら斬りますよ！！」
私は大声で言った。田中さんは私のことに関して優しかった。もうこんな仕事をさせたくないと幾度も言ってくれた。けど私はそんなこと絶対に嫌だった。この年上の兄貴みたいな人が私に好意を寄せていることを知るのは彼が病気で床に臥せていたときだった。
「わかった・・・。」
「私は役に立ちたいんです。田中さんの気持ちは嬉しいですが。」
私いっぱいに笑うと田中さんの腕を掴んで離させると襟を戻し、出て行った。

私は銀時たちと住んでいる家に戻った。今でいう真選組の屯所のように広い。

私は与えられている殺風景な部屋に戻ると私は片づけてある着物を取り出した。
紅色の着物で晋ちゃんが誕生日に買ってくれた。あの時は嬉しかったな。
「おい。雪音。入るぞ。」
銀時の声が聞こえた。
私は着替えていたけれど銀時は襖を開けた。銀時は間違えたと言って襖を閉める。
「終わったからいいよ。」
私はおかしくて笑う。彼とは幼少のころから一緒に暮らしているので今更恥ずかしくないのだけど。裸を見られるのは恥ずかしくないけど天人のおっさんに見られるのは嫌でたまらなかった。
銀時は部屋に入ると恥ずかしそうに座った。
白夜叉と呼ばれる彼は本当に強かった。私は彼にあこがれた。私を励ます彼は目がギラギラ光っていたのが今でも覚えている。
「どうしたの？」
「今日も仕事か？」
「ああ。そうだよ。」
「今日は何の日でしょー？」
銀時は寝ころんでいう。
私はわからなくて適当に答えた。
「えっと・・・。桂君の誕生日？」
「ぶぶっー。」
「晋ちゃんの誕生日？」
「ちげーよ。」
「銀時の誕生日でもないし・・・。あれ？特別な日だっけ？」
「お前の生まれた日だ。」
ああ。思い出した。けど。
「そんなの本当かわからないよ。私が生まれた日なんて誰も喜ばないし。」

「何言ってやがる。俺たちがいるだろうが！」
銀時は少し声を荒げる。
「そうだった・・・・。あんたたちはいっつも祝ってくれたね。」
私は思い出す。いつも何かとプレゼントをくれる。私は町に行くこともできなかったから買い物もできなかった。でも一度先生と一緒にプレゼントを見に行ったことがあった。
「ありがとう。その気持ちだけでいいよ。」
そういうと私は鏡の前に向かって化粧を始めた。
「何で天人の奴を殺しに行くのにそんなおめかししてんだ。」
「今日のお相手は上層部の奴だから。良い女のほうがよく酒を飲んで色々なことを吐いてくれるんだ。それから殺すのが定跡なんだよ。それが私の仕事だからな。」
「お前は闘わなくていいはずだ。なのに・・・・。」
「言ったよね。銀時は。俺と侍になろうって。」
「・・・！」
「私は本当になろうと思ったんだ。だからこうして桂君や、晋ちゃん・・・そして銀時や・・・ほかの同志。彼らの役に立てるなら私はどんなことをするよ。」
「体に・・・。そんな拷問の痕つけられてもか。」
「えっ？」
私は答えられなかった。背中の傷が見られたのだ。
「拷問なんかじゃ・・・。」
「ごまかせねぇよ。高杉も俺たちも気づいてんだよ。お前・・・敵方に入れじいしすぎだ。お前の顔は目立つし、髪も目立つ。男は放っておかねぇ。それにお前は攘夷派の人斬り。欲しいわけだわな。」
私は答えられなかった。
「で。何されてる？言え！」
銀時は私を抱き上げるように私の腰を掴む。
「全部！殺した！私、何にも話してない！！」
私は必死に叫んだ。

私は拷問を受けることが度々あった。私の髪は目立つから噂がよくたつ。金髪の何者かが人を切っていたと。遊郭の場に行けば、部屋に連れ込まれ、拷問を受けた。私は腹が立って殺してしまう。情報も聞き出せずに・・・・。
「そんなこと聞いてんじゃねぇ！なんでそこまでして耐えるんだ！」
「そんなの決まってる・・・・。」
「お前は女だ。幸せに、餓鬼産めばいいんだ。」
「どうしてそんなこと言うの！？私のことわかってくれてるはずでしょ！？私が女だからとか言われるの大嫌いだって！！」
私は叫ぶ。何を言われてももう止まらない。
「私は力もないからいっぱい努力した・・・。役に立てればそれでいいのに・・。こんな体いくらでも！！」
銀時は私を見つめるがそれ以上言おうとしない。
私を離すと銀時は腹立たしそうに出て行った。
きっと思い通りにならないことが気に食わないんだ。
ここにいる奴らは表面的には良い奴ばかりだがそんな奴ばかりではないのだ。
私を食いたいと詰め寄る男もいれば殴る蹴るをやりたい最低な男もいる。
そのたびに晋ちゃんや桂君が彼らを叱っていることは知っている。
ああ。私は迷惑なのだ。
けど死ぬことができないんだ。
「ごめん・・・・。」
私は自分を変えるわけにはいかなかった。

「つっ・・・。」
ひどく嫌な夢を見た。昔の夢か。
気が付くと夕方になっていた。
あんなにゲームをしていたのだ疲れるはずだ。
私は溜息をつくと、立ち上がった。
屯所に戻っても土方と激突しそうなので戻るのはもう少し先がいいかもしれない。でも帰りたい気持ちが募った。今は本当に不安だから。一様入院しているので脱走したらまためんどくさいことになる。
雪音は公衆電話で土方の携帯番号を押した。
「はい。土方ですけど。」
「雪音です。」
雪音ははっきりそう答えた。
「何だ。おつかいならやらねぇぞ。」
「今から帰ってもいいでしょうか？」
「・・・・。」
「副長？」
「お前、おかしいな。嫌な夢でも見たのか。」
「えっ？」
「えっ。じゃねぇよ。お前が俺のことを副長と呼ぶときは決まってるからな。真剣な話か。不安な時かだ。」
見事に見敗れられ雪音は苦笑した。
「私・・・夢見てた。」

「夢？」
「私の大切で残酷な記憶ね。今、すごい幸せだなって改めて思った。ありがとうね。」
「・・・・・。」
「明日、初詣、行こうね。」
「・・・・ああ。」
雪音は笑って土方も笑っていた。
雪音は電話をきると足をスキップさせ屯所へ帰った。

第十七章　悲嘆の瞳

その日は何もない日だった。正月もあけて初詣にも行った。
雪音は自分の仕事もしなければいけなかった。
「だぁぁぁぁ！！ああ。終わらない。」
雪音は高速にパソコンのキーボードをうっていた。
「何やってんだ・・・？」
「さぁ・・・。」
昼飯の時間になったのに雪音が来なかったので隊士の二人が食事を持ってきたのであるが雪音は必死だった。
「ふ～。ブログ更新終了。」
雪音はのびをして、二人に目を向けた。
「ああ。ありがと。そこに置いておいて。」
「へ。ああ。はい。あの隊長？」
「ん？」
「何を・・なさってるんですか？」
雪音は微笑む。
「うーん。今はブログ更新してた。コメントのお返事とかね。あと、画像もあげてた。自分で書いたやつ。あと、実況もしてるからね。その編集もしなきゃで。」
この人のオタクぶりはなんだ。時間があっても足りぬぐらいだ。
「ごちそうさ～ん。」
「はっや！！」
雪音はもう食べ終え、パソコンで再び打ち始めた。これは小説のようで。

「小説？」
「ん？ああ。これ。私月刊誌に連載してるから。編集さんにデータ早く送らなきゃいけないんだ。」
「これって・・・・魔法剣士ゼウベルトっ・・・・！！？」
隊士が驚愕の声をあげる。
「知ってるの？」
「ええ・・・今、アニメ化も映画化もされてるやつですよね・・・・・。」
「うん。おかげさまで。累計三千万部です。」
「すげぇぇぇぇ！！！雪音さん！！サインもらえませんか！！」
「何やってんだァァァァ！！お前ら！！」
土方の声が響いた。見られていたようだ。
「ふ、副長・・・。」
土方は二人を睨むと二人は兎のように逃げて行った。
「お前は・・・。何をやってるんだ。」
「何が？」
「正月早々仕事もせず・・・。」
「だから仕事してるって。これ。」
雪音はモニターをさすと微笑む。
「なかなか大変なんだよ。」
雪音はコロコロ笑うがこんなこと普通の人間にはできない。ゲームをあんな長時間とテレビを離さない毎日。ブログの更新率と小説の仕事。絵の技術。実況の人気・・・どれも完璧な人間などいない。それにこいつは目を離さばいないことがおおいから結構外出もしているのだ。
「いつ寝てんだよ。お前は・・・・・。」
「もう三日寝てない。」
「はぁ！？てめぇ入院したばっかだろうが！！」
「あれはゲームしてたからでしょ。大丈夫だって。」
雪音は痛快に笑うとまたパソコンを打ち始める。

「全く。稽古もたまにはでたらどうだ。腐れ女。」
「黙れ。マヨネーズ。」
空気は凍りついた。二人とも何も言わず雪音はパソコンのキーボードの音が聞こえる。
その時だった。
「おじゃまします！！！」
「え？」
雪音はビックリして振り返ると。
汗をたらした志村新八の姿がった。
「新八くん？」
「雪音さん！！」
「は、はい！！」
「今日から僕をここで働かせてください！！」

土方と雪音はそろって首をかしげた。

「ちょっと新八くん？何言ってんの？どうして・・・。」

「お願いします！もう僕はあそこに行けないです。」
「え？どういうこと？銀時と何かあったの？」
雪音は新八の腕を掴んで顔を覗き込んだ。
「もうあの人の下で働けないんです！お願いします！！」
「えっ？え・・・ああ・・・・はい・・・。」
雪音は新八に圧倒され頷いた。
土方に目を向けると呆れているようでさっさと去って行ってしまった。

第十八章　暁は光と闇を分かつ（前書き）

ダラダラもうすぐ終わらすはず・・。

第十八章　暁は光と闇を分かつ

新八からでる雰囲気から雪音はもう銀時と何かあったのは明白であるが聞くことはやめにした。しばらくすれば帰るだろう。雪音は普段と変わらぬことをすればそのうち新八が呆れるはずだ。
土方に聞けばどうせすぐ帰るだろうと雪音と同じ考えで、近藤はストーカー行為中でいない。
「あの・・・。雪音さん。」
「ん？」
新八は、雪音の横に座り込んでいた。雪音はパソコンをうちながら答える。
「雪音さんは銀さんと暮らしてた・・・・んですよね？」
「・・・そうだよ。」
「なんでですか？」
「？銀時から聞いてない？」
「はい・・・。ただ・・・。」
「ただ？」
「雪音さんが真の侍だって。」
雪音は手を止めて新八と目を合わせる。
（銀時がそんなことを・・・。）
雪音は少し苦笑まぎれに微笑む。
「へー。まぁ、今のこの姿を見てもそんなことが言えるのかしらねぇ？」
新八は何も言わなかった。いつもの調子じゃない。
「銀さんは・・・。なんなんですかね。僕にはまだまだわからない

です・・・・。今日はひどかったんです。僕実はお金が底をついたんです。姉上がなんとか働いてくれますけどそれは道場の維持費もあるし・・。僕のお小遣いなんてほんの少しで。それに銀さんたちにご飯やらなんやらでとられて・・僕は自由がないんです！！」
「新八くんの言うことは・・・わかるけど・・・。」
雪音は懐から煙管をとりだして吸い始める。
「まぁ・・いいわ。あんたが気の済むまでここにいなさい。それから考えればいい。」
「は、はい！！」
雪音はおかしくて笑うとパソコンをまた始めた。

一時間ほどして、やっと小説が書き終わった。
「あー！！！終わった！！」
雪音は伸びをすると寝ころぶ。
「お疲れ様です。」
新八はお茶を渡してくれた。
「なんで？」
「山崎さんに頼まれたんです。今は雪音さんに近付けないって・・・。」
「なにがぁ？山崎君？そんなに私が怖いの？」
雪音は襖に目を向けながら言った。するとバンバンという音がして足音が遠ざかって行く。
「なんか知んないけど山崎君は恥ずかしがるんだよ。何もしてないんだけどねぇ。」

「へ、へー・・・。」
「さて、行こうか。」
雪音は立ち上がるとお茶を一気に飲んで、新八を見下ろした。
「どこへですか？」
「体、動かしにね。」
雪音は新八を起き上がらせると進んでいった。

そこは真選組の道場。隊士たちがうちあいをしている。そこには沖田と土方の姿もあった。
「あれ、万屋のとこのメガネくんじゃないですかぃ。」
「こんにちは。沖田さん。」
本当にツッコミをしない。雪音は心配顔で新八を見た。
「でぇ。雪音さんは何しに来たんですかぃ？」
雪音は隊士たちを見まわしながら奥へずんずん進み、竹刀を手に取った。
「体動かそうと思ってさ。さぁ。誰か相手してよ。」
雪音は高らかに笑うと隊士たちがぜひ俺と！と言う者や、遠慮しま

すという者もいた。
「いいよね。トシ。稽古に出ろって言ったもんね。」
土方は睨みながら頷いた。
「さぁ！始めようか！！」
雪音は隊士たちとうちあいを始めた。

新八は目を疑った。彼女の剣は我流なのかものすごい迫力があった。
男たちが次々に参ったと言う。雪音は何も顔色を変えず、ただ剣を振るう。
銀時と似ている。夢中で自分たちを救うために闘う銀時の姿と。
侍。真の侍。
こんな稽古でそんなことを感じる自分がおかしいと新八は思う。
真面目にやっているから？違う。
とても雪音が辛そうだからだーーーーーー。

「あーあ。もう終わりかぁ。明日からまた厳しーい稽古が必要だねぇ。鬼の副長さんよぉ。」
「そうだな。てめぇらァァァァ！明日から肝に命じろよ。」
そういって土方は道場から消えた。

「雪音さん。俺と勝負してくだせぇ。」
沖田は雪音のたらしている髪を優しく掴む。
「ヤダ。あんたを怪我させたくないし、私も怪我したくない。仕事もあるから、もう行くわ。新八くん！」
「あ、はい！」
雪音は新八を呼びかけて土方と同じく道場に消えた。

沖田はかすかに震えた。雪音と勝負したことがない。勝負したいと思うのと、負けるかもしれないという恐怖。それほどに雪音の剣は語れない。
数々の死線ーーーー。そして人間の辛いことを経験している雪音は強い。色々な面で。

「さぁ。始めようかな。動画編集しなきゃ～。」
「雪音さん。」
新八は雪音を見つめる。
「銀さんのこと教えてくれませんか。」
「え？」

「あなたが知っている銀さんの全て。」
雪音は黙ったまま、しばらく新八を見つめ、そして。
「あんたは何に対して怒っているの？」
「・・・・。」
「彼の過去を知って今の銀時が変わるわけでもない。あんたは今の銀時を気に入って万屋に入ったんでしょう？」
「それは・・・。」
「私はねぇ。あんたがどうしたいのかわからないんだよ。彼のことは嫌いでもなんでもない・・・でも自分は役に立たないんじゃないかって思うの？それは勘違いだよ。」
「・・・・・。」
「今日はここに泊れば？帰りたいなら別だけど。」
「お言葉に甘えて・・。」
雪音は薄く笑うとパソコンに向き合う。
（なんで・・・・全く不器用なんだからねぇ。）

雪音には全て見透かされているのをのちに知ることになる。

第十九章　苦渋の美酒（前書き）

次回遅くなるかも…

第十九章　苦渋の美酒

「おはようございます。雪音さん。」
新八はさわやかな顔をして雪音の部屋の襖を開けた。
雪音は昨日と変わらずパソコンの前に向き合ったままだった。
「な、何してんですか・・・。」
「ああ？別に・・・動画見てたら朝日が昇ってて・・・。ああ。それとさ。新八くん、女の部屋に入るときはまず入ってもいいか確認したほうがいいよ。嫁さんもらってもねぇ、女っていうのはそういうの気にするからねぇ。」
「え、ああ・・・すみません・・・。ていうか雪音さん寝てないんですか！？」
「うーん？私は基本寝ることがないよ。」
「どうしてですか・・・？」
雪音は立ち上がって新八の肩を掴んでもたれかかる。雪音の髪からかどこからかはわからないがとてもいい香りがする。これが大人の女性の色香か・・・。
「ここにいるやつらを全員信用できるほど私は良い人ではないんだよ・・・。」
雪音は新八の後ろに手をまわして頭を撫ではじめた。
「私は・・・。男の醜いところも全部見てきたわ。だから信じることはできないんだ。そりゃね。この真選組のことを・・・私は誇りに思っているし誰が悪いとは言わないけど・・・。」

雪音は顔を上げて新八を見つめる。
「こんな自分がもどかしくて大嫌いだけど・・・それが私なんだよね・・・。」
その顔には悲しさが溢れていて新八は何も言えなくなってしまう。
「さぁ・・・。行かなくちゃね。」
雪音は新八の腕を掴んだ。
「何処へ・・・・？」
「君の・・・帰るところだよ。」

「銀ちゃん。いいアルか？」
神楽はソファーで横になっている銀時を呼んだ。
「ああ？何がだよ。」
「新八・・昨日出て行ったきり家にも帰ってないみたいアル・・・。どこにいったアルか？銀ちゃんは心配じゃないアルか！？」
「心配も何も何もねぇだろ。だいたいなんであいつがきれたのかわからねぇよ。」
「もういいアル！わたし探してくる！！」
神楽が飛び出そうとしたとき、玄関のインタホーンがなる。神楽は

玄関へかけ、勢いよく扉を開ける。
目の前に現れたのは煙管を吸う金髪の女。今日の白い着物は清潔感が溢れていてほんのりしている化粧には上品だと思わせる。
「雪音ちゃん・・・。」
「おはよう。神楽ちゃん。銀時いるかな？」
「銀ちゃんならいるケド・・・。新八が・・・。」
「ああ。それのことなら心配ないから。私がなんとかする。」
「え？」
雪音はズカズカと部屋に入り、銀時と対峙する。
「何だ。またお前かよ。なんで入ってきてんの？俺、許してないけど。」
「あんたが許さなくても何でもいいんだよ。」
雪音の声は低くて神楽は驚いた。昔からこの声を聞いていた銀時には再開したときに聞いたあのかわいらしい声に驚いたものだ。
「あんたは何をやってるんだ。」
「ああ？」
雪音は銀時の胸倉をつかむ。
「私は、あんたの守ってるものって『今』だと思ってた。」
銀時は雪音の変わらない輝く瞳を見つめる。
「あんたは自分のことあんまり好きじゃないでしょ。けどね。私はあんたが好きだったんだよ。その気持ちは今も昔も変わらないんだ。あんたにいくらいじめれてものけ者にされても私は大好きだったんだよ。」
「何だよ・・・意味わからねぇ・・・・。」
「わからないでしょうね。私が言いたいのはあんたは・・・・あんたの魂って変わったのかなっていうこと。新八くんが惚れたあんたはもっと強い侍だったはずだよ。なのに、何？あんたは何一つやろうとしないじゃない。あんたを信じている人を亡くそうとしている。」
雪音は木刀をつきつける。

銀時はその木刀を手でつかんだ。その力は強かった。雪音は睨む。
「お前なんかに何がわかんだよ。俺たちを見捨てたお前が何言ってんだ。俺はお前を信じてた。」
（何言ってんだ・・・。俺。）
（あーあ。なんかややこしいことになったなぁ。）
雪音は溜息をついた。そして銀時から離れると。
「新八くんは今、真選組で預かってる。さっさと取り戻して御覧よ。」
何から取り戻すのか。よくわからないが銀時は今言ったことを取り消した。
「今言ったことは忘れろ・・・。俺がお前を逃がしたんだ。」
「うん・・・。ねぇ。銀時。新八くんはきっと怒ってなかったんだよ。自分に怒ってたんだよ。」
「はぁ？」
「今の仕事でいいのか・・・・。とか不安と自由。そんなのが積み重なったんじゃないかな？」
「・・・。」
「ちゃんと来てね。」
雪音はそれだけ言うと去って行った。

「新八くん。聞いていた？」
家の扉の向こうで新八はうずくまって聞いていた。
「わかった？自分の気持ち。」
「まさか・・・雪音さんに見破られてたなんて・・・。」

「そらわかるよ。銀時と似てるよ、あんたは。」
雪音は煙管を吸うと新八の手を掴んで立たせる。
「あんたの心の整理をつけなさい。そうしないと今度は戻れなくなるから。」
「はい・・・。」
「散歩でも行こうか。」

そうして連れて行かれたのはパチンコ屋やゲーセン、公園、居酒屋・・・さらには賭場まで・・・。
「本当に雪音さんは大人ですね・・・。」
「え？何が？」
「こんなお金持ちだし・・・。」
「金持ちなのは税金をぼったくってるから・・・。」
「ええ！？駄目じゃないですか！？自分のお給料じゃないんですか！？」
「そんな訳ないでしょう？私、仕事なんて数えるくらいしかしてないんだよ。ああ。でも小説の印税が入るから・・・。」
「ももももういいです！！」
「何怒ってるの！？新八くーん！！」
夕方になって屯所に帰る道の田舎の道。わざとここらへんを通る雪

音。絶対に大通りを通って邦画近いところでも決して雪音は行きたがらない。
「今日は・・・家に帰ります。考えたら僕はこのままでいいのかもしれない。」
「そうか・・。」
「僕は銀さんや神楽ちゃんと万屋にいれて嬉しいですから。」
そういった新八は頭を下げて走って帰って行った。

「あんまり無茶しちゃうとしんどくなっちゃうよね・・・。」
それは皆同じだからほどほどに。

第二十章　幸せの樹（前書き）

ＤＶＤ届くかな～♪

第二十章　幸せの樹

「お見合い！？」
土方は近藤に近藤の自室に呼び出された。土方はお見合いという言葉を聞いて、たばこを落とす。
近藤は鼻にティッシュを詰め込んでゴリラ顔で言う。つっこんでいる理由はお妙にやられたから・・。
「うむ。お前じゃないぞ。」
「・・・わーってるよ。俺だったら絶対今すぐ逃げ出してる。」
土方が外を盗み見た。煙草をくわえると火をつけようとするが・・・。
「お見合いは雪音ちゃんだ。」
「ぶっ・・・！！」
煙草が喉に入ってすぐ吐き出す。土方はむせて咳をくりかえす・・・。
「ぶっ・・・はぁはぁ・・・。今・・アンタなんて言った？」
「今日は冗談抜きだぞ。トシ。」
（いや・・・そのドヤ顔・・・やめて。マジで無理。）
近藤のまぬけ面は皆さんの想像に任せよう。
「考えてもみろ。雪音ちゃんは今、ピチピチの女だ。俺たちの前に来た時もかなりの娘さんだったが・・。あー鼻痛い。雪音ちゃんはまだまだ若いし、まだお付き合いもしたことないらしいじゃないか。

お見合いくらいさせねば。」
「どうせ、幕府のえらいさんに言われたんだろうが。」
「あ。バレた？」
土方は目を伏せて煙草を口から離す。
「で。俺にどうしろと？」
「雪音ちゃんが出かけないように見張って欲しい。」
「無理な仕事だな。俺があいつを止められるわけねぇだろう。悪いが総悟にでも頼んでくれ。」
「駄目だ。総悟は雪音ちゃんに甘い。というか、雪音ちゃんに逆らえん。なぁ。トシ。トシも雪音ちゃんの幸せを考えてやってくれ。」
「・・・・。」

「くあ～。おはよう。」
雪音は食堂に朝行き、そこで朝食をとっている隊士たちに挨拶する。
「おはようございます。」
皆が一斉に挨拶してくれるのでなかなかいい気分だ。雪音は適当に

席につく。
「うー。何食べよう。ねえ。山崎くん何食べてんの？」
「えっ！？僕ですか？」
「そうよ。何驚いてるの？」
隣にいた山崎はどこか恐れるような雰囲気を出す。
「僕はマヨネーズをかけた食パンです・・・。」
「え？」
雪音は目を丸くした。
「なんか副長が・・・。節約のためにもマヨネーズを三食食すべしって・・・・。」
（あのマヨネーズ野郎・・・っ！）
雪音は拳を強く握った。
「だ、大丈夫。皆、私がなんとかするわ。」
皆がもうマヨネーズに飽きていることは知っている。好きだけど飽きることあるよね。
雪音は結局何も食べずに出て行った。

「総悟！」
雪音は屯所の廊下で沖田と遭遇した。
「おっ。雪音さん。おはようございやす。」

「ああ。うん。おはよう。ねぇ。総悟。トシ知らない？」
「土方さんですかぃ？今日死にました。」
真顔で言う沖田。雪音は頭をちょっと叩くと微笑む。
「で。どこなのよ。」
「さぁ。見てませんぜ。ああ。そういえば聞きましたぜぃ？雪音さん。」
「へ？何を・・・？」
「お見合いなさるそうで？近藤さんが言っやした。」
その瞬間、雪音の時間が止まった。二分経過し、やっと雪音は歩きだした。
「ど・・・・。」
次の瞬間。
「どうゆうことだァァァァ！！！」
と叫んで走り去ってしまった。
「俺、いけねぇこと言っちまったかな。」
「おい！総悟！」
後ろから仏頂面の土方がかけてくる。
「これはこれは。土方さんじゃあーりませんかぁ。」
「そのしゃべり方やめろ。キモイ。」
「うるせえ。土方コノヤロー。」
沖田はバズーカをうつ。
「あああ！！！待て待て！！わかったわかった！！で。雪音はどこへ行ったんだ？」
「さぁ？知りませんよ。土方さんのこと探してたみてぇですけど。」
「ああ？俺を？」
土方は少し考え込む。
「お見合いのこと言ったら出て行きましたよ。」
「ああ！？お前、言ったのか！？」
土方はどーんと沈んだ。そして。
「探しに行くぞ！あのお見合いは局長命令だ！！」

「・・・・誰なんですか？そのお見合い相手は。」
「知らん。だが金持ちだろう。あいつと貧乏人はあわねぇ。」
確かに。金遣いが人一倍荒い雪音だ。金持ちではないと破損してしまう。
「でも。昔はそんなことなかったじゃないですか。」
「あいつは昔から我慢がうまいんだ。だから俺たちは騙されてたんだ。」
沖田は口をつむる。何も言えなくなる。彼女は実に不幸な女だった。それがにじみ出ていた。彼女の笑いも全て偽りのような気がした。でも今は違う。彼女は本当に笑うようになった。

（冗談じゃないわ。なんで私がお見合いなんて・・・。）
雪音は何もかもおいて屯所を出ていた。夕方には帰るつもりだが携帯も金もない。
（う～走ったから腹減った～。死ぬ～。）

雪音は食が細いほうだ。昔から裕福ではなかったし食べれば太る。太ると剣術が鈍る。速さを武器としている雪音には致命傷になる。
「うん？」
あそこにいるのは・・・・。エリザベスだ。此間、桂と会ったときに連れていたなんかマスコットみたいなやつ・・・。
（ということは・・！）
「桂君！！」
雪音が叫ぶと男は反応する。その男は桂小太郎。同じ攘夷志士だった仲間だ。
「雪音・・・。」
桂は驚いていたが雪音は嬉しく笑った。

第二十一章　灰の鈴（前書き）

ＤＶＤ無事届きました。すごい！

第二十一章　灰の鈴

「あのさ・・・。ヅラァ・・・。」
「ヅラじゃない。桂だ。」
「いや・・・・。それは、うん。会ったらお決まりだから言ったのね。それよりさ・・・。」
雪音と桂は適当にファミレスに入った。雪音が気になったのは・・・。
「その恰好なに？」
桂は何故かしらんが着物ではなく黒いスーツを着ていた。ここならグラサンしておけよという感じだがそれはしてなかった。なんか・・・。
「それ、ヤクザの恰好みたいね。」
「そのように言うな！！やのつく自由業と言いなさい！！」
「はいはい。で。なんで？」
「実はな・・。今やってるドラマの再放送で・・・。」
「うん。馬鹿だね。」
そういってドリンクバーのオレンジジュースを雪音は飲んだ。
「この間、高杉に会ったそうだな。」
桂の目が真剣になった。雪音はストローでジュースをかきまぜながら。
「うん。」
と言った。
「紅桜の一件から動きがなかったが・・・。まさかお前をねらうとは。」

「高杉には私を殺す理由があるもの。もう・・仲間じゃないんでしょう？」
「仲間か・・・・。俺たちは先生の意志を継がなければならん。高杉は自分なりにそうしようとしているのだろう・・・・。だがそれは全部的外れだ。」
「破壊だけが全てじゃない。それは今わかる。銀時も桂君もえらいよ。大切なものがちゃんとあるもの。」
雪音は微笑むと桂も微笑み返してくれる。
「お前もあるのだろう？もっとも俺はお前に追われている身だがな。」
「ふふっ・・・。そうだね。私は一様警察だからあんたを捕まえなきゃいけないね。」
エリザベスがえっ！？という文字をあげる。
「大丈夫。そんなことしないよ。私、桂君のことは信用しているから。」
桂は微笑むと、立ち上がる。
「お前はじっとしていろ。こんな剣を振るうな。」
「それはダメだよ。わたしのしてきた罪は消えないから。とことんする。」
「なんでそんな考え方なんだ。」
「人殺しの考えだからだよ。」
桂は目を細めて会計の紙をもって店を出て行った。

「あ～。どうしよ～皆探してるよね・・。」
お見合いは何時からだとか聞いてはいないがとりあえず脱走した結果、桂と会い、昼飯を食べた。
雪音は歩きながらぼーっと空を見上げた。
「探したぞ。」
来ていたのはわかっていたが改めて振り返ると土方と沖田がこちらを見ていた。
「探さなくていいよ。別に。」
雪音は目を逸らした。
「見合いなんか出ればいいだけの話だろう。早く来い。」
「自分のときは絶対逃げるくせに。」
「うるせぇ。今はお前のことだろうが。」
「なんで皆勝手なの？だから男は。」
（なんでも自分の思い通り・・・。この体も、私の思いも・・・。）
怒りがわくとどうしようもなく刀を握りたくなる。でも・・・。
目に映るのは大切な人たち。雪音を家族のように接してくれる彼らたち。
「もう・・・いい。わかった。行けばいいんでしょう？行けば。」
二人は驚いた顔をした。
「で？どこに行けばいいの？」

「へ！？あの・・はい？何言ってんの？おたく・・・。」
万事屋三人組は久々の仕事ではりきっていた。だが贅沢な豪邸に住んでいる男の依頼は実にくだらない。
「頼むよ。万事屋さん。お見合いに代わりに出てくれ！！そのメガネは無理だから旦那が・・。」
（誰がメガネだ！このほくろォォォ。）
依頼人はほくろが多い腹の出た中年の男だった。
「写真は見せないらしいから！ママが出てくれっておしつけてきて・・もともと弟のやつなんだけどー。」
銀時はいちいち目をピクピクしていた。神楽は用意されたお菓子を遠慮なくぱくぱく食っている。
「金ならありますから。これくらいで。」
「はい。やります！！新八ィ。神楽ァ。行くぞォォ！」
銀時は二人を連れ出した。

「そんなことより・・・このお見合い相手ってどんな人なんでしょうね？」
「しらねぇよ。ま。依頼人と同じデブ野郎の天人なんじゃねぇの～？」
そんなことをのんきに言っていた万事屋だった。

第二十一章　灰の鈴（後書き）

よろずやのやっぱり変なので変えました。

第二十二章　不死鳥の翼

「はぁ！？なんで私だけなのよ！？近藤さんも普通出るでしょう！？」
雪音は屯所に戻り、いい着物に着替え、髪を結い、化粧した。だが告げられたのは一人でお見合いに行けということだった。
「だってー。雪音ちゃんのお父さん役とか無理だしー。」
「中年男がぶりっこするんじゃねぇよ。」
雪音は鋭く言う。
「まぁいいじゃない。いいもの食べておいでよ。」
「何がいいじゃないよ！ちっとも楽しくねぇよ！知らねえ男と食事なんて！」
「ゆ、雪音ちゃーん。言葉気をつけようね～。」
雪音は相当お怒りのようで言葉の端にトゲがある。雪音の不機嫌は屯所全体に響くので局長や、幹部からすればやめてほしい。だからご機嫌取りはよくしたりする。主に山崎が。
「ゆ、雪音さん！お見合いに行って来たら〇ンピース全巻僕、買ってきます！！」
「！」
「おー。言ったなァ。山崎ィ。」
沖田が拍手する。
「よかったなァ。雪音。」
土方までもが山崎を憐みニヤリと笑んだ。
「マジ！？じゃあ行ってきまーーーー。」
雪音は言いながら屯所からかけて出て行った。

「全く現金なやつだ。いいか。山崎ィ。お前の給料から抜いとくぞォ。」
「は、はい・・・。」
鬼の副長に言われ、山崎はがっくりと沈んだ。
「雪音ちゃんも女子なのだからこれで早く結婚してほしいものだな。」
近藤が言うと土方は笑う。
「ふん。あいつと馬が合う男はそうはいねえよ。あいつは自分と同じ趣味の男がいてもよろめかねぇしな。多分自分より強い男を選ぶぜ。」
「そんなの女全部じゃないんですか？」
隊士の一人が言うが土方は煙草を捨てて。
「あいつの場合は・・・自分を殺せるかどうかで決める。」
「！？」
その意味がわかるのは一部の隊士だけだった。

銀時は新八と神楽を置いて、悪趣味な邸宅に赴いた。
キンキラで、なにやらＡＶ臭がする邸宅だ。ていうか江戸にこんな

建物があったのか。
いつもの恰好でもいいと思うがあのほくろの依頼人がそれを許すはずもなく・・・。
黒のスーツで決めた。
「あ～めんどくせ～。」
どんな天人の女かしれん。だいたいなんであのほくろの弟はいない！？でも・・。
目の前にある御馳走に涎がでる。
新八と神楽も連れてきたかったような・・・自分で食べたいような・・・。
約束の時間は五時。もうすぐだ。相手が来ていないから食べるなとなんか使用人のおばちゃんに言われた。成人男性ならわかるだろうに。そんなにちゃらんぽらんに見えるのか。
キンキラの一室もキンキラで・・・。ほかにも客がいるようだが声がまったく聞こえない。
用意された部屋も広くて、どこかの城のように思える。
なのに扉は襖で、床も畳。壁は外国ぽい・・。意味が分からん趣味だ。
「はぁ～誰だぁ？こんなとこ作ったやつ・・。」
思わず呟いた後、襖の向こうから失礼します。という女の声が聞こえた。
銀時が襖に目をむけると襖が開き、人が現れる。
銀時はその人物に驚いた。いまだかつて女に見惚れるということはなかった。まわりにそんないい女いない。
だが現れた女は天使のような笑みを浮かべ完璧なスタイルと完璧な顔の持ち主。昔から・・・小さい頃から知っているのに数年あっていなかっただけで変わるものなのか。
「銀時・・・・？」
芸妓のような恰好の雪音は銀時を見て驚いた。
「ど、どうして・・・？なんでこんなとこに・・。」

「仕事だよ。てめーこそなんでこんなとこに来てんだ。」
銀時は口をとがらせる。雪音は鬱陶しそうに着物を揺らし、席につき、正座した。
「私だって仕事のようなものだよ。近藤さんがお見合いをセットしたくせに来ないからこんな状況になったんだね。でもよかった。あんたがここに来ていたんじゃ大変なことになった。」
雪音は懐からセ〇ンスターを取り出し、火をつけて吸った。
「ああ？あのゴリラがお前に見合い！？へっ・・。大変だねェ・・・・。」
銀時は頬杖をついた。
「あんたは？何の仕事？」
「天人のおっさんの弟に見合いがきて、その弟は断ったから依頼人にまわって、それが・・・。」
「なるほど。まぁ。よかったじゃない。いいもの食べれるし。」
雪音は微笑むが銀時は目を逸らした。
「お前・・・。なんで来たんだ。」
「は？」
「お前は人見知り激しいどうしようもない野郎だろうが。」
銀時は益々不機嫌になる。
「そうだね。でも局長命令だから。」
「はっ。ゴリラの命令なんかお前が聞くのかよ。」
「ええ。一様、私は真選組の一員だからね。」
銀時は押し黙った。
「俺、帰るわ。」
雪音は睨みつけ銀時の木刀を奪った。
「てめー！何すんだよ！！」
「うるせぇよ。さっさと座れ。」
雪音はゴーゴーと殺気を放った。
「は・・・・はい・・・。」

食事を二人は黙々と食べきった。
「ふ～おいしかった。まだ夕方だね。どこか行こうか？」
「はぁ！？」
「だって。普通なら二人でどこかに行って連絡先とか交換するんでしょ？」
「お前と連絡先交換してどうすんだよォォ！もう知ってるだろうがァァァ！」
「知ってるけどさ。せっかく二人でいれるんだから。いいじゃない。あーこんな平和な会話子供の頃以来だねー。」
雪音はそう言うと着物を脱ぎ始める。
「何やってのォォォ！？あの雪音さーん？？ビッチなんですか？？ねぇ？？」
「人のことビッチ言うな。大丈夫だよ。下に着ているから。だいたいこれは重すぎてね。お偉いさんだというから着てきたのにね。こんなの人斬りしてた時以来だ。」
雪音は淡く笑う。この笑みを今、自然に出せるのは彼女にとってとてもいいことだろう。
彼女を見ていると自然と昔の記憶が蘇った・・・。

第二十三章　輝ける暁光（前書き）

今回なんか意味わからん。いつもだけど。題名はお借りしました。

第二十三章　輝ける暁光

正直、雪音を拾ったことは後悔していた。あの日、黄昏の時に見た少女は一緒に暮らしはじめればまたたくまに笑顔になった。
それが気に食わなかったのかもしれない。
雪音はなんでもできて先生にも寺子屋の皆にも好かれていた。
別に好かれたかったわけではない。でも先生にだけは・・・・。
雪音が笑うと泣かせたくなる。子供じみたことを思ってしまった。
雪音は何も悪くない。笑って・・・どこにでもいる女の子だ。
だが雪音は普通ではなかった。

先生が死んだとき雪音は燃える家を見て泣きもせず、ただ目を見開いて泣いている銀時に言った。
「大丈夫だよ・・・・。先生の意志は私たちにある。」
それから雪音はもう笑わなくなった。あざけ笑うような嫌な笑みしかしない。
毎日、死人のように帰ってきては眠ることもせず、食事もしようとしない。
銀時も白夜叉と呼ばれ、仲間から恐れられていたが彼女はいろんな意味で仲間と溶け込めていなかった。

彼女は女だ。女で攘夷戦争に参加しているのは雪音ぐらいだった。
それに雪音は綺麗な女だ。寺子屋でもてていたのも顔がよかったこともある。あんなべっぴんの女が何故ここにいるのかと疑問に思っていた志士たちも多かった。
雪音は桂や高杉とも仲が良かったというか固い絆があった。
おまけに・・・・人を斬ることを楽しみはじめた。
雪音はいつしか狂った笑いしかしなくなった。暗い顔しかしなくなった。
泣いている顔が見たかったはずなのに・・・・彼女の顔を見ることが辛くなった。
食事を食べろと言っても彼女は拒んだ。脂肪がつけば動きがのろくなる。それだけの理由で。
がりがりに痩せていく雪音は子供の頃と似ても似つかない。

そんな日々が戦争中ずっと続いたが銀時には何もできなかった。
そしてある事件がおこるーーーーーーーー。

「お前は変わったな。」
食事の後、遊園地に行き、観覧車に乗ってそこから夜景を見ながら銀時は呟いた。
「そりゃ、何年もたてばね。ねぇ。銀時。何思い出してたの？ずっと遠い目してさ。まぁいつも死んでる目だけど。」
銀時は目をそらして言った。
「お前が死んだ魚みたいな体してた頃のこと。」
「あー。今思えば馬鹿だよね。食べたほうが元気でもっと動けたのに。あんなに毎日働いて太るわけないのに。あははは。」
雪音は愉快に笑いながら窓の外をずっと見つめ続けている。
「ねぇ・・・・。銀時はなんで高杉みたいにならなかったのかな・・・。」
「・・・・。」
「私は先生が死んだとき・・・・。死ぬほど悲しかったでも・・・。復讐すればいいって思った。だから敵を殺した。銀時もいっぱい闘ったよね・・・・。仲間が死んでも。」
銀時はずっと黙った。
「銀時が今、必死に耐えているのがわかる。私もたまに恐ろしく剣をとりたくなる。でも誰だってそうでしょ？私たちが受けた傷は簡単には治らない。いえ。治せるのは先生だけよ。とっくに気づいてた。復讐で・・・・人を殺め続けても何も残らないって。戦が何も残さないように同じだって・・・・。」
「わかったようになんでも言うんじゃねえよ。」
銀時と雪音は真っ直ぐ向き合った。

「俺は高杉ともヅラともお前とも違う。それぞれ見ていたものが違う。おんなじ人間なんていねえんだよ。だから俺は今・・・・・・。」
そう言いかけて観覧車は下について終わった。銀時は雪音より先に出て、後ろを向いて雪音を見た。日は沈みかけてあちらの空が暗い。
「お前の笑顔も見ていられる。」
「・・・・・。」
雪音は泣いてしまった。泣くつもりなんてなかったのに。昔はすごく我慢していた。泣くことは許されない。自分が煙たがられていたのは知っている。高杉や桂。それに白夜叉に特別扱いされている女など鬱陶しいはずだ。泣いたら弱い女だと言われるのだろう。
でも今は嬉しくて泣いている。嬉しくて笑える。それだけの素晴らしい思いを色々な人にもらった。
「お前の泣き顔なんてもう見たくねえと思ってたが・・・実際お前の泣き顔はいいもんだな。」
「な・・・・なによ・・・・。私は泣きたくてないてるんじゃないから・・・。」
雪音はうつむいていた顔を上げた。あの日のことを思い出す。
初めて銀時と目を合わせた瞬間。雪音は救われたと心の底で思っていた。本当は寂しくて死んでしまいそうだったのだ。
「私は両親の記憶がある。」
「！」
このことは銀時も初耳だった。
「あんたと会う半年前くらいに・・・。捨てられたの。こんな金髪だし。両親は私なんかいらなかったの。暴力をふるわれて泣きじゃくってたしね。」
銀時は奥歯を噛んだ。
雪音を拾って後悔した！？どうしてそんな最低なことを自分は考えたんだ。雪音の境遇は口で言えるものじゃなかった。女と男は違う生き物で雪音はそれを全て背負いこんでいたのだ。男がたくさんいる中でずっと孤独だっただろう。あの頃の雪音の顔を思い出すとそ

う思った。
「私はずっと・・・・・。泣いてたよ。人を斬るほど怖くて楽しくて泣いていた。先生が死んだときも川に頭つっこんで泣いた。空腹でも自分の腕を噛んで泣いた。眠ることもしたくなくて屋根にのぼって泣いた。・・・・・・・・・・ずっと隠してきたけどね。」
まんまと騙されていたわけだ。小さい頃から多分この女は嘘をつき続けていたんだ。嫌な女。
雪音は歩き出して銀時の腕を掴みひっぱっていく。
「私の泣き顔はいいって・・・・。嬉し泣きの顔？」
「うるせえ・・・！離しやがれっ！」
「私は・・・・。もう恐れないよ。子供の頃の私に戻る。笑って泣く！これが一番、あいつらを心配させないことだよね。」
「・・・・・。」
「ありがとう・・・・。」
雪音はそっと笑って少し早い足取りで前へ歩いていく。その背中はかつて一緒に闘った時の背中で。
（こいつはいつまでも・・・・。）

侍だ。

第二十三章　輝ける暁光（後書き）

私と考えている侍っていうのが違うかもですね・・・・。
銀さんは雪音のことはあまり好きじゃなかったんです。雪音は何でもできるから。それで幼少の頃はいじめていた。でも少し大人になって戦いがはじまると雪音は誰より辛い思いをして人や天人を斬ったのです。そして笑わなくなると銀時はそれも嫌になりました。彼女の顔は死んでいくからです。
でも今は戦争が終わり、ある事件がきっかけで雪音は近藤さんたちの元へ行くと笑顔を取り戻しました。子供の頃、先生やみんなにもらった笑顔を。そしてその大切な思いを守るため、大切な人を守る剣を銀さんと同じく雪音も見つけた・・・・という感じです。わかりにくいですよね。今回本当ギャグもクソもないんですけど・・・当初からそれはタグにいれてるんですけどね。銀さんのイメージちょっと違うかも・・・・。次回も過去いれたりするかもしれません。構成最悪だぁ・・・・。

第二十四章　屍蘭（前書き）

坂本の口調あってる？

第二十四章　屍蘭

「すっかり暗いや～どうする？帰る？」
「おい。さっきの雰囲気はどこに行ったんだ？」
銀時は晴れ晴れしている雪音の顔が気に食わなかった。
「やっぱり化粧落としたからかな～。ちょー楽。ねえ。銀時。酒飲まない？二人で飲むの久しぶりでしょ？」
銀時はほとほとこの女に溜息をつく。ギャグ漫画の主人公なのにこいつの前ではまともでなくてはならない。
誰か助けてくれるものはいないものか・・・。
大通りを歩いていると目の前に男が飛び込んできた。男はどっかから降ってきたようでしりもちをついて痛い痛いとうなだれている。
銀時は眉を細めた。一目でその人物がわかったからだ。
「嘘。何？あの・・・大丈夫ですかー？」
雪音は気づいていないらしく男に駆け寄った。だが雪音は大声で声を上げた。
「やだっ！タッツー！？」
「なんじゃぁ・・・。おお！！おまんは雪音ちゃんじゃなかか！！」
男の名は坂本辰馬。宇宙を駆け巡る元は攘夷志士だ。かつて一緒に闘い、雪音はこの穏やかな頭がすっからかんの男に癒されていたことがある。この男といると食事もしたくなったり眠たくなったり・・・。雪音がしたくない人間がすべきことをしなければと思わされる。
「元気じゃったかぁ？おお！そこにおるんは金時か！？」
「もうそのネタいいんだよ！もういいから！」
銀時は腕を組んで坂本を睨んだ。
「どうして・・タッツー・・・。」

坂本が出て行ったのは雪音が出て行ったあとのことだ。だから今雪音が何をしているか坂本は知らないはず。そう思うと雪音は無闇に話すことができなかった。
「いやのう。江戸に高杉が現たっつー連絡がはいってのう。気になって来てみたんじゃが・・・また着陸ができんかっての。あは、あはははは。」
坂本の後ろ上方を見れば民家につっこんだ船が。
「そうだったの・・・・。大丈夫だよ。高杉のことは任せておいて。ね。これから銀時と飲みに行くんだけどタッツーも来ない？」
「おお。そら。ええの。行く行くー。」
「ということで飲みに行こう！」
雪音はるんるん前へ歩いていった。

「銀時。」
坂本がいつになく真面目な顔をして銀時を見据える。
「本当はのぅ。雪音ちゃんの噂聞いてきたんじゃ。」
「・・・・・。」
「雪音ちゃんは昔から明るい女子じゃったらしいのぅ。わしがおったときは時々うっすく笑う女子じゃったぁ・・・・。毎日、お湯にもつからん。飯は食わん。眠りもしない。そんな女子が今はどうな

っとるかとなぁ・・・・。高杉が雪音ちゃんを狙うんはわかりきってたことじゃったなぁ・・・。」
「お前は頭からのくせに他人のこと心配しすぎなんだよ。あいつを見てみろ。楽しそうじゃねえか。」
二人の目に映る雪音は何故かキラキラしている。
「あいつは今俺と一緒で楽しいんだってよ。過去にどんなことがあったってな。俺たちは囚われねえで生きてるんだよ。」
「そうじゃなぁ・・・・・。事件のことは聞いたきぃ。心配しとったんじゃあ・・・・。」
「ちょっと！二人とも！早くしないと時間なくなる。」
雪音が入って行った場所はスナックお登勢。雪音は振り返って二人に微笑んだ。
「良い顔で笑うようになったのう・・・。声もほんま娘さんじゃ。」
「ジジイみてえなこと言うな。お前は天然パだから許してんだぞ。わかってんのか？ああ？」
「そんなぁ。金時ぃ・・・・。」
「早くって言ってんだろ。」
「す、すいません・・・・。」
雪音に胸倉をつかまれ二人は大人しく店に入った。

「おや。なんだい。雪音。銀時も一緒だったのかい。」
お登勢は銀時を見て、そういった。
「うん。新八くんと神楽ちゃんは？」

「新八は帰ったよ。神楽はうんこだ。」
「ふーん。そうですか。お登勢さん。ビール一杯。」
「なんだヨ。お前！お登勢さんがうんこって言ったのにツッコミもなしかい！ヒロイン面してちょーしのってんじゃねえヨ！」
キャサリンが言ってきたので雪音は机をバンと叩き、
「ふん。ツッコミいれなくて何が悪い。私は正常な人間なんだよ。あんたたちみたいにピーとは言わせねえ。」
（いや。すでに色々あったと思うけど・・・・。）
銀時は声に出さずつっこむ。
「タッツー。銀時。飲みましょ。」
「なんだヨ！このドブスが！もう終わりかヨ！」
「やめな。キャサリン。」
キャサリンのことは全部無視して雪音は酒を飲んだ。銀時と坂本は席について同じ酒をもらった。
「すまねえな。ババア。」
「何言ってんだ。その横の坂本の分もあんたに払ってもらうからね。」
「おっ。すまんのう。金時～。」
銀時は坂本を睨んでとりあえず頭を殴った。
「でさ。タッツーは今、何してんだっけ？」
雪音は赤い顔をして坂本に聞いた。
「えっ？言っとらんかったか？わしは・・・。」
「もういいわ。私ねぇ・・・。」
銀時は頭を手で押さえた。
「覚えてねえか？こいつ。酒は弱いんだよ。闘ってた時はそうでもなかったがな。」
月詠のように暴力はないようなのでいいが。雪音は少し笑って続ける。
「今ぁ。すごい楽しいんだぁ。周りには面白い奴ばかりだし・・・・・銀時とも話したくて話したくて・・・。トシと総悟に聞いたとき

はすごくびっくりして・・・。会ったら何を話そうって考えて・・・・。でも見つからなかった。本人の前では言えないけど・・・・。」
「いや・・・。本人の前・・。」
「私ぃ。ずっと知ってた。自分の存在なんていらないんだって。でもね・・・・。死ぬことなんて怖くてできないんだよぉ・・・・。」
今度は泣きだして銀時たちはどうするべきかわからなかった。
「私は・・・・。働けないの・・・・。人を殺めることしかできないの・・・・。」
「雪音ちゃん・・・・・。」
雪音は声を殺さないで泣いていた。昔の彼女からは想像できない姿だ。
「金時。わし帰る。雪音ちゃんとはまた改めて話すわ。ほんなら。」
「あっ！おい！」
坂本は逃げるように走り去った。
「銀時・・・・。この子はいったいなんなんだい？まるでアンタみたいな女だよ。」
「どういう意味だよ。」
眠ってしまった雪音を見ながらお登勢は優しい微笑みをたたえた。
「この子は自分の無力さを一番知っててそれを抱えてずっと生きてるんだよ。本当に馬鹿なやつはそれに気づかないもんだよ。この子はかわいそうな思いをしてるかもしれないけど幸せな子だよ。こんな子があんたの嫁になったらたくましいんだけどね・・・。」
「ああ？ババア。ついにボケたか。・・・・・・・ゴブッ！」
ガラスを投げつけられ銀時は椅子から落ちた。回避はしたが、頭に少しあたり、かすれた。
「いかれたのはおめえだ！この天然クソパーァァァァ！！！」
「黙れェェェ腐れババァァァァ！！」
「うーん・・・・。」
雪音が寝言のような呟きをだす。
「銀時。そいつを持って帰んな。」

「ああ！？あいつらが迎えにくるだろ。」
「あいつらって？」
「・・・・・。」
銀時は言うべきか迷ったが言うのをやめた。銀時は雪音を背負うとさっさと店から出て行った。ただ一言。
「すまねえな。ババア。」
それだけ言って。

「めんどくせー。」
なんで自分がこの女を真選組の屯所まで連れて行かねばならないのだと銀時は一人やる気な下げに歩いていた。
「おい。起きろよ。くそ。重てえな。」
昔背負ったことがあったな。そんなことを思い出した。あの時と身長も変わってなかっただろうに重い。そのほうが雪音にとってはいいことなのだろう・・。
「ふん・・。」
銀時が少し笑うと雪音が少し動いた。
「おい。」
「うーん。もうちょっと～。待って。もうちょっとで終わるから～

その後でＤＶＤ焼いてあげる～。」
「どんな夢だよ・・・。」
「ん？銀時ぃ？いる～？」
「なんでいきなり俺になるんだよ。」
「ありがとう。ありがとう・・・。あの時。私を殺さないでくれて・・・・。」
「・・・・・・。」
「でも殺してほしかったって思ったことも・・・・あるよ？だって私は・・・・。」
「うるせえ。死ぬとか死なないとかどうでもいいんだよ！しつけえ女だな。」
銀時は足を速くして屯所まで急いだ。

「あー。ついた。しんどー。」
土方や沖田がでてもなんか面倒くさいので雪音を門のところに置いておこう。（ひどい。）
「お前はねちねち昔のこと考えんなよ。」
雪音の頬をつねって銀時はその場を後にした。

後日。

「なんであんなとこで寝てたんだ！？ああ。言え。コラァ。」
土方に説教され雪音はげんなりしていた。
「だから覚えてませんって。」
お登勢のところで一杯飲んでからは覚えていない。本当に。
でもなんかすっきりしたような気がする。
「で。お見合いはどうだったんだ？」
「・・・・・そうね・・・・・。連絡先は交換してもらえなかったけど面白かったよ。」
「相手はどんな奴だ？」
「・・・・。すっごいかっこ悪いけどすごいかっこいい人だよ。」
雪音は笑ってそういったのだった。

第二十四章　屍蘭（後書き）

なんかお見合い編？？坂本は次もでるよ！変な文章でごめん！

第二十五章　青い薔薇（前書き）

これから阿片編へと入って行きます・・・。駄文です。全部。少し長くなればいいな。私は神威が好きなのでそのうち単品で出ると思ます。

第二十五章　青い薔薇

「ふぁあ～～～。」
「そこォォォ！欠伸すんなァァァ！」
土方の怒声が雪音に直撃した。
「すいませーえん。昨日、徹夜でゲームしてたんで。」
雪音は尚も欠伸をやめず頭を？いた。今は会議中で土方の神経がビンビンな時だ。隊士たちはぞわっと背筋が凍った。
「チッ。」
「で。トシ。話とはなんだ。隊士たちを集めて。」
近藤が聞いた。この会議を開いたのは土方で隊士全員が集まっていた。
「ああ。今から話す。」
土方は煙草をふうーっと吹き出すと真剣な顔をして話し始めた。
「今、この江戸で阿片が取引されているのを知ってるか？」
「阿片・・・？」
「阿片は確か・・攘夷戦争の時に攘夷志士が天人に流行させようと作った麻薬中の麻薬でしょ？もう全部対処したんじゃないの？」
雪音は攘夷志士だったので阿片のことは覚えていた。
阿片の依存性は恐ろしく一度使えば二度とそこから抜け出せない。天人の間で流行りたくさんの天人が死んだ。そこにつけこんで攘夷志士が対戦をかければこちらの勝利だった。結果的にはのちに負け

ることとなるのだったが。
「対処した・・・・はずだが。今度は天人の奴らが作ってるらしい。」
「・・・・そんなことって・・・・。」
「でも天人の人たちが作ってるんだったら俺たちに何かできるんですかぃ？俺たちは天人に手は出せませんぜ。」
沖田の言うことに土方は頷く。
「ああ。だがこのままじゃだめだ。阿片は作るのも簡単だ。江戸は人が多い。すぐに回る。そうなったらおしめえだ。」
「で。どこからそれが漏れてるの？口でまず説得してそれでも無理なら切腹覚悟で斬りに行くとか？」
隊士の数名は笑ったが雪音は本気だった。民にそんなものは必要ない。だいたい麻薬の取引は真選組にとって見逃せないことのはずだ。
「松平のとっつあんには連絡はした。だがあの人はそれも真剣に聞いてくれなかった。」
土方の鬱な表情に雪音は苦笑した。
「阿片の出どころも今の時点ではわかってねえ。これから俺たちで捜索を始める。お前らは・・・・。」
土方は指をさし隊士たちにどこへ行けと命令した。
「近藤さんも出掛けねえでくれよ。」
「何を言う！トシ！お妙さんに何かあったら大変だろう！今から・・・・。」
近藤が出かけようとしたので土方は近藤をひっぱった。そして屯所から引きずり出し、同じく阿片捜索に向かった。

（阿片なんて・・・・。）
あの戦を覚えている。阿片で弱体して洗脳されていたような天人たち。敵であったが憐れに思った。
あんなものを作るべきではなかった。だが文句言いようにも作った人物はもういない。
「雪音さん。あれ。」
沖田がさしたのはある家の角で一人の若い男が天人に金を渡し、何か物をもらっていた現場だった。
「あれは・・・。」
「天人には手は出せません。あの男を追いやしょう。」
「ええ。」
雪音と沖田はその男の後をつけた。

やがて男の家へ着いた。山の中にぽつりとある山小屋だった。
「御用改めである。」
雪音は制服を久々に着ていた。それで家に押し入れば一目で警察だとわかるだろう。だが男は死んだ目をしていた。銀時のほうがもっといい死んだ目だがこの男は違う。もう屍のようだった。虚ろな目で雪音と沖田を見つめていた。
「あああああああ・・・・。うううううう。」
変な声で叫ぶと嘔吐した。
「っ！」
雪音はびっくりしたが顔色を変えて。
「大丈夫ですか！？ねえ！？」

雪音は男の胸倉をつかんだ。男は涙を流し、懐に持っていた阿片を取り出し、口に含んだ。
「駄目！」
雪音は喉を手でつかみ吐き出させた。
男は咳を繰り返し最後に言った。
「くる・・・・しい・・・・。」
かすれた声で言うと、男に息は途絶えた。
「雪音さん・・・・。」
雪音はがらがたと震えていた。そして歯をギシギシさせ口から血をあふれさせた。
「許せない。どうして・・・・・。」
最後に言う言葉が苦しい??絶対におかしい。
「こんなもの存在しちゃいけない。総悟。私、出所つかんだら・・・・。」
「わかってますぜぃ?俺も付き合いますから。」
沖田は少し微笑んだ。雪音はうなずき、男を抱き上げる。
「手伝って。この人を・・・ちゃんと葬らなきゃ。」
雪音は阿片の袋を足で踏み潰し、沖田と共に家を後にした。

第二十五章　青い薔薇（後書き）

更新遅れます。年末ですから・・・。阿片戦争と似せてますが違います。

第二十六章　裏側のジョーカー

結局、その日は阿片の手がかりは何も見つからなかった。
「クソッ！」
雪音は屯所へ帰る途中も舌打ちし、本気で怒っているようだった。
沖田はそんな彼女を見ながら。
「雪音さん。旦那に阿片捜索を手伝ってもらったらどうですかィ？」
「はぁ？銀時に？」
雪音は沖田を不思議な目で見ていた。その眼はいつもより澄んでいなくて灰色に見える。
「俺たちができることなんてかぎられてます。今の幕府は天人には逆らえない。俺も阿片はあっちゃいけねえものだと思いますし・・・。」
「だから？万事屋に頼んで探してもらって・・・もし天人に目をつけられたら？いくら春雨と渡り合ったって今度こそ首が飛ぶかもしれない。それに私たちが銀時たちに頼んだって知れたら真選組はおしまいだよ。・・・わかってる。私たちは無力だ。でもこれは、簡単に諦めるわけにはいかない。」
雪音の横顔は強く、昔と変わらない。
「わかりました・・・。」
沖田は少しだけ笑むと屯所へ雪音に続き入って行った。

「あー。うぃ。」
雪音は酒を飲む。ビールではあっという間に酔ってしまうのに何故かチュウハイだと平気だ。夜の月を見ながら飲むと。
「せつねーっ。」
「何を酒を飲みながら言ってるんだ？雪音。」
「あ。近藤さ・・・。」
近藤はすっぱだかで頭をタオルで拭きながら登場。
「何やってんだァァァァ！！いい年したオヤジが若い女にチ○ポ見せんじゃねェェェ！！！」
「あべし！」
雪音のダイナミックなけりは顔面命中。近藤は床に沈んだ。
「雪音ちゃ・・・・ん。チ○ポは若い娘が言う言葉なのでしょうか・・・・。」
涙目になりながら近藤は言ったが雪音はニコっと笑って。
「大丈夫。ユキちゃんもき○たまって言ったらしいから。」
「何の話！？ユキちゃんって誰！？」
「あー。で。なんか用なんですか？」

「えっ！？無視！？何！その顔！？やめてくんない？」
雪音は気を取り直して、また空を見上げた。
「阿片のことは気にしなくていい。雪音ちゃん。」
「なんで！？駄目だよ！あれを作ったのは・・・。」
攘夷志士・・・。かつての自分たちが天人を殺し、今、関係のない人々が苦しんでいる。
「今の技術ならばそんなの簡単にできるだろうよ。遅かれ早かれ、天人たちが薬を作るのはわかっていた。」
「そんなこと・・・・・。」
雪音はうつむいて何も言わなかった。
近藤は雪音の肩をポンと叩いて満面の笑みを浮かべた。
「なーにしてんだよ。ゴリラァ。」
「・・・・・。」
雪音は顔が真っ赤だ。やはり酒に弱かった。が、近藤は天使のような雪音に言われ、内心ものすごく傷ついた。

翌日。
「あ。やべ。寝ちゃった。」
昨日と同じ場所で寝ていたらしい。いや。それより。
（なんで・・・・。）
なんで自分は眠れたのだろう。昔だったら考えられなかった。いくら酒を飲んでも滅多なことでは酔わない。此間から・・・。銀時には昔から弱いと言われていたって強いと猫をかぶっていたのに・・。雪音は自分が刀も持っていないことに気付き、益々自分がおかしくなった。
「おい。何、そんなとこでさぼってる稽古は始まってんぞ。」
土方に見下ろされ雪音は顔色を変えず。
「すみませんでした。副長。ですがわたくし、お暇を頂きます。」
「はぁ！？何言ってんだ！今日も阿片捜索があるだろうが！！」
「ご心配なく。私は私で捜索しますから。」
「ああ？」
「私のパソコンのウィンドースと私のデリートキー押す回数と私のネットであげてる動画数と、私のウォーク〇ンに入ってる曲の数ナメないでよ！」
「いや。意味わかんねえから。お前何言ってるか全然わからねえから。」
「うふふふ・・・見てらっしゃい。あ。私の入れてる曲数３９８曲だから。」
「いや。自慢するほど曲数ねえじゃん。何をえらそうに・・・・。」
雪音は髪をしゃらりしゃらりと揺らし、自分の部屋へ戻って行った。

「あー。駄目。全然こない。」
雪音のパソコン知識は本になるぐらいだったがやはり・・・。
「セキリティが天人のくせに堅いわ。こりゃ一日かかる。」
警察でなければハッキングなど言語道断だが仕方ない。これも阿片捜索のため。
「おっし！」
雪音はパソコンにがっちりしがみついてそこから一歩も離れなかったという。

いっぽう。その頃。
「ここが阿片の巣ぅ。じゃな？」
坂本辰馬。この男は雪音より先に阿片の出所をつきとめていたのである。

第二十七章　この手の中に

「終わらん！！もうなんなの！？私、警察よね！？そうよね！？」
「キモイ独り言はやめろ。」
雪音はパソコンとにらみ合っていたが後ろから声がかかったので振り返った。すると土方の仏頂面があった。
「あ？」
「もう夕方だ。ドラマの再放送見ねえのか？」
「あー。あれ泣けるからいい。今泣いたらしんどい。それにＤＶＤ持ってるし。今はあれ、君は僕の宿命にはまってるし。」
「あ。そう。」
雪音はまたパソコンをいじりだしたがいつ終わるか見当もつかない。最初はやればできると思ったが思った以上にガードが堅い。
雪音が頭を？き、もう無理だと半ば諦めていたときーーー。
ピロロロ。
雪音の携帯が鳴った。携帯を開けてみると知らない番号だ。
「はい。」
「おお。雪音ちゃんかぁ？」
「タッ・・・・！・・・っ。」
土方がいるので名前を言うのをやめた。そして。
「どうしたの？なんで私の・・。」
「ああ。そんなんええんじゃ。それより雪音ちゃん。」
「え？」
「阿片のことなんかしっちょるか？」
「・・・っ！・・・今調べているけど私には難しい。聞いてない？

私の今・・・。」
「金時から聞いてるぜよ。でも・・・雪音ちゃんがコレ知ってじっとしてるわけないきぃ思うたから電話したんじゃ。」
「・・・・うん。で。今どんな状況？」
「出所を見つけた。」
「マジ！？」
「マジじゃ。でな。わしでも難しいんじゃ。入り込むんは。」
「うん・・・。」
「陸奥にもそろそろ見つかるじゃろうから・・・だから雪音ちゃんに任せるぜよ。」
雪音は静かに頷いて、その場所を聞いた。雪音はたった一人でも乗り込むつもりだ。切腹覚悟で。
「でも。雪音ちゃんも無理するな。わしらは雪音ちゃんのことをいつでも・・・。」
「恥ずかしいこと言わないでよ。・・・・・あなたは宇宙にかけていけばいいの。地面はあいつもいるし。」
「・・・・・・・とりあえずこっちきてくれんか？それからやと思うんじゃが・・・。」
「わかった。」
ピッ。と電話を切ると土方を見据え、
「阿片の出所がわかった。」
「はあ！？誰だよ。今の奴は！」
幕府の自分たちが知らないのに何故わかる？
「私はまだ信用されているのかなぁ。」
「・・・・・。」
雪音の表情はいつもよりも穏やかに見えた。
「てめえ。勝手な行動は許さねえぞ。」
「いいよ。別に。殺してくれたって。でもコレを見逃したら駄目なんだ。」
「・・・・・。」

土方は雪音を止める言葉がわからない。雪音のこういう表情は苦手だった。土方にはまるで雪音が死人のように見えるのだ。いい意味での。
「阿片は・・・・。人を変えて殺すんだ。麻薬はその力をもってるんだ。」
吐き捨てるように言うと、雪音は姿を消した。

「タッツー？今行ってるけど？」
「おお。ここじゃここじゃ。」
坂本はどうやら待っていてくれたようで、江戸のある民家の角に髪が見え隠れしていた。雪音は地理は完璧だったので迷わずかけた。近藤も土方も沖田も止めなかった。雪音は真選組の隊長としていくのではない。元、攘夷志士としてケジメをつけなければならない。
「タッ・・・。」
ひょっこり、坂本に駆けてみれば。
「な、な、なんで・・・・！！！あんたたちがいるの！？？？」
雪音はここにいないはずの銀時、神楽、新八、そして桂の姿に腰を抜かした。
「ふふ。愚問だぞ。貴様こそここに来ることがおかしいのだ。」

「いやいや。何言ってんだこのヅラァ・・・。」
「ヅラじゃ・・・・。」
雪音は桂の口を手でふさいで、壁に押し当てた。
「ぐっ！」
エリザベスが桂さんとあげていても雪音は気にしない。
「でぇ。タッツー？」
「な、なんや・・・雪音ちゃん・・・こわいぜよ・・・。」
坂本につかみかかるような雪音の雰囲気が怖い。
「たっく。あんたたちも来るんじゃねえよ。」
昔から男として過ごさねばならなかった雪音は声も男のようにしたり、男の口調で話せる。
雪音は銀時たちを見た。
「なんだよ。俺はこいつにファミレスでおごってもらえるって聞いたから来ただけだぜ？それを・・・お前勘違いもはなはなしいな。」
「ちょっと！銀さん！なんでそんな嘘つくんですか！」
「そうよ。銀ちゃん。男は嘘つくもんだけどそれはわかりやすすぎネ。たとえば今日はこの天然パーマ二号にマグロ漁手伝ってもらうとか。」
「・・・・・。」
あえてツッコミ役の新八もこれには肝が冷えたのでやめた。
「もういい。手伝ってもらうのはいいけど、命の保証はできない。」
雪音の凛とした声が響く。あちらでは今、阿片の調達取引が行われているらしい。
「雪音さん！これは万事屋として坂本さんからお引き受けしたんです！桂さんも来てくれましたし、それに僕、侍ですから。」
「何、主人公きどりしてるんだぁ新八。お前なんかただのメガネじゃねえか。」
神楽のツッコミで新八の戦意は喪失した。

「わかった。ありがとう。」
それも全部無視して雪音は覚悟を決め、ただの戦闘狂のような顔を浮かべ、向こうの家を見つめた。
「早く終わらせないとね。あーあ。私、追い出されるかもね・・。」
そう言って木刀を手にし、雪音は歩き出した。

「ふーん。阿片ねぇ。これおいしいの？」
「やってみるか？神威よ。」
神威と呼ばれた桃色の髪の青年は面白そうに笑った。
「これで強くなるのはちょっと筋違いかな？」

第二十七章　この手の中に（後書き）

ぐだってるｗｗよいお年を！

第二十八章　破壊は快楽

雪音は頑丈な鉄の扉を開けた。重かったが鍛えている雪音には辛くもなんともない。でも自分の筋肉が全くないのを気にしていた雪音は何故こんな重い扉が開けるのかと不思議に思っていた。扉が重すぎたせいで銀時たちが来る前に扉を閉めてしまった。閉じる瞬間に、銀時と目があった。

雪音はかすかに目で笑って見せた。銀時に帰れと伝わるように。

「ふん。・・・でぇ。」

雪音が民家のような工場のようなこの場所を見渡すと人の気配が少ししか感じられなかった。普通こんな阿片工場？みたいな場所には敵がわんさかいると思うのだが。

（タッツー・・・もしかして逃げられた？それとも違う場所？）

「誰？君。」

青年のさわやかな声が聞こえた。雪音はその声に顔を向けた。

桃色髪の細身の青年で、さわやかな笑顔を讃えている。

「あの・・・あんたは・・・・。」

「質問してんのはこっちなんだけどなー。」

（天人？何・・こいつ・・・・。）

雪音は眉間に皺を寄せた。この男からにおうのはものすごい邪悪な雰囲気と血の匂いだった。
「私は、ここをぶっつぶしにきた。ていうか天人をね。」
「へー。ただの人間がね。あ。もしかして君、侍？」
雪音の持っている木刀を見てか男は面白そうに聞いた。
「それが？あんた人間じゃないんだね。」
「うん。そう。ねぇねぇ。本当に侍なの？」
「あんたの基準と私の基準は全然違う。あんたがもし刀をぶらさげている人間が侍なのかと思うならそれでもいいと思う。」
「・・・君の基準はもっと違うのかな？」
「言う必要はない。あんたは天人なんでしょう？阿片を作った・・・・。」
「阿片？ああ。これのこと。」
男は懐から紙包みを取り出した。そしてそれを出すと阿片が。
「ここは・・・すべての阿片があるの？」
「あはははは。君、頭悪いんだね。そんなの俺が答えると思ったの？」
雪音は男を睨んだ。こいつの笑顔には何もない。この笑顔は鼻につく。雪音は作り笑いをして。
「ええ。思ったわ。」
神威はこの女の雰囲気が結構気に入った。神威にはわかったのだ。この女はずっと孤独と血に囲まれ生きてきた。そこらへんのただの人間とは違う。
「・・・教えてもいいけど、教える義理はないんだよね。」
「そうですか・・・・。なら力づくで聞きましょうか。」
雪音は木刀をぬいた。そしていっきに間合いをつめて男にうちこんだ。
男はその打ち込みを決して避けようとせず、受けた。そしてニヤリと微笑んで雪音の腕を掴み、骨を折った。
「っ！！！」
「へー。叫び声をあげないんだ。聞きたかったのに。」

雪音は反射的に神威を蹴り飛ばした。神威は思ったよりきついけりだったのでふっとばされてしまった。壁に激突するほど強いけりだった。
雪音は蹴った瞬間倒れたがすぐに立ち上がった。でも荒い息が続いた。
（畜生・・・。左腕をやられたっ！！だけどなんなの？あれ・・・・反則的な強さ・・・。でも人の顔をしてる・・・。）
雪音が考えをめぐらしていたとき、扉が開いた。
「雪音さーん。どこですかー？」
「馬鹿、新八ィ！こういうとこは敵陣に乗り込むんだぞ。かっこよくびしっとだな・・・。」
「そうアル！新八のせいで台無しアル！！」
と万事屋三人が入ってきた。何も知らず・・・・。
この天井が高い、広さもある工場のような家は真っ暗だった。明りというものがない。
だから神威と話せている雪音は少しおかしいのだ。
（そういえば・・・そうだ。この暗闇を見れるのは・・・天人。ていうかこの女。人の形・・・。）
「ねえ。君の名前は？」
わざと左腕を掴み、壁に雪音を寄せ、聞こえない声で男は言った。
「・・・・ゆ・・・きね・・・・。」
「雪音か。お前は夜兎族か？」
雪音は神威を睨んだ。すると神威は雪音の首を絞めた。
「おい！！雪音ェェ！どこだァァァ！」
（この声・・・たしか・・・・。）
会ったことがある。あの侍か。神威は益々笑顔になった。
さきほどの質問に雪音は目を泳がせている。わからないのか。
「特徴ではお前は夜兎だ。でも弱いな・・・・・。」
弱いのはつかえない。仲間にくわえてもよかったと神威は思うがこうも張り合いのない。だいたい今回の仕事は遊びのようなものだ。

報酬がいいと無理やりさせられたのだ。
「黙れ・・・・・。」
首をこんなに強く締め、左腕もおさえているのに雪音は抵抗を続けた。
「あんた・・・・臭いんだよ・・・。私の匂いと同じ・・・。気に入らないわぁ。人殺し・・・。」
この言葉は雪音がつねに自分に言い聞かせている言葉だった。
全部自分がいけない。誰も傷つけてはいけないと言い聞かせて・・・。
「あいつらを殺すんでしょ？私も殺すのでしょう。いいよ。殺しても。でもあんたのやっているのはただの弱い者いじめだよ。」
雪音は神威の右手を掴んだ。神威は驚いた。どこにこんな力が。まさかこの右手が折れているとは・・・・。
「なめないでよ・・・。」
神威の右手を折ると同時に雪音は心臓のあたりに木刀をぶつけた。
「ぐっは・・・・。」
さすがの神威も声がでた。神威は雪音から離れ、距離をとる。
そして雪音の綺麗な水色の澄んだ瞳を睨んだ。
「雪音ちゃーん！！どこアルかー？」
「・・・・。」
神威は薄く微笑んでまた雪音に近付き、胸倉をつかむ。
「君は結構頼もしいのかもしれないね。いいよ。時間あげる。俺は雇われただけ。ただ阿片を守るようにね。」
神威は持っていた阿片を雪音に渡した。雪音は震えながらその阿片を握った。
「ここには少ししかないけど十分なほどだ。早く燃やしたほうがいいかもね。」
「・・・・どうして・・・・。」
「ん？ああ。俺、君を殺したくなった。だから、早くそれ治して？君の言う通り弱い者いじめは俺の性に合わないから。」

神威は微笑みをたやさない。何を考えているかわからない。でも雪音は。
その強い瞳で神威を射抜いた。
「中心になって阿片製作をしている天人は・・・。」
「俺の雇い主の名は、瑠璃(ルリア)倦人に近い顔してるけど全員生まれた時から中年の男で、目が悪い。だから殺すのは簡単だと思うよ。」
「・・・・・。あんたは雇われただけで何もする気ない・・？」
「うーん。だから・・・・。」
神威は雪音の耳元で囁いた。
「俺は強い奴を殺したいんだよ。」
「・・・・っ！私は強くない・・・・。」
神威は笑みを少しの間消して、女を見つめる。そして解放し、背を向けた。
「それは君が決めることじゃない。じゃあ。妹によろしくー。」
神威は一瞬で消え去った。
雪音は鉄の大きな棒たちが倒れると思って持たれるのをやめ、なんとか気配のあるほうへ足を動かした。しかし腕の激痛が雪音の全てを犯した。
「がはっ・・・。」
何故か無性に吐き気がしてその場で吐いてしまった。すると。
「ああ！！雪音ちゃんが吐いてるアル！！ヒロインじゃなかったアルか！？」
「ヒロインは自分だっていつも言ってただろうがァァァ！それに自分思い出せ。お前も吐いてんだろ。」
「もう！銀さん、神楽ちゃん、そんなこと言ってる場合じゃないって！！雪音さん！！」
新八が雪音を支えたが。
「俺にかせ。」
桂が雪音を抱えた。そしてエリザベスに雪音を持たせる。
「雪音。」

「桂君・・・？」
雪音は重い瞼を少し開いた。
「何があった！？その腕は・・・。」
（ああ・・・・。そうか・・・・・・。彼は本当に強かったんだ。）
今まで闘った誰より彼は強かった。雪音は昔、暗殺ばかり行っていた。その時、気配を完全に闇にくらます術を覚えた。この空間の暗闇は本当に暗い。今いるところは出口の近くなのでかすかな光がある。が、先ほどいたあの隅はまったくない。神威も雪音と同じく完全に気配を消すことができたのだ。雪音が暗闇の中を見えているのも昔のことがあるからだ。
「少しね・・・。でも阿片の手がかりがわかった・・・。調べる・・・。」
雪音は瑠璃倦という名を話した。名前がわかれば少しは真選組で調べることができるだろう。
「そうか・・・・。俺も調べることにする。エリザベス。すまんが雪音を屯所まで連れて行ってくれ。」
いつになく真剣な表情で桂は去っていく。
「いいよ。エリザベス。俺たちが連れて行く。」
エリザベスは何も言わず、銀時たちに雪音を預けて行った。彼も桂のあの表情が気にかかるのだろう。
「本当に・・・・雪音さん。大丈夫ですか？」
「大丈夫よ・・・・本当に。」
雪音は精一杯微笑むが激痛でもう起きているのも辛かった。
「とりあえず帰る。雪音我慢しろ。」
「ありがとう・・・。」
雪音はもう話すこともできずいつの間にか眠りについていた。

第二十八章　破壊は快楽（後書き）

神威の口調が違うかも・・・・。

第二十九章　霧に霞む歯

雪音は二週間は絶対安静と医者に言われ、屯所の自分の部屋で窮屈な日々を送っていた。新発売のゲームは全てクリアしてしまい、今はそんなやる気もない。
怪我してから一週間、連絡はない。
「ちゃんとやってんのかしら・・・。」
雪音は回復が早い。ちょっとした怪我なら小一時間で治ったこともある。今歳をいってきて昔ほどの回復力はないことは知っているが。
「おい。入るぞ。」
一言低い声で言った土方は襖をあけ部屋に入り込み雪音を見下ろした。
「情報だ。お前の言っていた瑠璃倦がここにいる。」
「ん・・・・ここは・・・・。海賊か!!」
グー〇ル地図の印刷された綺麗なプリントに赤いペンで丸印がされている。こんなところに建物はない。
「ここから高みの見物してるみてえだ。ジャック・ス〇ロウもビックリの船の中でな。」
「へー。これは誰が？銀時たち？」
「万事屋は何もしてねえよ。ただ・・・・。」
「ただ？」
「俺たちが仕事してりゃしつこく聞いてくる。てめえのことをな。」

「私を？」
土方は頷いただけでそれ以上言おうとしない。
「もう少し寝とけ。」
バンッ！と襖を閉めて土方は消えて行った。
（なんで・・そんなわかりやすいのかな。皆・・・・。）
単純でおかしくなってしまう。
（私もだけど・・・。）
雪音はこんなニートのような生活も悪くないといつしか思っていたが動かないといけない。だって・・。思い出せば。

死に行く人の顔。自分を憎む目。泣き叫ぶ声。残された家族の絶望。

それを全部見て聞いた雪音は自分が嫌いだ。
憎まれて殺されるべき人間・・・。そう自分は永遠に幸せになどなれない。
泥水をすすり、草を食べ生きる・・・原始人みたいなそんな生活をすればいい。
屑、塵。そんな呼び名がふさわしいだろう。
なのに。

雪音はむっくり起き上がりまだ痛む腕を掴んだ。包帯をはずす。
（何故私は・・・・。こんなにも幸せなのだろう。）
何故自分は幸せになってしまったのだろう。
報われない。誰も・・・。
今度も天人を殺したら誰か自分を憎むだろうか。
（そうなればいいな・・・・。）
誰かに憎んでほしい。そう願っているのに・・・・。
どうして誰かに感謝されたいとも願っているのだろうか・・・・。

雪音は当然のごとく屯所を抜け出した。
「雪音さーん。」
屯所の門を出る前に沖田と出くわした。
「なあに？」
雪音は優しく微笑んだ。
「俺も行きます。」
「なんで？」
「知ってるからー。」
子供のように沖田は言う。それがおかしくて雪音はふふと笑った。
土方は沖田にだけしかこさせないのか。

それとも沖田が無理やり来たのか。
「総悟。あんたの首飛んでも知らないよ？」
「大丈夫ですよ。そん時は土方さんの首ももぎとってやりますからぁ。」
「そう。」
何故自分には・・・仲間がいるんだろう。
独りでよかったのに・・・・・。
そうか。私が求めたからか。
私が自分で命を絶つのもできないからか。
（私は弱いんだよ・・・・。神威さん。）
雪音の予感はあたる。神威。あの男が来る。
「妹・・？」
すっかり忘れていたけれど神威は妹によろしくと言っていた。
神威の特徴は白い肌に青い瞳に・・・。桃色の髪。
「神楽ちゃん・・・？」
「雪音さん？」
「ああ。ごめんなさい。」
雪音は手をふって謝る。そして前へ進みだした。

「どうやって入りやす？」
「どうやってって・・・・ねぇ？」

二人は驚愕した。というのも。地図通り行ったのは良い。船もあった。だが・・・。
「あれはないわー。」
雪音は棒読みで言った。目に映るのは盛大な黄金の超パーティーしますきびうんこみたいな船だからだ。
「なんかあの魚みたいなのうんこに見えるんですけど・・・。」
「雪音さん。そう言うならあの帆の絵なんてでっかいお父さんですよ。」
「でっかいお父さんって・・・・・あんた・・・。」
「あんな船行きたくない。」
「うん。同感。でもあれに瑠璃倦がいるんでしょう?行って脅しでもなんでも・・・・。」
「いやいや。よく考えれば殺したりしたら指名手配ですぜぃ?」
「そんなの大丈夫よ。私たちは人斬りなんだから・・・・。」
もう夜だ。ていうか道のど真ん中で覗いていたら怪しい。
船までは距離があるが目と鼻の先だ。
「今日、パーティーがあるみたいね。ほらあの港になんかコスプレの人たちが・・・。」
「ホントですね。俺たちもコスプレすればいいんじゃねぇですかぃ?」
それはいい考えだ。しかし・・・。
「私ー何にしようかなー。いっぱいあるのー。えっと執事とか・・・えっと・・・。忍者とか死神とか海賊とか・・・。」
「雪音さん。あれなんかどうですかぃ?」
沖田が指差したのはさっきと同じ港の方。でも人をさしていた。あの黄金の船に乗り込むため皆並んでいる。もちろんコスプレして。
その中の、メイドと執事の服を着ているカップルを沖田は指差した。
「うん。あれ全然似合ってないしいいよね。」
雪音はとびっきりの笑顔を浮かべ港の方へ歩いて行った。

「あのー。そこのお二方。」
「ああ？何アンタァ？」
雪音が笑顔で声をかけると眉毛のないデブの雪音と同じ金髪をしている女がこちらを向いた。連れの男は女と似ている。
雪音は同じ金髪で好感をもてそうだったが染めているものだとわかると一気にさめた。
沖田は知らんぷりしてここでは助けてくれないようだ。
「あの・・・すみませんが服を貸してもらえませんか？私たちもコスプレしたいんです。」
（あれ・・・。今思ったけどこれ・・・サイズ。）
「はぁー？アンタァ何言ってんのォ？マジバカじゃねぇ？パアネエ！！」
（いちいちムカツクなぁ・・・このクソデブよぉ・・・・。）
雪音は怒りに震えながらも沖田に耳打ちした。
「ねぇ。総悟。あれサイズあってないよ！ほか行こう！？」
「駄目です。雪音さん。考えてもみてくだせぇ。ここはオタク共の聖地。簡単に渡すのはこいつらだけでさぁ。見てください。もう皆

船で満喫してやす。」
「えっ！？あっ！ホント！！」
船を仰ぎ見れば皆一流のコスプレイヤー。こいつらはただの馬鹿という訳か。
「あああ！もう時間ないの！！お願い貸して！！お金はあげる！」
「たったの二千円で一万もしたコスプレ渡せるかァァ！！ボケェェ！！」
「ちょっとシズちゃん・・・。いいじゃない。俺たちどうせ行くところもなかったから来たんだし・・・。」
「何言ってんだカズ！！いい訳ねえよ！」
「ちょっと！言っとくけどね！江戸じゃ二千円札珍しいのよ！ありがたく受け取りなさいよ！！」
「てめぇは黙ってろォォォ！！二千円札いばってんじゃねェェ！！」
「二千円札なめんなボケェェ！使いにくいとか言うな！！」
「誰も言ってねえだろォォォ！！そんなことォォォ！！何この女！？可愛い顔して意味わかんないよ！」
するとシズちゃんは何故かカズのほうに向いて胸元を掴む。
「ねぇ・・・。カズ。あんたこの女が可愛いから渡そうと思ったの！？」
「え・・・・・。」
カズの表情はバレバレ。
「き～～～～！！何よ！！何よ何よ！！あんたなんかどうせ整形よォォォォ！！」
「そんなことないんですけど。」
雪音は疲れてきて話すのも面倒になってきた。でも本当に馬鹿なカップルだ。二千円のことを馬鹿にした。
「もういいわ！くれてやるわ！！この二千円でパフェでも食ってやるうううう！！」
そう言うと下に着ていたなんか温かそうなタートルネックとスパッツでのさくさ帰って行った。メイド服はおいてくれた。カズはパン

ツ一丁で行ってしまった。
「ふう。なかなかいいやつね。よし。これ着ていきましょう。」
「・・・・雪音さん。もしかして二千円札大事にためてる感じだったんですかぃ？」
「え・・・・。なんでわかるの？」
「サイフの中、二千円札ばっかり入ってましたから・・・。」
バレバレでしたといわんばかりに沖田は微笑んだ・・・・。

第三十章　過ちの連鎖

「ねー。とりあえず入ったけど・・・私たち場違いじゃない？」
「そうですね。土方さんを連れてくるべきでしたァ。」
二人は敵の本陣に乗り込んだものの呑気に会話していた。船は広くていいのだがこの溢れんばかりの人。人。
「ふふ・・でも大丈夫よ。私は夏コミも冬コミも経験してるから！！」
雪音は毎年開催されるコミケに行っていた。最近では売り手のほうになって結構な額を稼いでいる。あのコミケに比べればこのコスプレの人の数などどうってことない。
「でも・・・警備もなし？本当に阿片を作って売っているの？この人たちが買うとは思わないけど・・・。」
雪音は周りを見渡すが何も見えない。人だらけだ。
「・・・・とりあえず、あそこで開催者の言葉があるそうでせァ。雪音さん。いきやしょう。」
「ええ・・・・。」
雪音は自分の知っているキャラのコスプレを着ている人が気になって仕方がなかった。
「総悟～私も着たいよぉ～。」
「気持ち悪いです。雪音さん。３Ｄ〇買ってあげませんぜ？」
「えええ！！それはやめてください！！沖田さん！！」

雪音は沖田の袖にしがみつき沖田にはぐれないようついていった。

沖田は自分の恰好とか興味ないだろうが、沖田は結構顔がいいしスタイルもいいので女子の目が沖田にいっていることが雪音にはわかっていた。

「さっすがね・・・・。」

「はい？」

「いいえー。一流のコスプレイヤーに沖田先輩もなれるんじゃないかと思ってねー。」

「はは・・・。冗談は土方にぶつけろこのヤロー。」

二人は似ているところがあるので何にも気にしない。

「ね。もうはじまるかな？」

「・・・・瑠璃倦がノコノコ出てくるかが問題ですね。そんなやられるタマじゃねえんじゃ？」

「さぁ・・・・。私は命とるつもりないけど向こうが命とるのならやるしかないと思う。口で丸め込むのが理想だけど、普通の天人はそんなのしない。人間を馬鹿にしてる・・というか自分たちのほうがすぐれているものね。当然だわ。」

「そりゃそうですね・・・・。」

「私は阿片を止められたらそれでいいの。捕まって殺されても構わないわ。」

雪音の真っ直ぐな意志を聞いて彼女は出会った頃と変わらないと思う。人や時代、何もかもが変化していくのに彼女の意志は揺るがないのだ。そんなところも尊敬すべきものだろう。

雪音の横顔を覗いていたその時。
歓声がおこった。コスプレイヤーがたくさんいる中、その人は輝いていた。色んな意味で。

「何アレ・・・。」
「・・・・・（どんびき）」
沖田はどんびきしているようだけどほかの客は大盛り上がり。雪音は口をあんぐり開けていた。
現れた人は・・・。顔は中年にも見えない。肌が白くて切れ長の青紫に輝く瞳。体は・・・金色。
何をぬっているのか知らないが真っ金。ありえない。下も褌だけして、他は金。スーツでも着ているかと思えば裸だ。
「みなさーーーん。今日はお越しいただいてありがとうねーーー♪」
「イエ～～～！！！」
（なんだ・・・このノリは！！しかもなんでオカマ口調なのーー！？？）
雪音は心の中で叫んだが、普通に声に出してもほかの人の声で聞こえないと思う。
（あんなのが・・・阿片を作ってる親玉！？きもすぎるでしょう！）
キモイとかそんなレベルじゃない。キモイとか言ってごめんなさい。あれは芸術なんだ。飾るものなんだ。つっこんだら負けなんだ。自分は負けだ。
「さぁ皆楽しんでいってね☆今からカラオケ大会～優勝した人には豪華なプレゼントがあるよ～！参加賞もあるからね～。」
声も完璧に裏声。ありえないって。
「同じ男として今、あの人殺したいです。」
「うん・・・・総悟。ちょっと待って。ね？」

殺すつもりで来たのだがあれはどうともいえない。うん。沖田の言うことすごいわかるよ。
「じゃあ・・・・か・い・し。」
その言葉は闇に満ちた声だったと雪音だけは気づいていた。

やがてカラオケが開催されて、コスプレの方たちが色々歌っていた。ステージから瑠璃倦は去って行った。
「追いかける。」
雪音は小さくそう言い、ステージへかけた。
「私に何か用かな？」
「！！」
目の前には一瞬であの真っ金を消した男がたっていた。よく見れば少し皺があったり中年の男。腹も少し出てる。でもその青紫の瞳だけは若々しく雪音を見透かしていた。
「雪音さん！」
沖田が何故か遅れてかけてきた。雪音は威圧と殺気を瑠璃倦にぶつけていたが瑠璃倦はどうじなかった。
「御嬢さん。今日のパーティーは楽しいものだよ。皆の輝く笑顔を

見て御覧？素晴らしいと思わないか？この笑顔が絶望の顔に変われば・・・。」
「あんた・・・何・・・・？」
気が付けばオカマでもなんでもなく、ただただ冷淡な全てを糞だと思っているような笑顔を瑠璃倦はしていた。
雪音は自分の頬に血がにじんでいることにも気づかなかった。
「綺麗な顔をしているね・・・・。」
瑠璃倦は目が悪いらしく（神威には聞いていたが）雪音に顔を近づける。
それを喰うように沖田は見ていた。沖田の視線に気が付いた雪音は目を泳がせてなんとか沖田に抑えるよう訴えた。
雪音は抜刀しようとするが指が動かなかった。
（どうして・・・動かない・・・。）
「薬のことか・・？」
「！！」
「・・・・ふふ。あのすばらしさがわからない人間いたとはな。」
沖田が抜刀し、瑠璃倦の腕が落ちた。紫色の血を腕からだした。
「総悟・・！！」
瑠璃倦は目と口を吊り上げて笑んでいる。
「ははは。いいよ。腕をやってくれたか。そうか。そうか・・・。」
「あんた頭おかしいだろ！！何故こんなところで私たちを挑発して・・・。」
「挑発？はは。頭がおかしいのは君らだ。わたしは薬を君たちに与えているだけだ。そして喜ぶ人もいる。だが君らは違う。」
「当たり前でしょう！？中毒者がどんな死を迎えると思ってるの！？」
「それは自らが望んだことだろう？」
「違うわ！！そんなものなければ・・っ！」
「わたしは昔、人間が天人に流行させたと聞いたが？」
腕を斬られているのに淡々と話す瑠璃倦。

雪音は舌打ちした。
「過ちを正すのが過ちを犯したものの当然の道理だろう。」
そして雪音は沖田の剣を沖田の手から奪い、瑠璃倦の心臓につきさした。

「ははっ。馬鹿だなぁ。それ偽物だよ？」
「！！」
振り返ればそこには忘れもしない笑顔があった。

第三十章　過ちの連鎖（後書き）

意味わかんない。

第三十一章　全てはその先のために

「神威・・・・さん・・・・。」
雪音がゆっくりと天井を仰げば、丸い舞台の上、先ほど瑠璃倦がコスプレ姿をしていたところに何も気にしないで立っている。
「やあ。雪音。」
神威は美しい微笑を浮かべ雪音に挨拶した。初めてあの倉庫で対峙した時と変わらない。その異様にある殺気も・・・。
「雪音さん！それを離してくだせえ！」
沖田が声を張り上げた。雪音は知らぬ間に震えていた。これは嬉しい震えだ。恐れではない。雪音は自分で気色の悪い笑みを浮かべていることを今気づいた。
「ええ・・？？え・・・？」
紫の血が雪音の腕にべっとりついていた。偽物の瑠璃倦は息をせずただ死んでいる。でもさきほどの瑠璃倦の顔をしていなかった。
沖田は雪音の腕をきつく掴んで雪音に刀を離せさせた。パリン。と刀が音をたて落ちる。
雪音が沖田の輝く目を見ると沖田はかすかに笑んでいる。雪音は途端安心した。
「お前は何者でさァ？」
「俺？俺は雪音の恋人だよ？」
「神威さん・・・・？」

雪音はちんぷんかんぷんというような顔をしていた。
「いやいや。最近覚えたんだ。俺ね。まだまだ若いから考えなかったことがあるんだけど、俺の子供が俺のこと殺しに来たら面白いな〜って。俺がしたように。」
「あんた・・は・・。」
「ねー。雪音。そう思わない？」
その瞬間ゾクリと雪音は背筋が凍った。彼の雪音を見る目は雪音を全て見透かしていた。
雪音の抱えている希望も、絶望も。力も。雪音の弱いところも全部。
「いや・・・・。」
雪音はそこから逃げ出した。無意識にしたのだが逃げたいと思い続けて行動にうつしていた。だが逃げられなかった。
「逃がさないよ。雪音。」
神威が目の前で笑っている。ニコニコ。笑っている顔が怖いなど普通思うだろうか。
神威の腕がのびてくる瞬間。白い閃光が目の前に広がった。
沖田が神威に斬り込んだのだ。
沖田の俊足の剣も神威は動じずひらりとかわした。
「俺を殺すつもりでやった？」
神威は嬉しそうに沖田に聞く。舞台裏でこんなことしていても人々はパーティーを楽しんでいる。
「あたりまえだろ。このイクラァ。」
「・・・・・・。」
「気に入らねえ。」
沖田は小さく言うとまた斬りかかった。
それでも神威は綺麗にさけていく。
雪音はただただ立ち尽くしているだけだった。
「あははは。ヘタクソだね。」
神威は沖田の頭に手を置き、その上を開脚とびした。
そしてそのとんだ先に雪音がいた。

神威は雪音に飛びつくと雪音は押し倒されてしまった。
神威の顔が目の前にある。瞳を見ればどこまでも深い青い瞳。不意に神楽の顔が思い浮かんだ。
「雪音。君は今日、ここで死ぬ？それとも生きる？」
「・・・・・！」
「さっきのは偽物だけどこの船に本物はいるよ。彼は用心深いからね。・・・・君の中に住むものが現れたら俺は君を殺してあげる。今は君の言うとおり弱い者いじめだから。」
その後ろから沖田が剣を突き刺した。その刃は雪音の頬の横に突き刺さる。
神威は少し距離をとったところに立ち、沖田を睨んだ。
「殺すつもりだったのか？」
沖田は答えなかった。
「さあて。時間だね。いい？雪音・・・覚えておいてね。」
そう言い放つとあたりは暗闇につつまれる。
人が雪音と沖田に覆いかぶさり二人は動くことはできなかった。そしてそのまま意識を失った。

悔しい。悔しい。
殺したい。殺したい。全て。葬ってしまいたい。

そして一番殺したいのは自分だ。
阿片も何も止められない過ちを犯した自分。
彼は何を考えている？
結局は私を殺すのではないか。
馬鹿げたことを言っているけど・・・・。
昔の自分と似ていると思った。

雪音が目をしっかり開けると腕はきつく縄でしめられている。この場所は・・・・。
「目覚めたの？」
甲高い声が聞こえた・・・・。

第三十二章　運命の選択

甲高い声の方へ目線を向けると、さっきと同じ人物、瑠璃倦だった。
顔だけは瑠理倦だったが身体は黄金の身体だった。
ということはこいつが本物なのか。
「瑠璃倦・・・・？」
「そうだよお☆」
やはり本物のオカマなのか。ぶりっこのままだ。顔は男だから正直気持ち悪い。
雪音は腕を動かしきつく結ばれている紐をなんとかしようとしたが無駄だった。特別な紐のようだ。
横を見れば豪華な船長室の背景に沖田もいる。
沖田は軽く雪音を見つめると目で微笑んできた。口は全然動いていない。
雪音も目で笑って見せた。
「さぁ。話してちょうだい？神威。この子たちのこと。」
雪音は神威のほうを向いた。神威はものすごい笑顔で説明しはじめた。でも一瞬雪音を見た神威の顔は恐ろしい笑みを浮かべていた。
「こいつらは瑠璃倦の阿片を狙ってきたんだよ。瑠璃倦にやめてもらいたいってね。瑠璃倦を殺すつもりで来て、あの分身を殺したんだよ。」

「そうなの？金髪子猫ちゃん。」
瑠璃倦はその艶のある声で雪音に囁く。雪音は寒気が止まらなかった。
「そんなんで言うとでも思ってんの？死ぬのは私たちだよ。」
「ふふ・・・。それもそうねえ・・・・。ねえ。私は見たところ何に見える？」
「ド変態のコスプレ馬鹿天人。」
「だいたいあってる。」
神威が笑顔でつっこんだ。
「ちょっと神威！！何言うのよ！私はコスプレをしてるんじゃないのよ！芸術をみんなに見せているの！」
「何言ってんだァ。この船にいんのはコスプレイヤーばっかだろうがァ。」
沖田もつっこむが瑠璃倦は。
「違うわ！もう、いい。私の芸術がわからないなんて駄目な男たちだわ。ふん。」
可愛いくもない怒り方だな。皆同じように思っていた。
「私には阿片も芸術なのよ。わかるかしら？」
「！！」
瑠璃倦はゆっくり語り始めた。
「阿片の素晴らしさは神にも等しいと私は思うわ。喜ばない人間なんていない。皆、あれに惹きつけられるわ！！」
「黙れ！！お前の考え方は最悪の考えだ！」
「まあ。何をおっしゃるの。神威。この子殺しちゃって。」
瑠璃倦は神威に命令する。神威は仕方ないな・・・と嬉しそうに言い、雪音に近付いた。
神威は耳元で。
「あれ？びびってないの？」
「あなたに殺されることに何故恐怖する必要があるの？あなたのよ

うな強い人なら本望よ。」
「・・・！！」
（その考え気に入った・・・。）
神威は腕を雪音の腹に突き刺した。雪音は大量の血を吐く。
「ぐっ・・・・。」
「雪音さん！！」
「オホホホホ！！いいわあああ。神威。よくやったわ～～。」
瑠璃倦は高笑いをした。沖田は瑠璃倦と神威を鋭くにらむ。
「てめえ・・・許さねえ・・・・。」
「馬鹿だね。人間って。縛られても死ぬってわからないかな？」
神威は雪音の血をつけた手を拭かぬまま、沖田に近付いた。
「さあ！神威！邪魔者は消してしまいなさーい！ウフフフ！！」
甲高い声は室内に響いた。静まりかえり、不覚にも沖田は死を覚悟した。この男にやられるなど認めたくはなかった。
神威の腕が伸びてきたその時ーーーーーーーー。
ぎしっ！神威の腕が突如折れた。
「！！！」
「何！？」
三人は驚愕した。なぜならさっき神威にやられて倒れていたはずの雪音がむっくり起き上がって神威の腕をしっかりつかんでいたのだ。
その顔を神威と沖田は見ることができた。
その顔は沖田は見たことがあった。あの高杉がいた船でーーーーーーー。高杉を追いかけようとした狂った雪音だった。
美しい輝く目がどすぐろく水色に清澄しているが、目玉がでている。口元は三日月を帯びているが、口から漏れ出す血が黒くて印象を怖くさせる。
ともあれ絶対にいつもの雪音ではない。
雪音は気色の悪い笑い声を発し始めた。その笑い声が空間を全て占める。
「待ってたよ。そんな風になるのをさ・・・。」

神威は雪音の足を蹴った。その力はすさまじく雪音に効いたようだ。
しかし雪音も負けていない。足を折られる前に回避し、掴んでいた神威の腕を離し、神威の後ろに回った。そして折っていないもう一つの腕を折った。
さすがの神威も激痛だったらしい。目を細めていた。
雪音の追撃は続き、神威はぼこぼこにされていく。
「何なの・・・この子・・・人間じゃないの??」
「雪音さん・・・。」
雪音の名前を沖田はつぶやく。彼女が知っている彼女ではない。それが沖田にとって信じられぬことだった。
「くそっ！」
沖田は腕を動かし紐はずそうとしたが無理だった。服が切れていき腕からところどころ血がでてきた。
沖田は歯をくいしばった。口からも血が溢れ出した。
瑠璃倦は震えはじめていた。目の前に広がる死闘と血が瑠璃倦には苦手だったのだ。
天人であっても殺し合いは好きじゃない。瑠璃倦はそう思い続けていた。しかし神威を雇ったのは自分が死ぬのは嫌だったからだ。
夜兎の能力は聞いていたから・・・。
「なんで神威がやられるの!?おかしいじゃないの!!」
「黙れキンキラ野郎・・・。」
沖田は本気の殺気を瑠璃倦にぶつけた。瑠璃倦は息ができなくなった。
「な、なんなの!?私に何をしてほしいの!?私何もしてないわよ!!」
「してるだろうが。阿片を作って・・・。」
「そ、それは・・・！わ、わかったわ！もうこの星には来ない！だから助けて！」
「いいぜ・・・。俺の腕をほどきな。」
そう沖田が言うと瑠璃倦は沖田を縛っていた紐をほどいた。

沖田はゆっくり立ち上がると、瑠璃倦が沖田の刀を持っていたのでそれを取り上げ刀を抜いた。
「嫌っ！！」
瑠璃倦に向けると瑠璃倦は叫んだ。
「てめえは後だ。クソヤロー。」
沖田は舌打ちしながら雪音のほうへ向いた。神威はやられ続けている。顔の原型が普通はないだろうにまだまだ平気そうで笑顔だった。
「いいよ。雪音。」
神威は押し倒されている状態から雪音の頬に触れた。雪音の目玉に触れそうになる指は冷たかった。
そして雪音の頬にはべっとり血がついた。
その瞬間雪音の目から涙が零れ落ちた。
「可愛い雪音。可哀そうな雪音・・・・。俺、あんたみたいな人間初めてだ。いや、君は人間じゃないか。君は夜兎だ。わかる？」
雪音の涙が神威のかかっても神威は気にせず雪音を見つめて見透かしている。雪音はたえられなくなった。自分が人間じゃない。すさましい破壊力を持つ夜兎・・・・。
今まで天人を殺してきた・・・・・。天人のくせに天人を憎みながら・・・・。
馬鹿じゃないか。今までしてきたことが全て無になった。
「私がしたことは許されない・・・・・。」
わかっているそんなこと。とっくの昔に・・・。
「泣かないで。さぁ。俺をここまでしたんだから死ぬ覚悟はできてる？雪音。でも惜しいなぁ。俺と結ばれたら俺のしたいことできるのに。ねえ。雪音。ここから離れて俺の仲間にならない？」
「・・・・！」
「お前がいる場所はここじゃない。わかる？お前は人間じゃない。お前がいるところは人間しかいない。お前は自分の存在がどんなものが理解できるだろ？そのままいたら迷惑かけるよ。」
くすくす笑う神威に沖田の理性は吹き飛んだ。

雪音がいるにもかかわらず突っ込んだ。
「黙れ！！雪音さんがいる場所はここだ！！」
神威は腕が動かないので足で受け止めた。普通は斬れるだろうに全然斬れなかった。鋼のような硬さだ。
「何？お前は雪音と言う矛を守れるの？雪音ができるのは殺すことだけ・・・お前たちとぬくぬくするなんて俺がさせないよ・・・・。」
神威のけりが沖田の腹に入った。沖田は吹っ飛ばされ、壁に激突した。
「がはっ！！」
神威は沖田を無視し雪音に振り向いた。
「さぁ。雪音。俺と行こう？そこの奴は、阿片と共に俺たちが消すよ。ね？」
神威の微笑みがどうしようもなく先生に見えてしまった雪音は何も考えることができなかった。泣き叫んで死んでしまいたい衝動に駆られる。
何しに来たのだろう。自分は。ただ殺戮をしたかったのか？違うはずだ・・・。
そんなことないはずだ・・・。
なのに。もう神威を殺すことも、阿片を消すこともどうでもよかった。
ただ誰かのぬくもりに触れたい。誰かに助けてほしい。
そして目の前に映る神威は雪音を救おうとしてくれる・・・・。雪音にはそうしか思えなかった。
雪音は神威の服の裾を掴んだ。
「雪音。俺の部下になってくれるんだね。」
神威は折れている腕で雪音の唇に触れた・・・・。

第三十三章　空からの救済（前書き）

更新遅いです・・・。

第三十三章　空からの救済

神威の指が唇に触れた瞬間、雪音は自分の見てきた瞬間が走馬灯のように駆け巡った。その澄んだ瞳には黒々とした何かが映っていた。雪音の目には絶望しか見えていなかった。しかし今は希望にあふれる未来を描くことができる。

「ごめんなさい・・・。神威さん。」

神威の眉がピクリと動いた。雪音は神威の腕をきつく握る。

「いくら・・・・・私が化け物でもなんでも・・・・・。もう逃げらんないんだよ・・・・・。」

「雪音・・・・・。お前はわかってないね。俺はお前を救おうとしてるんだよ？」

「そんなの・・・・・嘘だよ。だって神威さんは私と同じでしょ？殺戮しかできない矛・・・・・。私はね。ここしか生きれないの。ほかの場所ではもう私は何も見えない。」

雪音の意志は揺るがない。もう決めたらそれでいい。

「私は、あなたとはいれない。」

「お前は死ぬ。俺が殺す。それはわかってる？」

雪音は鼻で笑う。

「ええ。私は人ではないから・・・・・。ねえ。神威さん。考えた事ある？」

「・・・・・？」

「自分が死ぬ瞬間とその後のことをさ。」

雪音がそう言い放った瞬間に雪音は神威を思い切り殴った。さっき

まで平気そうな顔をしていた神威はふっとばされ、雪音を鋭く睨んだ。
「戦いは死ぬものだ。生きて帰れる方がおかしい・・・・。なんで皆そう思わないんだろう？なんで生きて帰れなんて言うんだろう？」
雪音の言動がおかしい・・・。沖田は動けない身体だったがそう思いながら雪音を見つめていた。
「ちょっと！！神威！！早く・・・・早くっ！殺して！！」
瑠璃倦の叫びを聞かず神威はずっと雪音を見上げていた。雪音はゆっくりと壁で座った体制になっている神威に近付く。
「私がいつも言ってた言葉・・・・・それは。」

さようなら。

死んでしまったら二度と会えないね。
だからこの瞬間に別れを告げよう。
あなたたちと出会えた記憶を少しでも刻んでおこう。
ねえ。そう思うでしょう？

「ありがとう。神威さん。」
神威は何も答えることができなかった。ありがとう？彼女を、仲間を傷つけたのにか？何故彼女はこんなことをされて笑顔で敵に言えるんだ。
雪音は腹を押さえながら、沖田に近付き、沖田を支え、瑠璃倦の元へ歩いた。
「瑠璃倦・・・・。」
「な、何よ！！近付かないで！化け物！！」

瑠璃倦はもう汗を尋常じゃないほどかいていて、金色の体が剥がれていった。
「もうこの星に阿片を持ち込まないで。私が・・・・。」
「こないわ！！こない！！だから殺さないで！！」
雪音は悲しい顔をし、部屋から出て行った。
残された神威と瑠璃倦は今何が起こったかよくわからなかった。
（なんだ・・・・あの女は・・・・。俺が殺したいと思うのは強い奴・・・あいつは間違いなく強いのに殺したくないと思ってしまう・・・。）
「か、神威！！報酬はなしよ！！もう！パーティーでばらまくつもりだったのに！！あの女がいたんじゃ死ぬだけだわ！！」
「うるさいよ。」
神威は何のためらいもなく瑠璃倦の口に手を突っ込んでそのまま奥へ進み脳みそを引き出した。
神威はこのどうしようもない感情を理解することはできなかった・・・。

後日。
「ちゃんと説明しやがれ！！お前重症だったんだぞ！！！！おい！

総悟！！知らんぷりしないで説明しろォォォ！！」
「もううるせえなあ。母ちゃんはよ。いや間違えた土方だった！」
「わざとだろォォ！！」
二人が屯所に帰ってみれば二人はボロボロ。雪音は急所は外れていたがよくあの出血でよくいきていたものだ。雪音は何も言おうとしないのだ。ただ阿片は大丈夫だと・・・・・。それだけいい、手当をしてもらえば部屋にこもりっきりだ。
「あれから阿片の情報は消えたし、購入ルートも全部消えていた・・・。本当に阿片がなくなったってことか・・・？」
土方が煙草をくわえたまま言う。
布団で寝ていた沖田は起き上がって。
「雪音さんが勝った。それでいいじゃないですかィ。」
「そういう訳にはいかねえ！瑠璃倦が行方不明！！雪音がやったのか！？」
「瑠璃倦の捜索願はないそうじゃないですか。瑠璃倦が死んでも誰も困らない。ということでさァ。」
「それは・・・そうなのか・・・・。」
「雪音さんは今、どうしてやす？」
「どうするも何も部屋にこもって寝てる。というか部屋をのぞけねえ。閉めたままなんだ。食事もとってねえだろ・・あいつ死ぬぞ。」
「今度ばかりは・・・・。俺たちじゃどうしようもねえや・・・。」
自分たちの無力さに腹が立つ。
雪音の涙も悲しみも癒すことはできない。
二人は同時に目を伏せた。
「万事屋か・・・。」
「土方さん・・・・。」
雪音を救えるものは・・・・。一人しかいないと二人は同じことを考えていた。

第三十四章　払いのける悪魔

ああ・・・・。
私はただの人殺し。
血を啜るときが一番快感。
こんな女、誰が愛してくれるだろう？
ねえ。先生。先生は私を愛してくれてた？
あの時の私は先生に好かれたくて努力してた。銀時は私のことを嫌いだったみたいだけど。
それでもなんでもよかった・・・・のに。
なんでいってしまったの？私たちを置いて・・・・。
私はもう狂うしかなかった。殺したときだけ・・・。剣を振るう時だけ忘れられるの。
自分が生きていている実感がした。
でもね・・・・。あの雨が降った日。
百人の男に私が袋叩きをされそうになった日。皆刀を持ってた。ああ。私を殺したかったんだな。
私は気が付けば全て切り殺していた。その時の快感といったらもうなかった。
気持ちよくて笑いがとまらなかった。人生で一番最高の気分だった。
銀時が何故か私を抱きしめてきた。あれは・・・・。私が無意識に震えていたからかな。

その時は・・・・・。人生で一番最悪の気分になった。
自分が自分でないと初めてわかったんだ。
そして刀を持つのが怖くなった。持ったままなら私は銀時でさえなんのためらいもなく殺してしまうだろう。
私は泣いて銀時にすがった。もう殺したくない。殺したくない。仲間を失いたくないと・・・。
銀時は私をきつく抱きしめて私の背中を押したのだ。
もう帰ってくるなと。お前は笑えと・・・・。
そう。言ってくれたんだ。

「・・・っ。」
雪音は気が付けばもう夜になっていた。ずっと目を開けてぼーっとしていたのだが。襖は開かないように荷物を置いてあったので誰も入ってきてない。雪音は荷物をどけると襖を開けた。
下を見ればおしそうな食事が置いてあった。思わず笑むと雪音はそ

れをとって部屋に戻った。
残念だが食欲はない。思えばあの顔。神威の人を信じない殺すだけの対象として見る目。雪音と全く同じだ。
「どうしよう・・・・。」
どうしよう。自分は何をしたらいいんだろう。そんなことが頭の中でぐるぐるしていた。
彼がまた自分の前に現れたらあんな風にまた言えるだろうか。本当は彼についていって・・・・そんな考えが浮かんでは消える。
「なんで私はまた剣を持っているのだろう。」
捨てたはずなのに・・・・。
「おい。クサレニート。」
「！！？」
「ネトゲ廃人はいい加減卒業しねえと親孝行できねえだろ。」
現れた正反対の銀髪の男。雪音を拾ってくれた人。坂田銀時。彼は雪音の部屋に入り込んで鼻をほじりながら座った。
「よく・・・・。近藤さんたちが入れたね。」
「ふん。あのゴリラたちに呼ばれたんだよ。雪音ちゃんと話せば金を出すとかなんとか言ってよお。だがこんなに楽な仕事はねえなあ・・・・。」
と嬉しそうに笑った。よほどいい金額を出したのか。
「別に話すことなんかないから早く帰れば？」
雪音は布団に入ったまま出ようとせず、ただ窓の外を眺めていた。
「お前、神楽の兄貴にあったのか？」
「・・・神威さんのこと・・・？」
銀時はその瞳を輝かせた。
「うん。会った。殺されそうになったよ。」
雪音が脇腹を押さえながら言った。
「お前・・・・どうせ誘惑されてついて行こうとか思ったんだろ。」
「どうしてわかるの・・？」
「ふん。お前のことなんか考えなくてもわかる。どっか闇ばっか好

きな習性がある。ゴキブリじゃねえか。」
「うるさいなあ。違うよ。まあ闇に行くっていうのは否定できないけど・・・。」
雪音は淡く笑った。
「俺はな。お前を慰めに来た訳じゃねえ。お前が死にてえなら勝手にしろよ。でもな。お前の命は俺が拾ったんだ。拾ったらなんでも俺のもんだ。わかるか？」
「銀時・・・。」
彼は彼なりの言葉を言っているのだ。
「拾われた身でご主人様に逆らおうなんざルフィが海賊王になるぐらい早いんだよ。」
最後に銀時は雪音の頭をポンを優しくたたくとふらりと出て行った。

銀時はすごい。たった一言で私に生きる希望を与えてくれる。
どうして彼は私をここまで幸福にさせてくれるのだろう・・・。
すごくうれしい。
私は、ちゃんと前を向いてるよ。振り返らないで。振り返ったら無数の手が伸びてくる。
私はその手におびえながら今日も目覚めよう。

明日の希望を夢に見て。

終章　旅立ち

「雪音ちゃん！本当に出ていくのか！！？」
「ええ。今までありがとう。皆。」
今日、雪音は広間に隊士全員を集めて自分が旅立つことを話した。
皆心底驚いているようだった。
「なんでですか！！？相楽隊長がいないんじゃ・・・。」
「私がいなくても真選組は大丈夫よ。」
雪音はすっかり怪我も治り、晴れ晴れしていた。しかし隊士たちの顔は晴れない。この真選組の紅一点だった雪音。彼女は横暴で、変わり者であったが心底は優しく、人を思いやれる心を誰よりも持っていた女性だった。皆、真選組が辛くてやめたいと思う時や、土方に怒られてへこんでいるときなどよく雪音に励ましてもらったと思い出すのだった。
「私は、まあ皆に迷惑かけてたし・・・ニート生活も楽しいけど・・・自立ってえの？したいなあーって。」
皆、雪音の明るい声は聞いていなかったというほど無視した。
（あれ・・・・。）
広間の異様な静けさに雪音は背筋が凍った。なんでこんな葬式みたいな空気なのか・・・。
「まあ。いつか帰ってくるよ。多分。」
「多分ってなんですか・・・・。」

「山崎君・・・・。」
「雪音さんがいない真選組なんて！意味ないですよ！」
（それはない。それはない。）
全然アリだよ。山崎君。言いたかったが隊士たちが口ぐちに雪音を止める言葉をかけてきたので言えなかった。
「おい・・・。雪音。どう落とし前つけんだ？」
土方が微笑んで言ってきたが雪音はどうしたらいいのかわからなかった。
「もう逃げる。」
雪音は勢いよく広間の扉を開け、飛び出した。飛び出す際に、沖田と、近藤の微笑みが見えて雪音は思わず笑った。

自分は彼らを愛し、彼らも自分を愛していてくれたのだとわかって嬉しかった。
帰る家がある幸せを雪音は誰よりも理解できる。
家族が待っていてくれること・・・。
雪音はどんなに辛い環境にいても忘れないだろう。

本当は、自分が彼らの迷惑になるのが嫌だった。ずっと思ってきたが、神威との戦いで、より強くなった。
だって自分は人ではないのだ。
夜兎ととという種族なのだ。
自分が生きる場所は戦場・・・・。彼と同じ考えを自分もしている。

それを否定することは絶対できない。

私は、もう一人じゃない。孤独で戦ってきたあのときはもう戻らないのだ。
私は生きてみよう。離れていてもつながっている絆を信じて。
私は希望を抱きしめながら、闇を歩こう。
どんな闇でも私は切り開いて見せよう。
私を愛してくれた全ての人よ。
私が愛している全ての人よ。
どうかどうか祈りましょう。

未来を抱きしめるために。

泣かないで生きましょう。

私の命の恩人。銀時。
高杉のことも、桂君のことも大好き。
でも男と女じゃなく・・・・・。
仲間だよね・・・。
私は仲間とずっと言われたかったんだ。
でも私の耳は聞こえなくなっていた。
また会えたら言ってくれますか？
私も言いましょう。
貴方を好きだと・・・・。

終章　旅立ち（後書き）

雪音はかなり不幸な印象を受けます。彼女自身そう思っていたでしょう。ですが神様は必ず不幸な女にすることはしません。彼女は人生において一番大切なものを手に入れたのです。大切なものは永遠に増えていくものです。彼女はそれを探すたびに出るのです。私が思うに生きると言うことは生きる意味を探すものです。ですから皆、旅人なのです。旅人は色々なものを目に移し、色々な人と出会う。世界において、人と人は必ず繋がらなければなりません。

雪音は自分の力を恐れられることが怖いのです。自分が化け物だと言われたくはないのです。今のままではまた同じことを繰り返してしまうでしょう。またいつ狂うか彼女にはわかりません。

彼女は死ぬことができないのです。そんな勇気を持っている人間ではないのです。何がなんでも生きなければなりません。今の生き方を満足してしまっては彼女が殺した人々が報われない。彼女の今の心は人を愛すことが好きになっているのです。変わっているかもしれませんがそれが彼女の心です。

彼女は旅をし、色々な人と出会い、また多くの愛を育むのでしょう。そして彼女の闘う意味は過去を消し去るほど強い力を持つでしょう・・・。

終了です。

雪音さんのお話はまたするかもしれません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9774n/

銀魂　もう一人の侍

2011年2月20日17時16分発行